九州横断自動車道関係埋蔵文化財
発 掘 調 査 報 告 書 (16)

四日市上ノ原横穴墓群

2000. 3

大 分 県 教 育 委 員 会

四日市上ノ原横穴墓群
ヨッカイチウエノハルヨコアナボグン

序　文

九州横断自動車道は平成８年11月に大分～米良間の完成をもって九州管内の主要都市と大分市全域が結ばれたことになり、ますますその重要性が高まっているところであります。

大分県教育委員会では、九州横断自動車道の建設に伴い日本道路公団の委託を受け埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は昭和58年以来延べ12年間にわたり、この間に調査された遺跡は30ヶ所を超えます。これらの成果は昭和63年に第１集を発行して以来、順次発掘調査報告書として刊行してまいりました。本書はその第16集であり、玖珠郡玖珠町に所在する四日市上ノ原横穴墓群の発掘調査報告書であります。遺跡からは古墳時代後期の墓が多数発見され、当時の葬送儀礼を知る上で貴重な資料を得ることが出来ました。今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発ならびに学術研究の一助となれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに調査報告を行うにあたり御協力いただいた関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成12年３月31日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設（日田～玖珠間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査は日本道路公団福岡事務所の委託を受け大分県教育委員会が実施した。
3．遺構の実測及び写真撮影は調査員が行い、遺物の実測及び写真撮影は一部を除いて調査員及び調査補助員が行った。
4．出土遺物及び図面は大分県教育庁文化課文化財資料室で管理・保管している。
5．本書の執筆・編集は大分県教育庁文化課副主幹　村上久和、同文化課主査　江田豊、同文化課主査　友岡信彦が行った。

凡　　例

1．当遺跡の名称について、従前は「上ノ原横穴墓群」として調査等を行っていたが、下毛郡三光村に同名の横穴墓群（台帳番号103001）があり、混同を避けるため、今後は「四日市上ノ原横穴墓群」（台帳番号652048）とする。
2．挿図中の方位は磁北である。
3．挿図に使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。また図郭に表示している座標値はキロメートル単位である。

目　　次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査組織……2
　３．遺跡の立地と環境……3
第２章　調査の成果……7
　１．遺跡の概要……7
　２．各遺構の報告……8
　　６号墓……8
　　１群……12
　　２群……18
　　３群……29
　　４群……43
　　５群……52
　　６群……76
　　７群……81
　　８群……111
　　９群……135
　　10－Ａ群……137
　　10－Ｂ群……140
　　10－Ｃ群……146
　　10－Ｄ群……150
　　10－Ｅ群……158
　３．小結……163
第３章　まとめ……170

挿 図 目 次

第１図　調査遺跡位置図（約１/120万）……1
第２図　四日市上ノ原横穴墓群周辺遺跡分布図及び遺跡名（１/2.5万）……5～6
第３図　四日市上ノ原横穴墓群地形図（１/2000）……7
第４図　四日市上ノ原横穴墓群遺構配置図及び立面図（１/500）……9～10
第５図　６号墓実測図（１/40）……11
第６図　６号墓出土遺物実測図（１/３・実大）……11
第７図　１群遺構配置図及び立面図（１/80）……12
第８図　１号墓実測図（１/40）……13
第９図　２号墓実測図（１/40）……14
第10図　３号墓実測図（１/40）……15
第11図　３号墓出土遺物実測図（１/２）……15
第12図　４号墓実測図（１/40）……16
第13図　35号墓実測図（１/40）……17
第14図　35号墓出土遺物実測図（１/３）……18
第15図　２群遺構配置図及び立面図（１/100）……18
第16図　２群遺物分布状況及びテラス部土層図（１/50）……19
第17図　５ａ号墓出土遺物実測図（１/３）……20
第18図　５ａ号墓実測図（１/40）……21
第19図　５ｂ・５ｃ号墓実測図（１/40）……23～24
第20図　５ｂ号墓羨道部祭祀遺物出土状況（１/20）……25
第21図　５ｂ号墓出土遺物実測図（１/３・１/２）……26
第22図　５ｃ号墓玄室内出土遺物実測図（実大）……27
第23図　５ｃ号墓前庭部祭祀遺物出土状況（１/20）……28
第24図　５ｃ号墓前庭部出土遺物実測図（１/３）……28
第25図　３群遺構配置図及び立面図（１/150）……30
第26図　７号墓実測図（１/40）……30
第27図　８号墓実測図（１/40）……31
第28図　８号墓出土遺物実測図（１/３）……32
第29図　９号墓実測図（１/40）……32
第30図　10号墓実測図（１/40）……33
第31図　10号墓出土遺物実測図１（１/３）……34
第32図　10号墓出土遺物実測図２（１/３・１/４・実大）……35
第33図　11号墓実測図（１/40）……37
第34図　11号墓出土遺物実測図（１/３・１/２）……38
第35図　12号墓実測図（１/40）……41
第36図　12号墓出土遺物実測図（１/３・１/２）……42
第37図　４群遺構配置図及び立面図（１/100）……43
第38図　37号墓実測図（１/40）……43
第39図　38号墓実測図（１/40）……45
第40図　38号墓出土遺物実測図（１/３・１/２）……46

第41図　39号墓出土遺物実測図（1/3）……47
第42図　39号墓実測図（1/40）……48
第43図　40号墓実測図（1/40）……49
第44図　41号墓実測図（1/40）……50
第45図　42号墓実測図（1/40）……51
第46図　25号墓実測図（1/40）……51
第47図　5群遺構配置図及び立面図（1/100）……52
第48図　15号墓実測図（1/40）……54
第49図　15号墓前庭部祭祀遺物出土状況（1/20）……55
第50図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群1（1/3）……56
第51図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群2（1/3）……57
第52図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群3・B群1（1/2）……58
第53図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群4（1/2）……59
第54図　15号墓前庭部出土遺物実測図　B群2（1/3）……59
第55図　15号墓玄室内出土遺物実測図（実大）……60
第56図　16・17号墓実測図（1/40）……63
第57図　18号墓実測図（1/40）……65
第58図　18号墓出土遺物実測図1（1/3）……66
第59図　18号墓出土遺物実測図2（1/3・1/4・実大）……67
第60図　19号墓実測図（1/40）……70
第61図　19号墓前庭部祭祀遺物出土状況（1/20）……71
第62図　19号墓出土遺物実測図　A・B群（1/3）……72
第63図　19号墓出土遺物実測図　B群・テラス（1/3）……73
第64図　19号墓出土遺物実測図　テラス・玄室（1/4・1/3・1/2・実大）……74
第65図　6群遺構配置図及び立面図（1/100）……76
第66図　20号墓実測図（1/40）……77
第67図　20号墓出土遺物実測図（1/3）……78
第68図　21号墓実測図（1/40）……79
第69図　21号墓出土遺物実測図（実大）……79
第70図　22号墓実測図（1/40）……80
第71図　7群遺構配置図及び立面図（1/170）……81
第72図　23号墓出土遺物実測図（1/3・1/2）……82
第73図　23号墓実測図（1/40）……83～84
第74図　31号墓実測図（1/40）……85
第75図　31号墓出土遺物実測図（1/3・1/2・実大）……86
第76図　32号墓実測図（1/40）……88
第77図　33号墓実測図（1/40）……89
第78図　33号墓出土遺物実測図1（1/3）……90
第79図　33号墓出土遺物実測図2（1/3）……91
第80図　33号墓出土遺物実測図3（1/2）……92
第81図　34号墓実測図（1/40）……93
第82図　34号墓前庭・羨道部祭祀遺物出土状況（1/20）……94

第83図　34号墓出土遺物実測図１（１/３）……95
第84図　34号墓出土遺物実測図２（１/３・１/２）……96
第85図　34号墓出土遺物実測図３（１/２・実大）……97
第86図　26号墓実測図（１/40）……99
第87図　26号墓出土遺物実測図（１/３）……100
第88図　27号墓実測図（１/40）……101
第89図　27号墓出土遺物実測図（１/３）……103
第90図　28号墓実測図（１/40）……105
第91図　28号墓出土遺物実測図（１/３）……106
第92図　29号墓実測図（１/40）……107
第93図　29号墓出土遺物実測図１（１/３）……108
第94図　29号墓出土遺物実測図２（１/３）……109
第95図　29号墓出土遺物実測図３（１/３）……110
第96図　８群遺構配置図及び立面図（１/100）……111
第97図　58号墓実測図（１/40）……112
第98図　58号墓出土遺物実測図（１/３・１/２）……113
第99図　59号墓実測図（１/40）……114
第100図　59号墓出土遺物実測図（１/３）……115
第101図　60号墓実測図（１/40）……116
第102図　61号墓実測図（１/40）……118
第103図　61号墓出土遺物実測図（１/３）……119
第104図　62号墓実測図（１/40）……121
第105図　62号墓出土遺物実測図（１/３・１/４）……122
第106図　63号墓出土遺物実測図（１/３・１/２・実大）……124
第107図　63号墓実測図（１/40）……125～126
第108図　64号墓実測図（１/40）……129～130
第109図　64号墓出土遺物実測図（１/３）……131
第110図　65号墓実測図（１/40）……133
第111図　65号墓出土遺物実測図（１/３）……134
第112図　９群遺構配置図及び立面図（１/100）……135
第113図　36号墓実測図（１/40）……135
第114図　13号墓実測図（１/40）……136
第115図　14号墓実測図（１/40）……136
第116図　10－Ａ群遺構配置図及び立面図（１/100）……137
第117図　24号墓実測図（１/40）……138
第118図　43号墓実測図（１/40）……138
第119図　44号墓実測図（１/40）……139
第120図　10－Ｂ群遺構配置図（１/100）……140
第121図　45号墓実測図（１/40）……141
第122図　45号墓出土遺物実測図（１/３・実大）……142
第123図　46号墓実測図（１/40）……143
第124図　46号墓出土遺物実測図（１/３・１/２・実大）……144

第125図　47号墓実測図（1/40）……145
第126図　10－C群遺構配置図及び立面図（1/100）……146
第127図　48号墓実測図（1/40）……147
第128図　49号墓実測図（1/40）……147
第129図　49号墓出土遺物実測図（実大）……148
第130図　50号墓実測図（1/40）……148
第131図　50号墓出土遺物実測図（1/2・実大）……149
第132図　10－D群遺構配置図及び立面図（1/100）……150
第133図　51号墓実測図（1/40）……151
第134図　52号墓実測図（1/40）……151
第135図　53号墓実測図（1/40）……152
第136図　53号墓出土遺物実測図（実大）……153
第137図　54号墓実測図（1/40）……154
第138図　54号墓出土遺物実測図（1/3・実大）……155
第139図　55号墓出土遺物実測図（実大）……157
第140図　55号墓実測図（1/40）……157
第141図　10－E群遺構配置図及び立面図（1/100）……158
第142図　56号墓実測図（1/40）……159
第143図　56号墓出土遺物実測図（1/3・1/2）……160
第144図　57号墓実測図（1/40）……162
第145図　57号墓出土遺物実測図（実大）……162
第146図　ヘラ記号集成1（1/2）……164
第147図　ヘラ記号集成2（1/2）……165
第148図　ヘラ記号集成3（1/2）……166
第149図　ヘラ記号別出土土器一覧1……167
第150図　ヘラ記号別出土土器一覧2……168
第151図　ヘラ記号別出土土器一覧3……169

表　目　次

第1表　遺跡一覧表……4
第2表　6号墓出土土器観察表……8
第3表　6号墓出土耳環計測表……8
第4表　3号墓出土鉄器計測表……15
第5表　35号墓出土土器観察表……18
第6表　5a号墓出土土器観察表……20
第7表　5b号墓出土土器観察表……26
第8表　5b号墓出土鉄器計測表……26
第9表　5c号墓出土土器観察表……29
第10表　5c号墓出土玉類計測表……29
第11表　5c号墓出土耳環計測表……29
第12表　8号墓出土土器観察表……32

第13表　10号墓出土土器観察表……34
第14表　10号墓出土耳環計測表……34
第15表　11号墓出土土器観察表……39
第16表　11号墓出土鉄器計測表……39
第17表　12号墓出土土器観察表……42
第18表　12号墓出土鉄器計測表……42
第19表　38号墓出土土器観察表……46
第20表　38号墓出土鉄器計測表……46
第21表　39号墓出土土器観察表……47
第22表　15号墓出土土器観察表……60～61
第23表　15号墓出土鉄器計測表……62
第24表　15号墓出土耳環計測表……62
第25表　15号墓出土玉類計測表……62
第26表　18号墓出土土器観察表……68
第27表　18号墓出土耳環計測表……68
第28表　19号墓出土土器観察表……75
第29表　19号墓出土耳環計測表……75
第30表　19号墓出土鉄器計測表……75
第31表　20号墓出土土器観察表……78
第32表　21号墓出土耳環計測表……80
第33表　21号墓出土玉類計測表……80
第34表　23号墓出土土器観察表……82
第35表　23号墓出土鉄器計測表……82
第36表　31号墓出土土器観察表……87
第37表　31号墓出土鉄器計測表……87
第38表　31号墓出土耳環計測表……87
第39表　33号墓出土土器観察表……91
第40表　34号墓出土土器観察表……97
第41表　34号墓出土鉄器計測表……97～98
第42表　34号墓出土耳環計測表……98
第43表　26号墓出土土器観察表……100
第44表　27号墓出土土器観察表……102
第45表　28号墓出土土器観察表……104
第46表　29号墓出土土器観察表……110
第47表　58号墓出土土器観察表……113
第48表　58号墓出土鉄器計測表……113
第49表　59号墓出土土器観察表……115
第50表　61号墓出土土器観察表……119～120
第51表　62号墓出土土器観察表……123
第52表　63号墓出土土器観察表……127
第53表　63号墓出土耳環・銅釧計測表……128
第54表　64号墓出土土器観察表……132

第55表　65号墓出土土器観察表……134～135
第56表　45号墓出土土器観察表……142
第57表　45号墓出土耳環計測表……142
第58表　46号墓出土土器観察表……144
第59表　46号墓出土耳環計測表……144
第60表　46号墓出土鉄器計測表……144
第61表　49号墓出土耳環計測表……148
第62表　50号墓出土鉄器計測表……149
第63表　50号墓出土耳環計測表……149
第64表　50号墓出土玉類計測表……149
第65表　53号墓出土耳環計測表……153
第66表　53号墓出土玉類計測表……153
第67表　54号墓出土土器観察表……156
第68表　54号墓出土耳環計測表……156
第69表　54号墓出土玉類計測表……156
第70表　55号墓出土耳環計測表……157
第71表　56号墓出土鉄器計測表……160
第72表　56号墓出土土器観察表……161
第73表　57号墓出土耳環計測表……162
第74表　ヘラ記号分類表……169
第75表　四日市上ノ原横穴墓群形態一覧表……172

写真図版目次

図版1　6号墓全景　6号墓玄室　1群全景（右から1～4・35号墓）
図版2　1号墓玄室　2号墓羨門　2号墓玄室
図版3　3号墓羨門　4号墓羨門～玄室　4号墓玄室
図版4　35号墓羨門　35号墓閉塞　2群全景（左から5a・5b・5c号墓）
図版5　5a号墓羨門　5a号墓玄室　5b号墓羨門
図版6　5b号墓羨道部遺物出土状況　5c号墓羨門　5c号墓墓前祭祀状況
図版7　3群全景（右から9～11号墓）　7・8号墓羨門　9・10号墓羨門
図版8　11号墓羨門　12号墓全景　12号墓前庭部及び羨門
図版9　4群全景（上段右から37～42・25号）　37号墓羨門　38号墓羨門
図版10　38号墓玄室奥壁　38号墓玄室西壁　39号墓前庭部及び羨門
図版11　39号墓玄室　40号墓閉塞　40号墓羨門
図版12　40号墓玄室東壁　41号墓羨門　41号墓玄室
図版13　42号墓玄室　25号墓玄室　5群15号墓前庭部及び羨道
図版14　15号墓前庭部遺物出土状況　16・17号墓全景　18号墓全景
図版15　19号墓全景　19号墓前庭部遺物出土状況　6群全景（右から20～22号墓）
図版16　20・21号墓羨門　21号墓玄室　22号墓羨門
図版17　7群全景（右から23・31～34・26～29号墓）　23号墓羨門　31・32号墓羨門
図版18　31号墓玄室　26・33・34号墓全景　33号墓全景

図版19　33号墓羨道部遺物出土状況　33号墓玄室　26・27号墓全景
図版20　26号墓前庭部及び閉塞　26号墓閉塞　26号墓閉塞
図版21　26号墓羨門　26号墓玄室　27号墓閉塞
図版22　27号墓羨門　28号墓全景　28号墓閉塞
図版23　28号墓羨門　29号墓全景　29号墓閉塞及び遺物出土状況
図版24　8群全景（右から58～65号墓）　58～60号墓閉塞及び羨門　58号墓羨門
図版25　59号墓羨門　60号墓羨門　60号墓玄室
図版26　58～61号墓全景　61号墓閉塞状況　61号墓羨門
図版27　61号墓玄室　62号墓閉塞　62号墓羨門
図版28　63号墓全景　63号墓閉塞　63号墓玄室
図版29　64・65号墓全景　64号墓閉塞　64号墓玄室
図版30　65号墓前庭部及び閉塞　65号墓羨門　65号墓玄室
図版31　9群全景（右から36・13・14号墓）　36号墓玄室　13号墓羨門
図版32　14号墓羨門　10－A群全景（右から24・43・44号墓）　24号墓玄室
図版33　43号墓玄室　44号墓全景　44号墓玄室
図版34　10－B群全景（右から45～47号墓）　45号墓羨門　46号墓玄室
図版35　47号墓玄室　10－C群全景（右から48～50号墓）　48号墓羨門
図版36　48号墓玄室　49号墓玄室　50号墓羨門～玄室
図版37　10－D群東半部（右から51～53号墓）　51号墓羨門　52号墓玄室
図版38　53号墓羨門　53号墓玄室　53号墓遺物出土状況
図版39　10－D群西半部（右から54・55号墓）　54号墓羨門　54号墓玄室
図版40　55号墓羨門　55号墓玄室　55号墓玄室
図版41　10－E群56号墓羨門　57号墓全景　57号墓玄室
図版42　6・35・5a・5b号墓出土遺物
図版43　5b・5c号墓出土遺物
図版44　5c・8号墓出土遺物
図版45　10・11号墓出土遺物
図版46　11号墓出土遺物
図版47　12・38号墓出土遺物
図版48　39・15号墓出土遺物
図版49　15号墓出土遺物
図版50　15号墓出土遺物
図版51　18・18号墓出土遺物
図版52　18・19号墓出土遺物
図版53　19号墓出土遺物
図版54　19・20・23号墓出土遺物
図版55　31・33号墓出土遺物
図版56　33・34号墓出土遺物
図版57　34・26・27号墓出土遺物
図版58　27号墓出土遺物
図版59　28・29号墓出土遺物
図版60　29号墓出土遺物

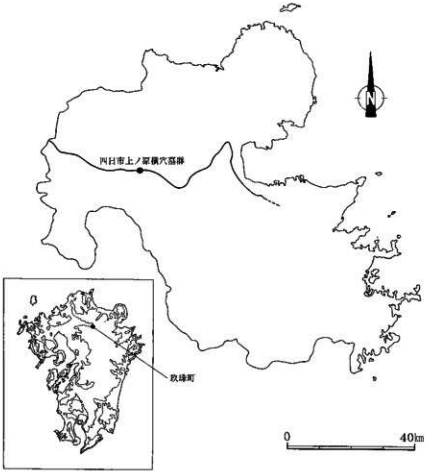
図版61　29・58・59・61号墓出土遺物
図版62　61・62号墓出土遺物
図版63　63号墓出土遺物
図版64　64号墓出土遺物
図版65　65・45・54・35号墓出土遺物
図版66　56号墓出土遺物・鉄器・装飾品
図版67　鉄器・馬具・装飾品
図版68　ヘラ記号1
図版69　ヘラ記号2
図版70　ヘラ記号3
図版71　ヘラ記号4

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

九州横断自動車道は、長崎市～大分市を結ぶ総延長約260kmの高速道路である。この九州横断自動車道の大分県関係は、昭和44年に県境～日田間の基本計画が、昭和53年に整備計画決定及び施工命令がだされて以降、施工主体である日本道路公団福岡建設局の委託を受けて、昭和58年から昭和61年まで県境～玖珠町の道路建設予定地における分布調査を実施した。その結果、本調査及び試掘調査が必要とされる範囲が28ヵ所に上った。その結果を元に、昭和63年以降、用地買収の終了した地点から、試掘調査及び本調査を実施し、平成５年度末で路線内24.1kmの全調査を終えた。この間、新たに発見された遺跡もあり、調査した遺跡数は試掘・立会調査も含めると、都合34遺跡で、本調査に至った遺跡数は17遺跡である。

玖珠町内については、平成２年４月に原田遺跡の本調査が開始され、それ以降、平成６年３月までに、岩塚古墳・玖珠ＳＡ地区遺跡群・治別当遺跡・谷ノ瀬遺跡・四日市上ノ原横穴墓群・下綾垣遺跡・白岩遺跡・瀬戸遺跡群の本調査を実施した。今回所収の四日市上ノ原横穴墓群は、平成４年４月～平成５年12月にかけて本調査を実施した遺跡である。



第１図　調査遺跡位置図　（約１/120万）

2．調査組織

調査の組織は次の通りである。

平成４年度

調査体制　調査委員　賀川　光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授・県文化財保護審議会委員）
後藤　宗俊（別府大学教授）
秋葉　正嗣（大分県教育庁文化課長）
調査事務　今井　義人（県文化課課長補佐兼管理係長）
山口　淳史（県文化課主任）
原　浩一（県文化課主事）
調査主任　渋谷　忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長）
調査員　村上　久和（文化課主査）、江田　豊（同主任）、染矢　和徳（同主事）
須原　緑、佐藤　祐二、岩尾　和佳（以上文化課嘱託）

平成５年度

調査体制　調査委員　賀川　光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授・県文化財保護審議会委員）
後藤　宗俊（別府大学教授）
田中　良之（九州大学助教授）
秋葉　正嗣（大分県教育庁文化課長）
調査事務　今井　義人（県文化課課長補佐兼管理係長）
山口　淳史（県文化課主任）
原　浩一（県文化課主事）
調査主任　渋谷　忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長）
調査員　村上　久和（文化課主査）、江田　豊（同主任）、染矢　和徳（同主事）
須原　緑、佐藤　祐二、岩尾　和佳、志満　紀郎（以上文化課嘱託）

3．遺跡の立地と環境

地理的環境

遺跡の所在する玖珠盆地は、北を下毛郡耶馬溪町、南を玖珠郡九重町、西を日田郡天瀬町、東を大分郡湯布院町に接する。盆地の周囲は、第４紀に形成された万年山をはじめ大岩扇山、小岩扇山、伐株山、角牟礼山などメサ（卓上台地）と呼ばれる独特な地形を持つ山々に囲まれている。盆地のほぼ中央には南方に広がる九重連山を源とする玖珠川が東西に流れ、やがて筑後川と名称を改めて筑後平野に流れ込む。平野部分はこの玖珠川やその支流によって形成された沖積地・低丘陵・河岸段丘・扇状地等におおわれている。盆地内の標高は350～370m前後で、春から秋は比較的過ごしやすいが、冬場に入ると県内でも屈指の低気温地域となっている。

歴史的環境

筑後川上流域に位置する玖珠地域は、先史時代より豊後地域との関係よりも、北部九州との文化的社会的交流が深い地域であった。この地域の旧石器時代の遺跡は多くはないが、盆地内（沖積地・低丘陵）より周辺地域（卓状台地とそれに続く高原）に偏在している。

縄文時代の遺跡としては、草創期から後期に至る文化層が確認された二日市洞穴遺跡（九重町）や、集石炉を持つ後期の竪穴住居跡が発見された都原遺跡（九重町）が注目される。

弥生時代～古墳時代に入ると遺跡は盆地内の沖積地や低丘陵上のいたる所に確認できる。盆地のほぼ中央部、玖珠川北岸にある丘陵上には名草台遺跡（玖珠町）がある。ここは集落と墓地の複合遺跡で多数の石棺及び獣帯鏡の鏡片が出土している。この遺跡に隣接して、今回報告する四日市上ノ原横穴墓群や玄室内に装飾を施した横穴墓が発見された鷹巣横穴墓群などの群集墳が展開する。

また古墳時代前期初頭の矢板列を持つ大溝や古墳時代前期から後期の竪穴住居跡が確認された治別当遺跡（玖珠町）がある。また、九州横断自動車道玖珠インターチェンジ付近には瀬戸墳墓群があり、玖珠町で初見の竪穴式石室を持つ直径約16mの円墳（古式の前方後円墳の可能性がある）や５基の低墳丘墳墓が発掘されている。瀬戸墳墓群と同じ尾根筋上には縄刻装飾を施した鬼ヶ城古墳もある。

盆地南東部にはおごもり遺跡（玖珠町）があり弥生時代終末期の集落が確認された。土坑からは後漢鏡の鏡片が出土している。それと共に５世紀前半代の方形周溝墓が５基確認され、主体部の石棺からは人骨と共に馬鐸・櫛・鉄器・玉類が出土している。また玖珠郡内唯一の前方後円墳である亀都起古墳（玖珠町）や船岡山遺跡（玖珠町）など古墳が集中する地域である。

盆地南半部では、伐株山山麓及び扇状地一帯に縄文時代～中世に至る複合集落遺跡である小田遺跡群（玖珠町）が所在する。やや時期は下るが７世紀後半から８世紀初めの土坑から円面硯が出土していて、大宰府木簡における「久須評」との関係を語る上で興味深い資料といえる。この小田遺跡群に隣接して彩色壁画を持つ装飾古墳である鬼塚古墳がある。また伐株山北西部の微高地には将軍塚古墳や陣ヶ台彦塚・姫塚等の古墳が所在する。

古代に入ると、天平九年（737）の『豊後国正税帖』や天平五年（733）頃の『豊後国風土記』に「球珠郡」という記述が見られるようにこの時期にはすでに大和政権の支配下に組み込まれていたことがうかがえる。

平安時代に入ると豊後清原氏の勢力範囲に含まれるようになり以後中世には長野荘・古後郷・帆足郷・山田郷などが成立していった。そしてここにいわゆる玖珠群衆と呼ばれる武士団がそれぞれの地域に勢力範囲を持つようになる。このことから、玖珠盆地には大小さまざまな中世山城が分布することになる。そのもっとも代表的なものは伐株山上にある玖珠城であり南北朝の動乱期や薩摩島津軍の豊後侵攻時には戦いの場ともなっている。これ以外にも前述のいわゆる玖珠郡衆が治めていた地域には魚辺城・野田城・古後城・帆足城・岩室砦・松木城・恵良城・岐部城・釘野城・野上

城などの山城がある。

文禄二年（1593）に豊後大友氏が改易されて以降、この地は太閤蔵入地となり、慶長元年（1596）には毛利高政が玖珠・日田両郡の代官として入府する。玖珠町森地区にある角牟礼城跡はもともと中世の山城であったが、この時期に外枡形の大手門や搦手門一帯に高石垣を穴太積みの技法で積み上げた織豊系の城郭を持つ山城となったと推定されている。毛利高政が慶長六年に佐伯に転封となった後は、来島（久留島）康親が1万4千石の知行を与えられ角牟礼山のふもとに陣屋を置いた。

以後幕末まで森藩領として継続していく。

参考文献　『大分県の地名』日本歴史地名体系45　平凡社　1995
『堂園遺跡　原田遺跡　岩塚古墳　玖珠ＳＡ地区遺跡群　谷ノ瀬遺跡』大分県教育委員会　1995
『日田条里遺跡群　佐寺横穴墓群　大迫遺跡　白岩遺跡　下綾垣遺跡』大分県教育委員会　1997

第1表　遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	四日市上ノ原横穴墓群	24	井ノ尻古墳	47	下横尾遺跡
2	治別当遺跡	25	十ノ釣遺跡	48	山王古墳
3	平台遺跡	26	十ノ釣古墳	49	寺山古墳
4	西遺跡	27	井ノ尻遺跡	50	坂口遺跡
5	瀬戸墳墓群	28	四日市遺跡	51	般若寺2号墳
6	瀬戸遺跡	29	下綾垣遺跡	52	般若寺1号墳
7	帆足城跡	30	白岩遺跡	53	岩屋砦跡
8	平田山土塁	31	谷ノ瀬遺跡	54	丑ノ原遺跡
9	鬼ケ城古墳	32	野田古墳	55	五行塚古墳
10	平原横穴墓群	33	野田遺跡	56	払川古墳
11	本村遺跡	34	野田城跡	57	井尻古墳
12	伏原立石	35	妙大寺Ａ遺跡	58	船岡山古墳
13	角牟礼城跡	36	妙大寺Ｂ遺跡	59	船岡山石棺群
14	太田巨石遺跡	37	鬼塚古墳	60	鍵水遺跡
15	太田中学校遺跡	38	鬼塚周辺石棺群	61	船岡山横穴墓群
16	太田本村遺跡	39	中山田遺跡	62	亀都起古墳
17	太田遺跡	40	小竿遺跡	63	祇園遺跡
18	古後城跡	41	早水野中遺跡	64	書曲遺跡
19	中原古墳	42	将軍塚古墳	65	二日市横穴墓群
20	上ノ原遺跡	43	陣ケ台姫塚古墳	66	二日市洞穴
21	千人塚古墳	44	陣ケ台遺跡	67	松木遺跡
22	名草台遺跡	45	陣ケ台彦塚古墳	68	下馬原遺跡
23	鷹巣横穴墓群	46	伐株山城跡	69	桶ノ口遺跡
				70	宝山遺跡

第2図　四日市上ノ原横穴墓群周辺遺跡分布図　（国土地理院1/25000地形図「豊後森」より転載）

第２章　調査の成果

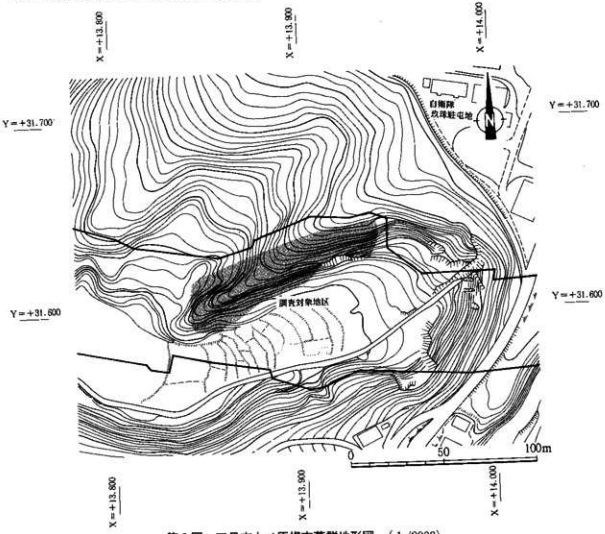
１．遺跡の概要

四日市上ノ原横穴墓群は、玖珠郡玖珠町大字四日市字後ノ迫に所在する。当遺跡は弥生時代の集落と石棺群が確認された名草台遺跡がある丘陵部の南側斜面にあたる。この斜面はさらに東に延び、約300m離れた地点に彩色を施した横穴墓が確認された鷹巣横穴墓群がある。

調査で検出された横穴墓は、上下２段、総計66基にのぼり、さらに10のグループに分けることが出来る。ただし全体に後世の撹乱を含めて崩落が進み、テラス部分が消失したものも多い。明瞭にテラスを持ちそれを共有しているグループは２・５・７・８群、一部にテラスの痕跡を残すものが１・３群、４・６・９・10群についてはテラスの大部分が崩壊しているため、遺構の平面及び垂直分布状況から判断した。横穴墓は６世紀後半代に造営が始まり、以後８世紀前半まで、群集墓として多数の横穴が造られたものと思われる。テラス部分には墓前祭祀をとりおこなった痕跡が良好に残されたところもある。（２群５ｃ号墓、５群15・18号墓）

玄室の構造を見ると平面形は方形のものが多く、天井形は家型タイプが主体を占め、一部四柱寄棟のものが含まれる。敷石は凝灰岩を扁平に割ったものを主に用い、川原石の円礫を用いたものは少ない。玄室内の副葬品は、須恵器や鉄鏃、玉類が出土しているが出土した量は多くない。

また45号墓（10－Ｂ群）では羨道部において同安窯系青磁碗が出土していて中世を中心とした時期に二次的に使用されていたものもある。



第３図　四日市上ノ原横穴墓群地形図　（1/2000）

2．各遺構の報告

6号墓（第5図）

概要

調査区東端標高358m付近で検出された。平面観は玄室－羨道－羨門－墓道を持ち、他の横穴墓と共有するテラスは無い。

規模・構造

墓道

墓道は長さ4.5m、幅は1.8～2.7m、深さ0.7mである。上面を後世に削平されているものの比較的残存状況は良好である。東側肩部には長軸90cm、短軸70cmの掘り込みが付く。祭祀用の遺構かあるいはごく小規模の玄室かは不明である。土層観察ではⅤ～Ⅶ層が初葬時に関わるもので、Ⅰ層及びⅣ層はそれぞれ追葬に関わる層と考えられる。

羨門部

羨門部は天井部分が削平され、立ち上がりから約45cmが残るのみである。羨門の幅は約65cmで、閉塞石は墓道側に引き倒されている。土層観察から２回目の追葬時に倒された可能性が高い。なお閉塞石は凝灰岩を略方形に成形したものを用いている。

羨道・玄室

羨道は上面を削平されていて、床面から35～40cm程度が残るのみである。玄門側の幅は55cmである。玄室から羨道に至る部分には約５cmの段差が設けられる。玄室も大きく開口していて内部の残存状況は良くない。玄室は、平入りの隅丸長方形で天井はドーム型になるものと思われる。主軸はN－15°－Wである。わずかに奥壁寄りの部分に凝灰岩の角礫をやや乱雑に敷いた部分が残るのみである。

遺物の出土状況（第6図）

墓道

墓道内からは、小破片を除き５点の須恵器が出土した。坏身２点、坏蓋３点である。このうち５は１回目の追葬面で伏せた状態で出土した。そのほかは初葬時に関わるものと思われる。

玄室

玄室内からは坏身が１点、坏蓋が１点、耳環１点が出土したがこのうち原位置をほぼ保つものは１点のみである。身と蓋はセットである。なお敷石部分において骨片がわずかに出土した。

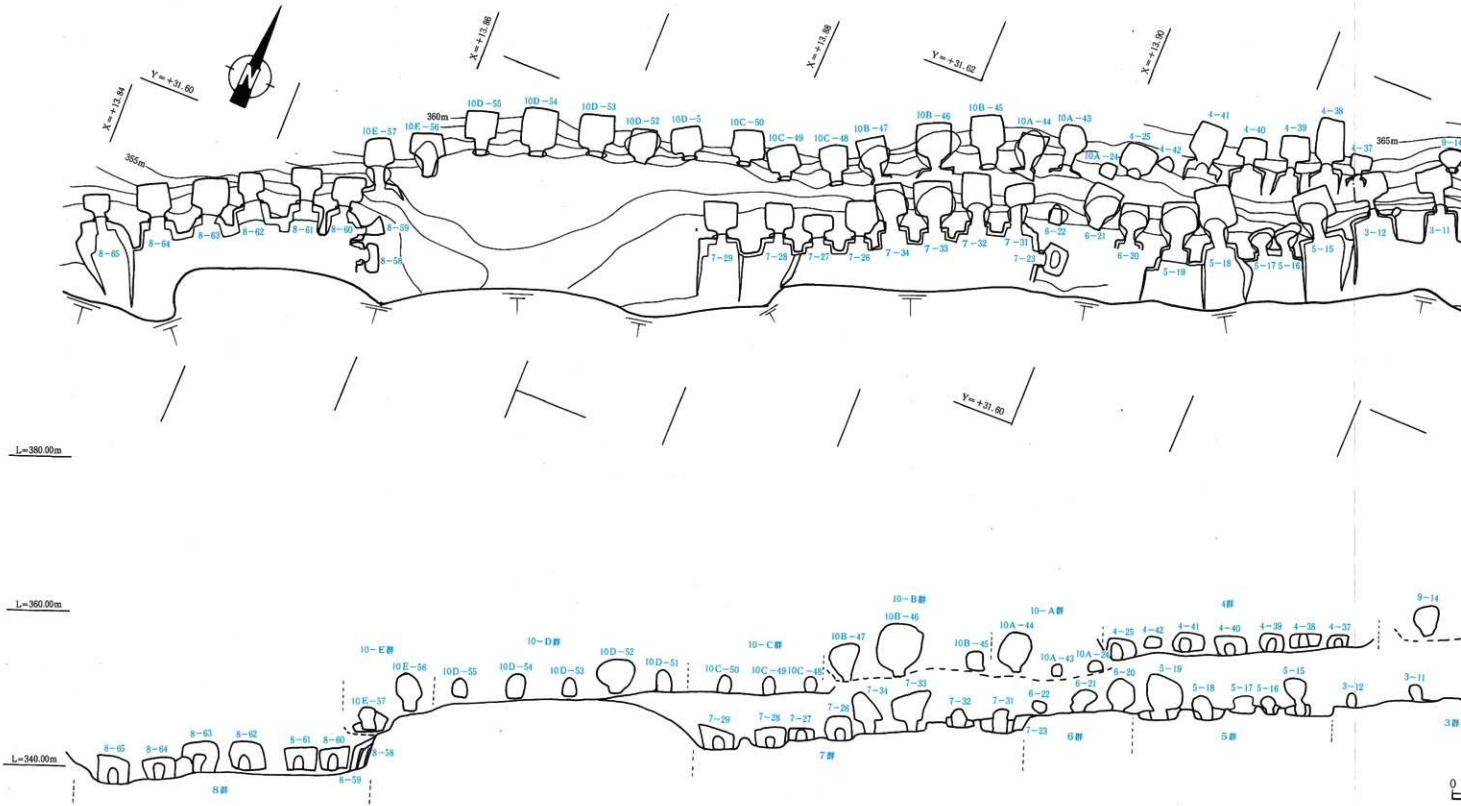
第２表　６号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺物	種別	器種	規格(括弧内は復元値・単位cm) 総高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
1	テラス	低台器	坏蓋	3.1	7.7			石英・長石を含む	回転ナデ・逆時計回ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	10YR5/6黄色	10YR5/6黄色	外面に自然釉(灰)	47
2	テラス	低台器	坏蓋	3.45	6.85			雲母、白色粒子を含む。赤褐色土器が共存している	回転ナデ・逆時計回ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	7.5YR5/6黄色	7.5YR5/6黄色		
3	テラス	低台器	坏蓋	2.15	9.9			石英・長石を少量含むが細密	回転ナデ・ヘラ切り後、縁下部をナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	10YR5/6黄色	5GY5/1緑灰色		
4	テラス	低台器	坏身	3.6	9		5.95	石英・長石を少量含むが細密	回転ナデ・ヘラ切り後ミガキ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5B6/6青灰色	5B6/6青灰色		
5	テラス	低台器	坏身	6.3	14.6		11.2	2mの礫状の石英・長石を多く含む	回転ナデ・ナデ・無調ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N3.5/暗灰色	N3.5/暗灰色		
6	玄室	低台器	坏蓋	2.2	10.4			石英・長石を少量含むが細密	回転ナデ・ヘラ切り後ミガキ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	7.5YR5/6黄色	7.5YR5/6黄色		
7	玄室	須恵器	坏身	(2.2)	(11.8)		(8.3)	石英を含む	回転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR5/4赤灰色 N4.5/灰色	2.5YR5/4にぶい赤褐色		

第３表　６号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
401	玄室	銅地金張	1.8×1.7	0.5×0.4	5.2	わずかに金が残る

第４図　四日市上ノ原横穴墓群遺構配置図及び立面図　（１/500）



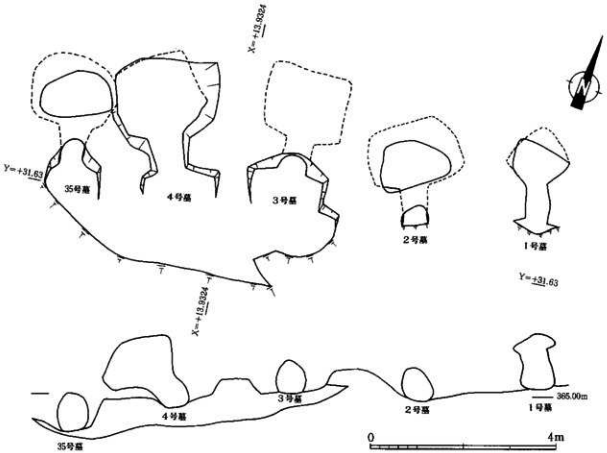
第４図　四日市上ノ原横穴墓群遺構配置図及び立面図　（1/500）

第5図　6号墓実測図　(1/40)

第6図　6号墓出土遺物実測図　(1/3・実大)

1群（第7図）

1群は調査区東端部、標高365m付近にある。この1群に含まれる横穴墓は1～4・35号墓の5基である。現況では3・4号墓及び35号墓においてテラスが確認されるが、1・2号墓前部分は崩落のため確認できない。残存するテラス部分は東西6.0m、南北1.5mで、特に北端部は崩落が著しい。そのためテラス上における墓前祭祀等の状況は確認できなかった。



第7図　1群遺構配置図及び立面図　（1/80）

1号墓（第8図）

概要

1群中、最東端の標高365.5mに位置する横穴墓である。遺構の残りは悪く、羨道～玄室部の天井は失われ前庭部も崩落している。

規模・構造

前庭部

大部分が崩落しているため、土層観察及び規模等の計測は不能である。

羨門部

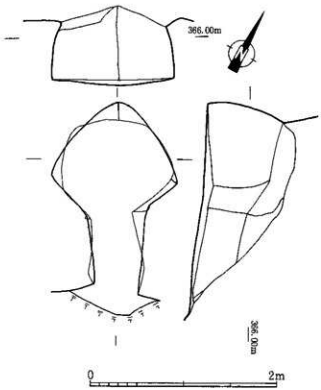
羨門部は立ち上がり部分から天井部分にかけて大きく削平されほとんど原状を留めていない。立ち上がり部分の幅は49cmである。閉塞石等は残っていない。

羨道・玄室

羨道部は天井部が削平されていて床面から45cm程度が残るのみである。玄門側の幅は60cmである。玄室も天井部分が大きく開口していて内部には敷石等の施設は確認できない。玄室の平面形は、菱形で主軸上にコーナーがくる特異な形状を持つ。天井部分はほとんど崩落しているが奥壁の残存部からドーム型になるものと思われる。なお玄室の主軸はN－28°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部及び玄室内からの遺物の出土は無い。



第8図　1号墓実測図　(1/40)

2号墓（第9図）

概要

1号墓の西約2m、標高365.5m付近で検出された。前庭部はすべて崩落していた。また羨門部及び玄室部もあまり残りは良くない。

規模・構造

羨門部

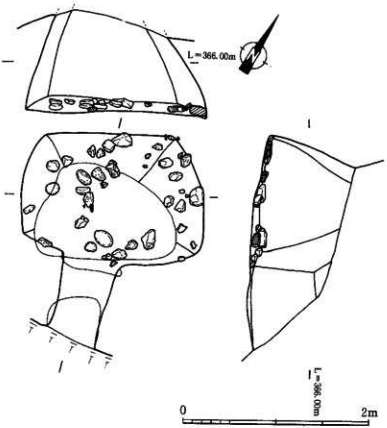
羨門部は一応立ち上がり部から最高部まで残るが崩落の影響で構築時の状況は残していない。幅は55cm、高さ75cmである。閉塞石等は残っていない。

羨道・玄室

羨道は天井部が大きく玄門寄りに崩落している。長さは89cm、高さは70cmである。玄室から羨道はほぼフラットに続く。玄室は奥壁に行くにしたがって床面は上り勾配となり羨門部と比較して約20cmの高低差が見られる。平面形は平入りの隅丸長方形で、玄門は西寄りにつく。玄門の幅は60cm、高さは68cmである。玄室の幅は奥壁側1.85m、中央部で1.95m、玄門側で1.9mである。天井は一部開口しているが四隅に稜をもっている。床面には、扁平な円礫と凝灰岩の角礫が確認されたが、非常に疎らである。玄室の主軸はN－32°－Wである。

遺物の出土状況

玄室から遺物は出土していない。



第９図　２号墓実測図　(1/40)

３号墓（第10図）

概要

２号墓の西約２ｍ、標高約365.5m付近で検出された。テラスは羨門から約2.2mを残してその先は崩落している。前庭部から羨門にかけては若干崩落が見られるものの１・２号墓と比べると残りは良い。また閉塞石も確認されている。玄室も天井が一部崩落しているものの、ほぼ原状を保っていた。

規模・構造

前庭部

前庭部は、長さ60cm、幅1.4mで東側の壁は屈曲部が２ヶ所ある。かつては２号墓の前庭部がつながっていたものと思われる。土層は床面から約15cmが当時の土層を残しているものの大半は崩落土であった。土層観察から追葬は行われていないものと見る。

羨門部

羨門は最高位が若干崩落しているものの、ほぼ原状を保つ。立ち上がり部の幅は50cm、高さは現状で60cmあり、閉塞石は前庭部側に大きく倒れていた。閉塞石は安山岩の扁平な板石を一部加工して用いている。なお閉塞石に伴う掘り込み等は確認されなかった。

羨道・玄室

羨道は長さが50cm、高さが58cmである。また玄門の幅は約60cmで、羨門から玄門まで両側の壁は平行して続く。ただし羨門が約65度の角度で立ち上がることと、玄門もやや羨門寄りに入り込むように造られているため、天井はわずかに10数cmの長さしかない。

玄室は平面形が平入りの隅丸長方形で、奥行き1.45m、幅1.7mを測る。天井部はドーム型である。床には凝灰岩の角礫を用いた敷石が見られるが、玄室中央部やや奥壁寄りに１m×50cmの範囲で確認されたに留まる。敷石とすれば非常に雑な造りと言えよう。なお主軸はN－33°－Wである。

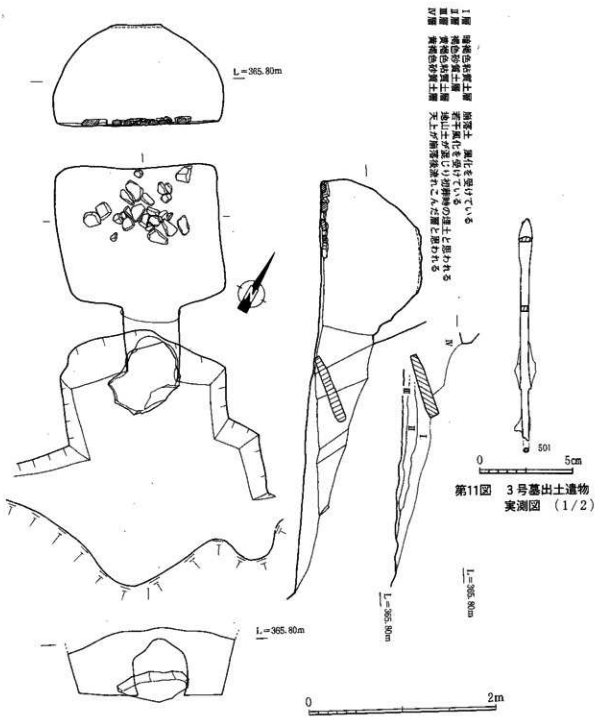
遺物の出土状況

前庭部において鉄鏃が1点出土した。ただし崩落土中のため原位置は保っていない。この鉄鏃は箆被鑿箭式で刃部の関がやや甘く造られている。刃部の断面は蒲鉾状である。箆被はやや張り出しながら茎へ続くが棘は無い。

第4表　3号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
501	テラス	鉄鏃	11.7＋α	2.2	0.7	0.4	0.3	箆被鑿箭式



第11図　3号墓出土遺物実測図　(1/2)

第10図　3号墓実測図　(1/40)

4号墓（第12図）

概要

3号墓の西約2.5m、標高約364.9m付近で検出された。前庭部は比較的残りが良いが、羨門～玄室部分は大きく削平されている。また、前庭～テラス部の埋土はほとんど失われていてわずかに残ったものも崩落土の堆積であった。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ35～70cm、幅は1.4mで主軸方向はほぼ南北を向く。4号墓前のテラスはほとんど崩落していてわずかに1.5m×1mほどが残る。

羨門部

羨門は幅58cm、床面からの高さは現状で35cmを残すのみである。前庭部に閉塞石の一部と思われる安山岩の割石が前庭部に堆積した崩落土上に横たわっていた。

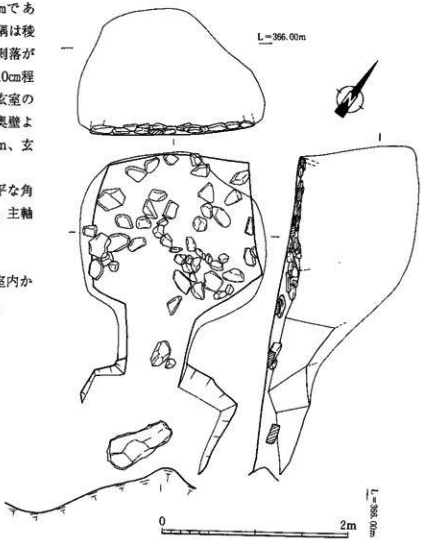
羨道・玄室

羨道は長さ75cm、玄門部の幅78cm、高さは現状で50cmである。玄室は不整方形で四隅は稜を持つ。玄室内の壁面は剥落が著しく床面からわずかに10cm程度しか稜線を追えない。玄室の規模は長さ1.75m、幅が奥壁よりで1.48m、中央で1.65m、玄門寄りで1.8mである。

玄室内には凝灰岩の扁平な角礫が雑然と分布している。主軸はN－35°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部・テラス及び玄室内から遺物は出土していない。



第12図　4号墓実測図　（1/40）

35号墓（第13図）

概要

標高約365.5m、4号墓の玄室西壁とほぼ接する位置で検出された。前庭部～羨門部については比較的残りは良いが前部に展開するテラス部については西側が大きく崩落している。また、玄室は天井部が大きく開口し崩落土の流入が著しかった。前庭部は崩落土の堆積のみで横穴墓形成に関わる土層の確認は出来なかった。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ80cm、幅1mである。羨門付近から現存するテラス端部まで緩やかに下る。

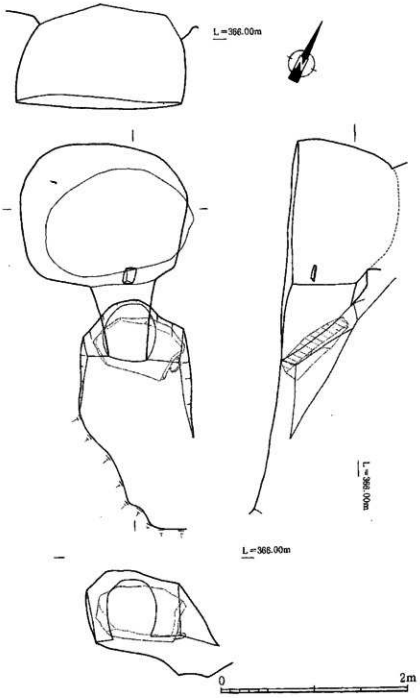
羨門部

羨門部には安山岩の割石を用いた閉塞石が残されている。

この閉塞石は長さ83cm、幅96cm、厚さ16cmで床面側はほぼフラットに、上端部は数度の調整を加えて丸く整形し、約55度の角度で立てている。羨門は幅50cm、高さ70cmである。閉塞石を据えるための掘り込み等は確認できなかった。

羨道・玄室

羨道は長さ76cm、玄門部の幅70cmで、羨門部から大きく広がりながら、玄室東寄りに付随している。高さは70～80cmである。玄室は平入りの不整隅丸長方形で、天井形態はドーム型になるものと思われる。敷石等の施設は検出されなかったが、玄門付近で安山岩の扁平礫が少し浮いた状態で出土したことからかつては敷石も存在していたと考えられる。玄室の規模は、玄門から長さ1.5m、中央で1.8m、玄門寄りで1.5mである。床面は



第13図　35号墓実測図　（1/40）

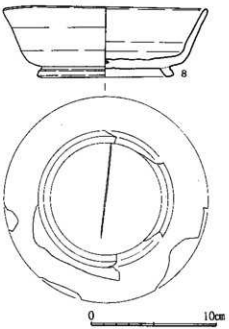
奥壁からなだらかに下り羨門へと至る。主軸はN－30°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部において坏が1点出土した。7世紀後半前後の所産と思われる。

第5表　35号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	器種	器種	規模（ガラは復元値・単位cm）器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
8	テラス	須恵器	坏身	5.7	16.3			角閃石・石英4 雲母 金ウンモ微細	回転ケズリ・体部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好 不良	10YR4/2灰黄褐色 N6.5/灰白色	10YR5/3黄褐色 N6.5/灰白色		有



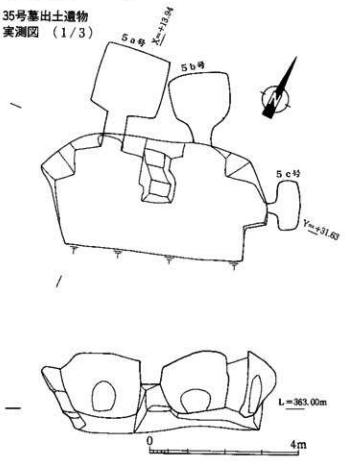
第14図　35号墓出土遺物
実測図　（1/3）

2群（第15図）

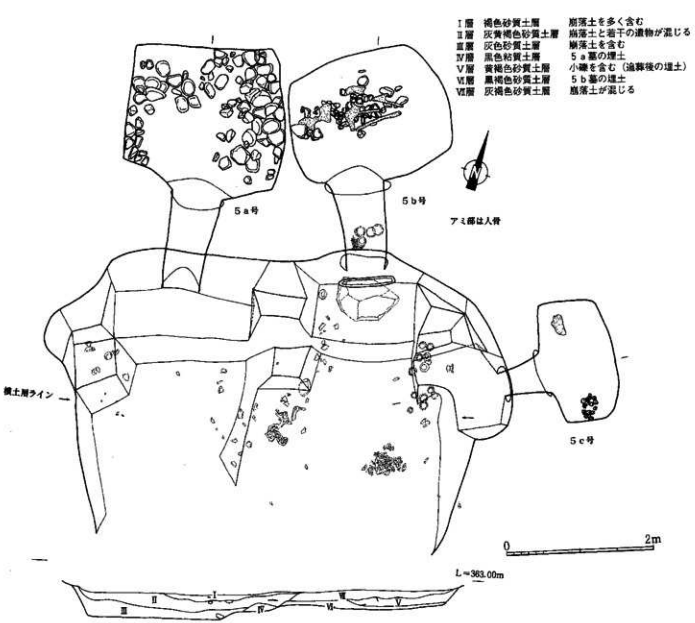
2群は調査区最東端、標高363m付近に位置する。1号墓の直下にあたり比高差は約4mである。ここには3基の横穴墓が構築され（5a・5b・5c号墓）、テラスを共有しながらそれぞれの横穴墓が前庭部を持つ。

この3基の横穴墓は、5a号墓が玄室の形態から最初に構築され、その後に寄り添うように他の2基の横穴墓が造営されたと考えられる。

またこの3基の横穴墓は前庭部が2段構造を持つという共通点も持つ。さらにそれぞれ前庭部や羨道内において祭祀の状況が確認されている。特に5b号墓は前庭部～テラス部及び羨道内、5c号墓は前庭部で須恵器を中心とした遺物が出土している。



第15図　2群遺構配置図及び立面図　（1/100）



第16図　２群遺物分布状況及びテラス部土層図　（1/50）

５ａ号墓（第18図）

概要

２群中では最も西に位置する横穴墓で、羨門付近の標高約359.7mである。後世の攪乱をほとんど受けておらず、良く原状を保っている。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ3.3m、幅は1.88～２mである。まず羨門部前に長さ65cm、幅1.85mのフラットな面を造り出し、そこから約30cmの段落ちがありテラスへと続く２段構造を持つものである。また東西の肩部にはそれぞれ基壇を２基づつ造り出す。この基壇のうち西側の２段目からは坏蓋や平瓶、高坏などが出土している。

前庭部に堆積した土層観察で追葬が確認された。なおこの追葬は、５ｂ号の前庭部埋土を切るように追葬ラインが認められた。

羨門部

羨門はまず幅2.1m、高さ1.8mのほぼ正方形のフラットな面を崖面に削り出し、床面の幅44cm、

高さ85cmの羨門を作っている。閉塞石は追葬時に除去されたものと思われる。

羨道・玄室

羨道は長さ1.34m、高さ80cm、玄門側の幅70cmである。さらに玄室との境部分に10cm程度の段を持ち同室のほぼ中央部につく。玄門は高さが80cmである。玄室は長方形の家型タイプで、奥行き2m、最大高1.1m、奥壁寄りは幅2m、中央付近の幅2.15m、玄門寄りの幅2.1mである。また、奥壁は85度の角度、両側壁は湾曲しながら立ち上がる。四隅から稜線が延び、天井部に至り主軸方向に2本の棟木を造り出す。

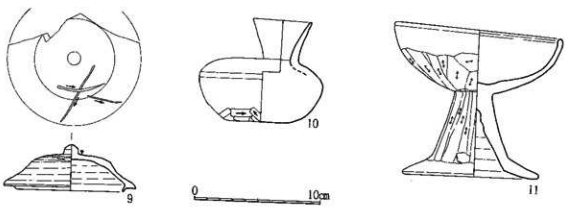
床面には主に凝灰岩の角礫を用いた敷石が認められたが、全面には施されてなく奥壁寄りの東西方向に分布していた。敷石中にはわずかに安山岩の扁平礫が混じる。安山岩の礫は右側壁沿いに山積みされたような様相から、初葬時には安山岩の扁平礫を敷石として用いていたが追葬時に大部分を側壁に片付けて新たに凝灰岩の角礫を敷き込んだものと思われる。排水溝などの施設は確認されなかった。主軸方向は、N－10°－Wである。

遺物の出土状況

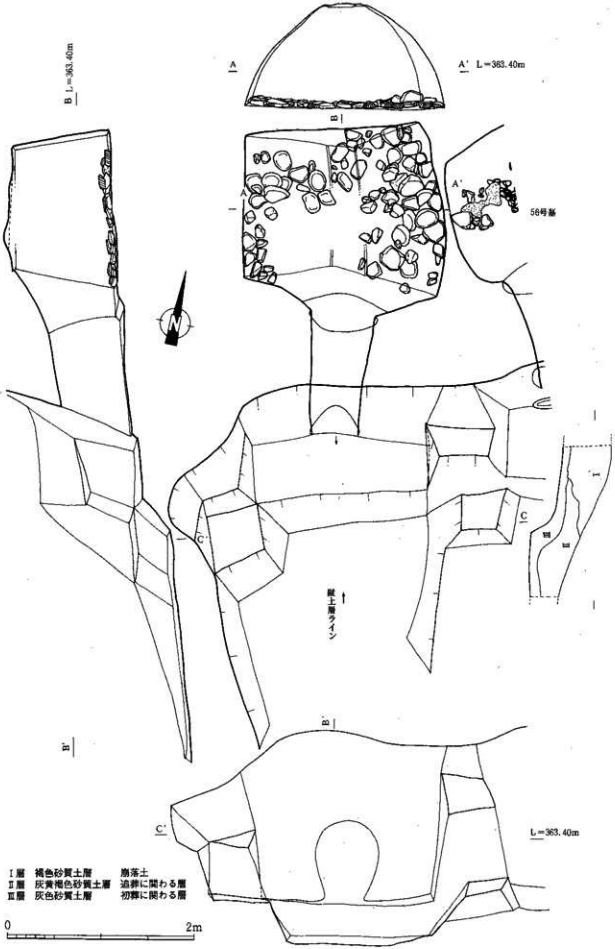
前庭部西側の下段の基壇上において須恵器の坏蓋1点、平瓶1点、土師器の高坏1点が出土した。葬送儀礼に用いられた後にこの場所に置かれたものと思われる。その他からは出土していない。

第6表　5a号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規模(括弧は復元値・単位cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
9	前結部	須恵器	坏蓋	3.6	8.43	10.0		大型の石英・長石を含む	回転ナデ・端部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5.0/1灰白色	7.5YR5.0/1灰白色		有
10	テラス	須恵器	提瓶	8.2	4.7	9.8	4.3	細砂	ナデ・指紋ヨコナデ・平行タタキヘラケズリ	ナデ・ヘラケズリ	良好	10YR5/6黄褐色	黄褐色		
11	テラス	土師器	高坏	12	13.1		11.0	長石・石英を少量含むが細密	回転ナデ・ヨコナデ後ヘラケズリ後ナデ・ヨコナデ後ヘラケズリ・ヘラケズリ・下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヨコナデ後ナデ・不定方向ヘラケズリ	良好	7.5YR7/4にぶい橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	5YR7/4にぶい橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	内面各面に焼成時に付ったと思われる被膜部分 しぼり痕有	



第17図　5a号墓出土遺物実測図（1/3）



第18図　5 a 号墓実測図　(1/40)

５ｂ号墓（第19図）

概要

５ａ号墓の東２ｍ、標高363ｍに位置する。後世の攪乱をほとんど受けておらず、原状を良く保っている。横穴墓の構造は５ａ号墓と類似するが若干小ぶりである。

規模・構造

前庭部

前庭部は２段構造で上段は長さ62cm、幅1.1ｍのフラットな面で両肩部に基壇を持つ。下段は長さ２ｍ、幅2.1ｍで上段との比高差は約25cmである。下段は長さ2.2ｍ、幅2.6ｍで西肩部に基壇を持つ。東肩部にもかつて基壇が造られていたものと思われるが、５ｃ号を構築する際に削平されたものと思われる。

土層観察では７層確認され、この内Ⅶ層が初葬時の埋土、Ⅵ層が１回目の追葬埋土でこの上面に安山岩の扁平礫を用いた閉塞石が倒れた状態で検出された。この閉塞石は床面から約30cm浮いた状態で検出されていることから、追葬時に倒された可能性が高い。Ⅲ～Ⅴ層は崩落土混じりの層で、Ⅱ層が二回目の追葬埋土と思われる。

羨門部

幅1.5ｍ、高さ1.8ｍのフラットな面を造り、立ち上がり部の幅50cm、高さ90cmの羨門を設ける。床面には閉塞石を据えたと思われる掘り込みがある。

羨道・玄室

羨道は玄門側の幅78cm、高さ82cmである。床は、玄門付近で玄室に向かって10cm程度の段差を持つ。玄門の最大幅90cm、高さは80cmで玄室のやや西寄りにつく。この羨道内において追葬時に祭祀が行われた痕跡が認められた。玄室は平入り胴張り隅丸方形で、奥行き1.72ｍ、奥壁寄りの幅1.75ｍ、中央付近の幅2.24ｍ、玄門寄りの幅1.95ｍである。壁はいずれも緩やかに湾曲しながら立ち上がり天井形はドーム型となる。奥壁には工具痕が一部に観察される。

床面には奥壁から手前約50cmの部位に長軸方向に10～20cm程度の凝灰岩の角礫が疎らに分布しそこに人骨の細片が確認された。玄室の主軸はＮ－43°－Ｗである。

遺物の出土状況

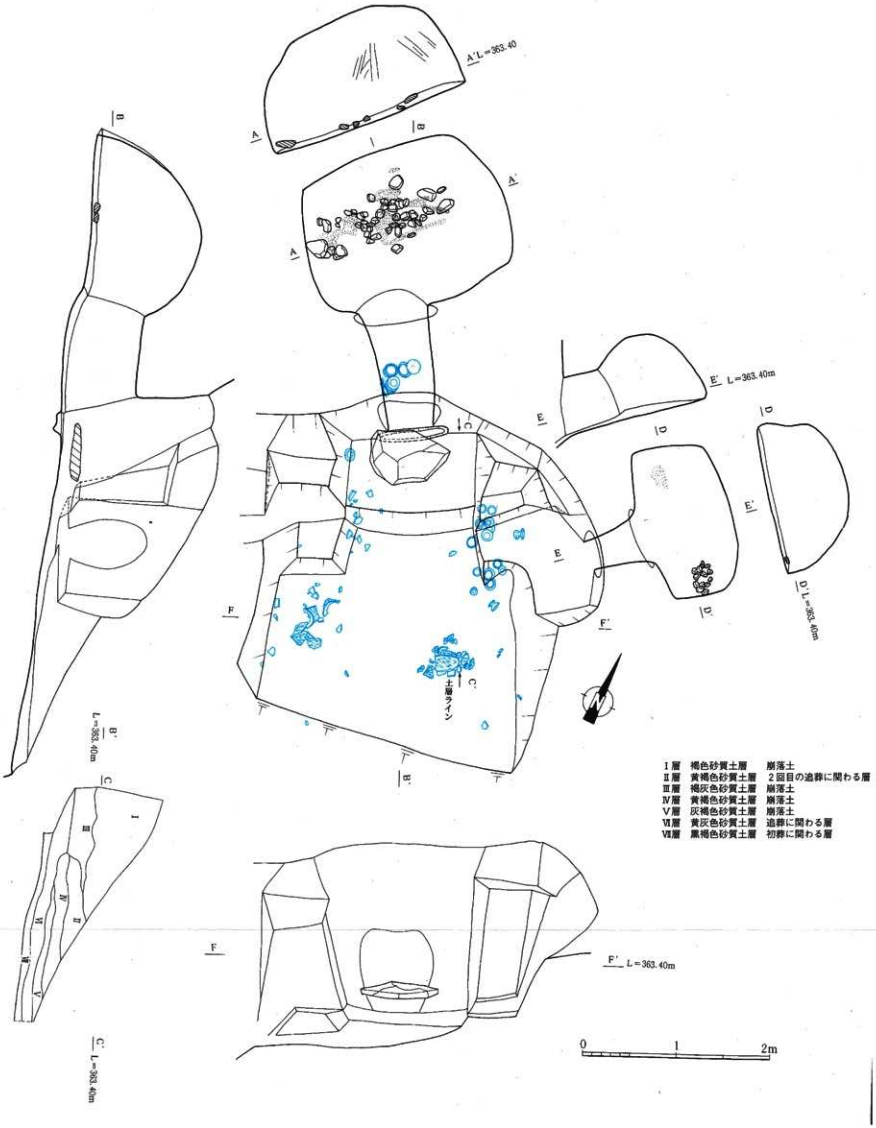
前庭部及び羨門

遺物は、大半が崩落土上にあり１群からの流れ込みであった。その中で第21図に示した坏蓋と坏身及び坩はいずれも初葬時の埋土中から出土したものである。坏蓋と坩は前庭部下段中央部において出土したが意識的な配置はなされていない。また坏身は羨門西肩部において出土したがこれもやや原位置から移動している。坏蓋及び坏身から７世紀後半代の遺物と思われる。

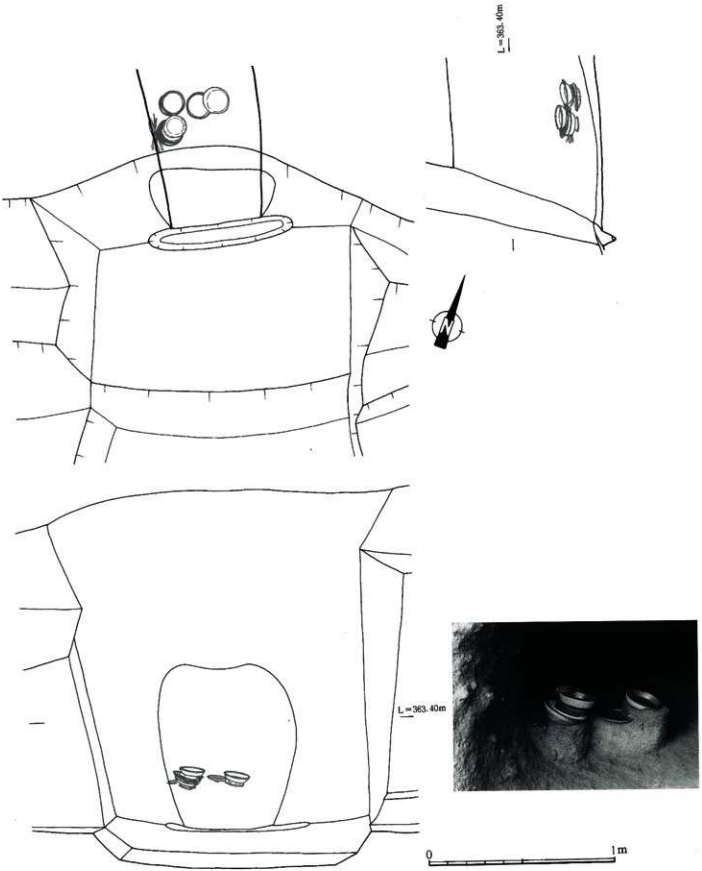
羨道及び玄室

羨道内からは第20図に示したような出土状況で高坏と蓋のセットが４点及び鉄鏃が６本出土した。いずれも羨道内における葬送儀礼に関わる遺物で、出土レベルから追葬時に関わるものである。高坏はいずれも脚が非常に低いタイプで、口径はほぼ13cmである。蓋はいずれもつまみがつき、宝珠つまみに似たもの（15・17）とボタン状で頂部がわずかにくぼむもの（19・21）がある。蓋の受部の造りはいずれも７世紀初頭～後半代の様相を持つものである。鉄鏃はいずれも長い箆被がつくもので茎との境部分に棘の付くもの（502～505・507）と付かないもの（506）がある。刃部は片刃箭式が１点で、あとは鏃箭式である。関はあまり明瞭ではない。

これらの遺物は羨門約90cm玄室寄りの西壁沿いに、鉄鏃はすべて先端を羨門側に向けて６本まとめて置かれている。高坏は、３セットが鉄鏃と寄り添うよう配置され、蓋は裏返しにされていた。残りの１セットはやや中央よりに蓋をあけた状態で正置されていた。



第19図　5b・5c号墓実測図（1／40）



第20図　5ｂ号墓検道部祭祀遺物出土状況　（1/20）

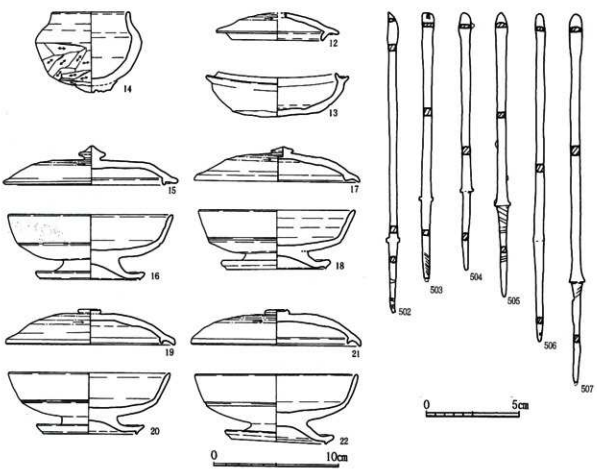
第7表　5ｂ号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	器高(cm)/口径及び底・脚径(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ハケ目 記号
12	西門	須恵器	坏蓋	3.2以上	(7.4)	13.4		微細粒を含むが精緻	回転ナデ、連続回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐色	2.5YR5/4にぶい赤褐色	赤焼き	
13	西門	須恵器	坏身	3.5	9.4	10.6	6.9	長石と黒色砂粒を含む	回転ナデ、ヘラ切り後に他一部ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	5PB/1青灰色 N6/0灰色	灯明具に重ね焼き痕有	
14	テラス	須恵器	小型壺 蓋坏	5.8以上	8.1	8.4		石英・長石・黒色粒子を含む、緻密な粘土 粒子内外面に付着	回転ナデ、不定方向ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	N4/0灰色	N4/0灰色	表底部がかすかでいる 粘土に開土が微細している	
15	表道	須恵器	高坏蓋	3.1	11.7			石英・長石を含む	回転ナデ、連続回転ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5B5/1青灰色	N4/0灰色	外面に自然釉	
16	表道	須恵器	高坏身	5.1	13.2	14.9		石英・長石を含む	回転ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5Y5/1緑灰色	5Y5/1緑灰色	脚部に焼成時のひび割れが認められる	
17	表道	須恵器	高坏蓋	3.8	11			石英・長石を多く含む	回転ナデ、連続回転ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	口縁部に重ね焼き痕有	
18	表道	須恵器	高坏	4.65	12.6	14.1		石英・長石を含む	回転ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5B4/1青灰色	5B4/1青灰色	脚部に焼成時のひび割れが認められる	
19	表道	須恵器	高坏蓋	2.8	11.6			石英・長石を多く含む	回転ナデ、連続回転ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	10Y5/1緑灰色	5G4/1暗緑灰色		
20	表道	須恵器	高坏	4.9	12.5	14.0		石英・長石・角閃石を含む	回転ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5G4/1暗緑灰色 7.5Y7/1灰白色	5G4/1暗緑灰色	脚部に焼成時のひび割れが認められる	
21	表道	須恵器	高坏蓋	2.8	11.4			石英・長石を含む	回転ナデ、連続回転ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	N5.5/0暗灰色	5R5/1暗青灰色		
22	表道	須恵器	高坏	5.3	13			石英・長石を含む	回転ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	良好	5Y5/1緑灰色	5B5/1青灰色 5Y5/1緑灰色	脚部に焼成時のひび割れが認められる	

第8表　5ｂ号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
502	羨道	鉄鏃	15.9	1.7	0.5	0.4	0.2	練篦被片刃箭式　木質
503	羨道	鉄鏃	14.1	1.1	0.6	0.4	0.3	練篦被鑿箭式　木質
504	羨道	鉄鏃	13.6	1.3	0.7	0.4	0.3	練篦被鑿箭式　木質
505	羨道	鉄鏃	15.1	1.1	0.7	0.4	0.3	練篦被鑿箭式　木質
506	羨道	鉄鏃	17.3	0.9	0.6	0.3	0.3	篦被鑿箭式
507	羨道	鉄鏃	19.6	2.4	0.8	0.5	0.3	篦被鑿箭式　木質



第21図　5ｂ号墓出土遺物実測図　(1/3・1/2)

５ｃ号墓（第19図）

概要

２群で最も東に位置し羨門が南西方向に開口する。その立地から３基の横穴墓の中で最も新しい時期に構築されたものと思われる。玄室も他の２基に比べて小ぶりである。遺構の残りは良好でほぼ原状を留めている。

規模・構造

前庭部

５ｃ号墓の前庭部は長さ1.1m、幅1.2mで北壁側に45×20cmの小規模な基壇を持つ。前庭部の平面形が東端部において不規則なカーブを描くが、ここにはかつて５ｂ号墓の基壇があったと思われる場所で、５ｃ号墓を構築する際に削って平坦にしたものと思われる。ただ完全に５ｂ号墓の前庭部床面と同レベルまで削平しておらず、15cm程度の段差を持つ。

なお、基壇から前庭部東端部にかけて葬送儀礼にかかわる遺物が集中して出土している。

羨門部

立ち上がり部分の幅が30cm、最大幅50cm、高さ70cmである。閉塞石は残っていない。

羨道・玄室

羨道は長さ35cm、玄門付近の幅が50cm、高さ60cmである。床は玄門付近でわずかな段差がつけられ玄室との境を造る。玄室は平入りの楕円形で、奥行き90cm、幅1.65mである。側壁、奥壁とも大きく湾曲しながら立ち上がり、ドーム型の天井を有する。敷石は東壁沿いに40×30cmの範囲で５～10cm程度の円礫を配置する。枕石等の施設を想定できる。人骨もこの敷石及び周辺、さらに西壁沿いにおいて細片が確認されている。玄室の主軸はＮ－50°－Ｗである。

遺物の出土状況

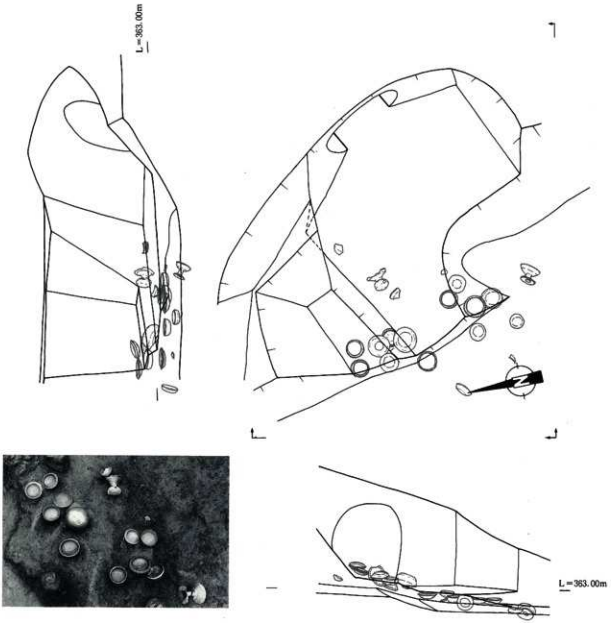
前庭部・羨門部

羨門部では遺物は出土していなかったが、前庭部において葬送儀礼に伴う遺物の集中が見られた（第23図）。前庭部に造り付けられた基壇から前庭部東端部付近にかけて須恵器の坏蓋、坏身、高坏、鼎、短頸壺等が17個出土した。墓前で祭祀を行った後に基壇上に正置していたものが転落したものと思われる。器種の構成を見ると、坏では確実に蓋と身のセットとなるものが６セット（23～34）、坏身のみが２点（35・36）、高坏１点、鼎１点、短頸壺１点である。坏身と蓋のセットの内３セットは蓋につまみが付き、身の口径は9.2cm前後のものである。２セットは受部が身に付くものである。坏身のみの２個体は、口径9.8cmと10.8cmである。高坏は５ｂ号墓羨道内から出土した高坏に比べて脚部の長いものである。鼎は３ヵ所にヘラ記号を持ち口縁部を意識的に打ち欠いている。短頸壺は口縁部が下を向いた状態で出土したが、出土位置が基壇直下であり、基壇上から転落した状況を想定したほうが良いと思われる。

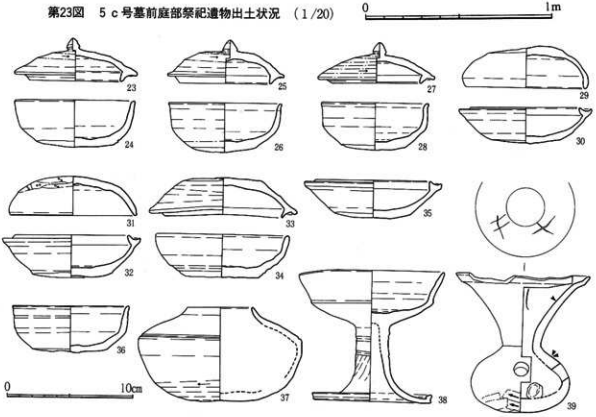
羨道・玄室部

羨道内から遺物は出土していない。玄室からは、敷石周辺からガラス小玉が５点、埋土の洗浄で耳環が１点出土した。

第22図　５ｃ号墓玄室内出土遺物実測図（実大）



第23図　5ｃ号墓前庭部祭祀遺物出土状況　(1/20)



第24図　5ｃ号墓前庭部出土遺物実測図　(1/3)

第9表　5ｃ号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格（cm）（ﾊﾟﾝきは復元径・単位cm）器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
23	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.4	7.4	9.0		長石と黒色砂粒を含む	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	10R4/2灰赤色	10R5/3赤褐色	赤紙あ	
24	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	3.8	9.5		6.8	角閃石を若干含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ	良好	5.5YR5/3にぶい褐色	2.5YR6/4にぶい橙色	赤紙あ	
25	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.45	7.3	9.4		角閃石・石英を少量含むが稀薄	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	7.5YR5/3にぶい褐色	10R6/6赤橙色		
26	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.9	8.9			石英・長石を微量に含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	10R4/6にぶい赤褐色 7.5R3/2暗赤褐色	10R4/6赤褐色	口縁部に重ね焼き痕有 他胎から人工成の可能性有	
27	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.3	7.2	9.6		石英・長石を微量に含むが稀薄	回転ヘラケズリ・回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	良好	5YR5/6にぶい赤褐色	5YR5/6にぶい赤褐色	若干に重ね焼き痕有・丸み部・他に自然釉・赤紙あり	
28	墓前祭祀-群,テラス	須恵器	坏身	3.75	8.7		5.3	雲母	回転ナデ・回転ナデ後ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ	良好	5YR7/4にぶい橙色 10YR6/6黄赤色	5YR6/6橙色	八女窯跡のものか？	
29	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.3	9.6	10		石英・長石を含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5YR5/6黒褐色 N6/0灰色	5YR4/1灰色	外面に自然釉	
30	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	2.89	8.7	10.8	5.5	石英・長石を含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N4.5/0灰色	N4/0灰色		
31	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.1	10.1			石英・長石を含む	回転ナデ・静止ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR4/1黒灰色	7.5YR4/1黒灰色		
32	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	3.35	9	12.0		石英・長石を含む内生する石の影響に黒く焼け色している	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5YR4/6灰色	N5/0灰色	外面3/4ほど自然釉	
33	墓前祭祀-群	須恵器	坏蓋	3.3	9.5	11.9		石英・長石を微量に含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N7/0灰白色	N6/0灰色	焼塩に灰かぶり有	
34	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	3.4	10.6		6	石英・長石を少量含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N7/0灰白色		
35	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	3.05	9.25	11.2		石英・長石を少量含むが稀薄	回転ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5Y5/1黄灰色	2.5Y6/6灰黄色	口縁部に重ね焼き痕有	
36	墓前祭祀-群	須恵器	坏身	3.7	9.3		6	雲母	回転ナデ・回転ナデ後ナデ・ヘラ切り後しぬきナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5YR5/4にぶい赤褐色 2.5YR4/2暗赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	八女窯跡のものか？	
37	墓前祭祀-群	須恵器	壺頸部	7.5	5.2	13		石英・長石を含むが稀薄	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ	良好	5.5GY6/1オリーブ灰色 N4/0灰色	5.5GY6/1オリーブ灰色 N4/0灰色		
38	墓前祭祀-群	須恵器	高坏	10.3	11.65		9.6	石英・長石を含むが稀薄	回転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N4/0灰色	7.5Y5/1灰色	しぼり痕有	
39	墓前祭祀-群	須恵器	鉢	10.9	10.4	7.8		雲母・石英を含む	回転ナデ・手持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	5BP5/1青灰色	5BP5/1青灰色	墨痕跡全口縁部付ちえる	有

第10表　5ｃ号墓出土玉類計測表

番　号	出土地	種類	材質	色　調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
701	玄　室	小玉	ガラス	うすい青	0.5×0.4	0.2×0.2	0.1	
702	玄　室	小玉	ガラス	青	0.3×0.3	0.2×0.2	0.1未満	
703	玄　室	小玉	ガラス	うすい青	0.5×0.4	0.2×0.2	0.1未満	
704	玄　室	小玉	ガラス	青	0.5×0.4	0.2×0.1	0.1	
705	玄　室	小玉	ガラス	青	0.4×0.3	0.2×0.1	0.1	

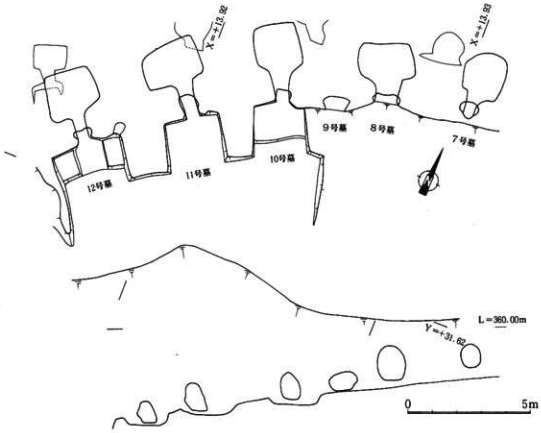
第11表　5ｃ号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作　り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備　考
402	玄室	銅地銀張	2.9×2.7	0.8×0.7	20.9	内側に銀が残る

3群（第23図）

標高約356～358m、6号墓の西隣に展開する。この3群を構成する横穴墓は6基（7～12号墓）である。この内7～9号墓はテラス一前庭部一羨門までの削平が著しい。10～12号墓のテラス一前庭部は削平を受けているもののわずかに原状を留めている。しかし羨門はほとんど原形を留めていない。このため3群については、テラス部分における横穴墓間の前後関係や、各横穴墓の追葬の有無などを推察する土層観察が行えなかった。

10～12号墓についてはテラス一前庭部において、葬送儀礼にかかわる遺物が出土している。10号墓では大甕の破砕散布、11・12号墓では前庭部において坏を中心とした遺物群が出土している。



第25図　3群遺構配置図及び立面図　(1/150)

7号墓（第26図）

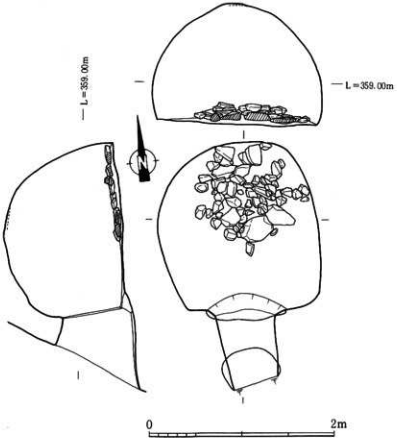
概要

3群中最も東にあり、6号墓の西約2m、標高約359m付近に位置する。前庭部及び羨門部は削平されて残っていない。

規模・構造

羨道・玄室

羨道部の長さは現状で1m、幅は55cm、高さ80cmである。玄門の幅は85cm、高さは60cmの規模を持つ。玄室は長さ1.85m、幅は奥壁寄りで1.25m、中央部付近で1.75m、玄門寄りで1.6mの規模を持つ。玄室の平面観は、基本的には妻入り長方形を呈するが両袖部は角を持ち、東壁は弱いカーブを持ちつつ奥壁へ続く。これに対して西壁は大きな弧を描きながら奥壁へ続くが、明瞭な境は無い。床面は奥壁から羨道にかけてゆるやかに下り、玄門付近で10cm程度の段差をもつ。敷石は奥壁寄りの1×1.1mの範囲に集中して分布する。用いられている礫は凝灰岩の角礫で雑然と敷かれている。天井はわ



第26図　7号墓実測図　(1/40)

ずかに落盤しているものの、ドーム型の天井形を有する。主軸はN－1°－Wである。

遺物の出土状況

羨道及び玄室内から遺物は出土していない。

8号墓（第27図）

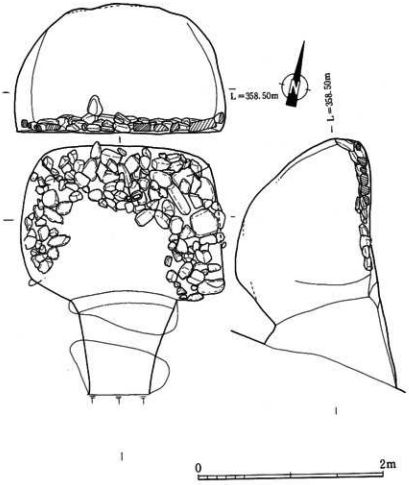
概要

7号墓から3m西、標高約358m付近に位置する。7号墓同様前庭部～羨門にかけて削平され、原状を留めていない。

規模・構造

羨道・玄室部

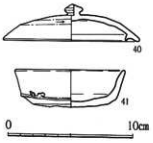
羨道は大きく削平され羨門等の施設は全く確認できない。長さは現状で90cm、幅は60cm～1m、天井部は落盤のため計測不能である。玄門は幅1.1m、高さ1.2mである。玄室は平入り長方形で奥行き1.55m、奥壁寄りの幅1.85m、中央部幅2.15m、玄門寄りの幅2.1mである。東側壁は直線的に奥壁へ続くが、西側壁はややカーブを描きながら奥壁へ続く。礫床は凝灰岩と安山岩が混じり、壁沿いに寄せ集めたような分布状況を呈する。玄門付近には全く礫が確認されていないことから、追葬時あるいはこの横穴墓が開口後に壁寄りに押しやったものと思われる。床面は奥壁から緩やかに下りつつ、玄門付近で10cm程度の段差を持つ。天井は落盤が著しいため一応ドーム型としておく。主軸方向はN－15°－Eである。



第27図　8号墓実測図　（1/40）

遺物の出土状況

玄室内から須恵器の坏蓋１点、坏身１点が出土した。いずれも寄せ集められた礫に混じって出土し、原位置を保つものではない。



第28図　８号墓出土遺物実測図　（1/3）

第12表　８号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	最低に対する口径・年径(cm) 胴径	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
40	玄室	須恵器	坏蓋	2.9	8.7	10.2		石英・長石を含む 他の石は抜けて黒くなっている	回転ナデ・機銘回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N4.5GY色	N4.5GY色		
41	玄室	須恵器	坏身	3	8.85		6	やや粗い 石英・角石を含む	回転ナデ・ヘラ切り 後ヘラ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N4.5GY色 N2.5B黒色 5Y7/2 浅黄色	N4.5GY色 N5.0B色	部無色結晶・黒粒混ざりしている 灰かぶり有	

９号墓（第29図）

概要

８号墓の西1.5m、標高約357m付近に位置する。前庭部～玄室にかけて大きく削平を受けていて現状は玄室の一部を残すのみである。

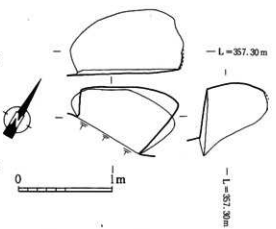
規模・構造

玄室部

現状で奥行き65cm、幅90cmである。大きく削平されているため、平面形及び天井形については分類不能である。主軸方向はN－１°－Eである。

遺物の出土状況

遺物は出土していない。



第29図　９号墓実測図　（1/40）

10号墓（第28図）

概要

９号墓の西約２m、標高357.3m付近に位置する。前庭部はかなり削平されているもののその形態は窺い知ることが可能である。しかし羨門は原状を留めていない。前庭部は祭祀にかかわる遺物が出土している。

規模・構造

前庭部

前庭部は２段構造で上段は長さ45cm、幅95cm、下段は長さ45cm、幅90cmで５cm程度の段差を持つ。また10号墓から12号墓にかけては各横穴墓が共有するテラスが検出されている。基壇等の施設は設けられていない。

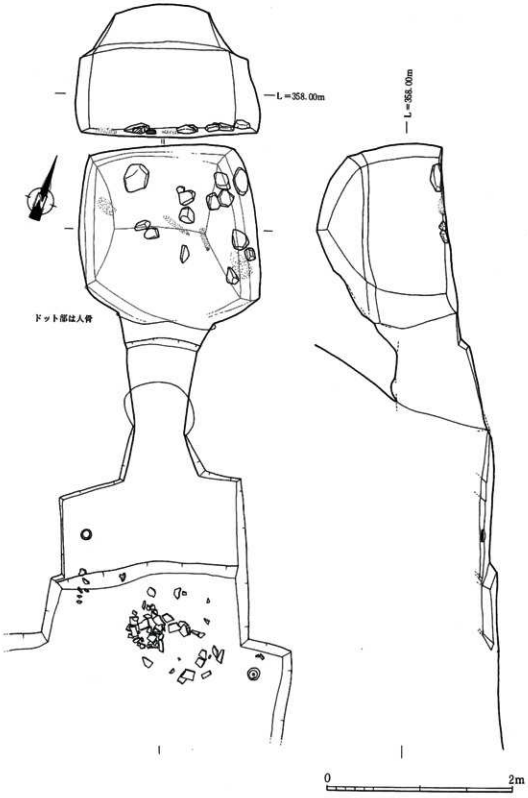
羨門部

現状での計測値は幅55cm、最大幅70cm、高さ90cmである。

羨道・玄室

羨道は、玄門に行くにしたがって広がり、最大１m近くになる。床面は玄門から25cm羨門側に下った部分で約15cmの段差を持つ。この横穴墓は、玄室の床面のレベルと羨門付近のレベルが50cm以上の差があり、羨門部床面は20度の角度を持ちつつ玄室へ続く。天井は羨門側及び玄門側が共に落

盤している。中央部の残存部で約80cmである。玄門は幅１m、高さは落盤しているため現状で90cmとなっている。玄室は正方形に近く、奥行き2.1m、奥壁寄りの幅1.75m、中央部幅1.9m、玄門寄り幅1.85mである。敷石は非常に疎らで中央から東壁にかけて凝灰岩の角礫が15個程度散らばる。壁はそれぞれほぼ直立し、床面から約90cmの高さで鴨居状の屈曲を持ちつつ天井部へ続く。天井は家型で最大高は1.4mである。主軸方向はN－24°－Wである。



第30図　10号墓実測図　(1/40)

遺物の出土状況

前庭部

前庭部のほぼ中央部で、須恵器大甕の破砕散布が見られた。また、坏蓋3点、坏身2点、平瓶1点、土師器の高坏2点が出土したが、これらの出土状況に規格性は認められない。

羨道・玄室部

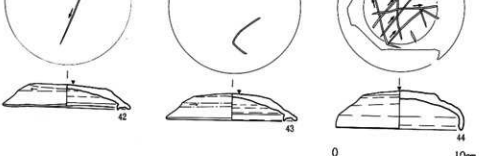
玄室内の埋土の洗浄で耳環が1点出土した。

第13表　10号墓出土土器観察表

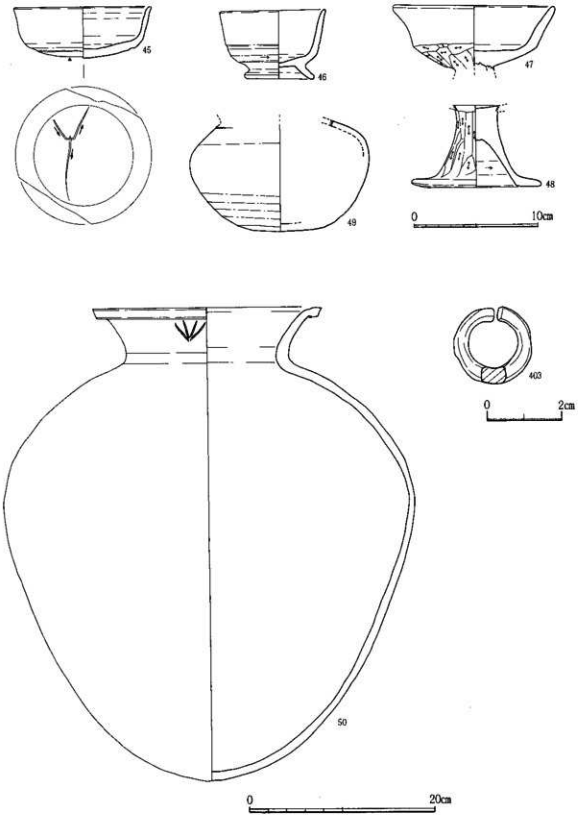
番号	出土位置・遺構	種別	器種	規模(　)内は復元値・単位(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
42	テラス	須恵器	坏蓋	1.95	8.2	10.6		石英を含むが精緻	回転ナデ・ヘラ切り 無しボナデ	回転ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	ヘラ切り時のヘラのヘラ痕が認められる又他に重ね焼痕　灰かぶり有	有
43	テラス	須恵器	坏蓋	2.12	8.5	10.5		石英・長石を微量含むが精緻	回転ナデ・ヘラ切り 無しナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/1青灰色	N4.5/0灰色	全部に重ね焼き痕有	有
44	テラス	須恵器	坏蓋	3.1	(10.0)			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N2/0黒色	N6/0灰色	外面に自然釉	有
45	テラス	須恵器	坏身	4.05	11		7.3	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5Y6/1黄灰色	5Y6/1灰色		有
46	前庭部	須恵器	小型坏身	5.4	(8.5)		5.6	石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5Y7/3浅黄色	2.5Y7/3浅黄色		
47	テラス	土師器	高坏	53上	12.8		—	微細砂を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5YR6.5/6橙色	2.5YR6.5/6橙色	しぼり痕有　坏部のみ	坏
48	テラス	土師器	高坏	68上			10.6	微細砂を含むが精緻	回転ナデ・上下方向ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	5YR6.5/6橙色	5YR6.5/6橙色	脚部のみ　しぼり痕有　脚部一部に黒斑有	
49	前庭部	須恵器	平瓶	8.88上		14.4		石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・ヘラ切り はなし・連続回転ヘラケズリ		良好	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色		
50	テラス	須恵器	壺	50.1	24.2	43.4		石英	平行タタキ・ユキ目・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・押し円ナデ	良好	濃青灰色～黒色	濃青灰色～黒色	自然釉がかかる	有

第14表　10号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
403	玄室	銅地金張	2.1×2.0	0.8×0.5	12.2	側縁部が剥落



第31図　10号墓出土遺物実測図1　(1/3)



第32図　10号墓出土遺物実測図２　（1/3・1/4・実大）

11号墓（第33図）

概要

10号墓の西約４ｍ、標高357ｍ付近に位置する。テラス～前庭部～玄室まで残るものの前庭部は上面を大きく削平され、羨門は原状を留めていない。なお、前庭部に墓前祭祀の痕跡が認められる。

規模・構造

前庭部

前庭部は幅2.2ｍ、長さ２ｍで基壇等の施設は持たない。上面は大きく削平されているため深さは10cm程度である。

羨門部

削平を受けていて、原状は留めていない。現状は幅65cm、高さ90cmである。閉塞石等に伴う痕跡も認められない。

羨道・玄室部

羨道は長さ1.45ｍ、羨門側の幅55cm、玄門側の幅50cmとほぼ同じ幅で玄室へと続く。高さは95cmである。玄門は幅95cm、高さ90cmで、東壁側で玄門から玄室へ取り付く部分に10×20cm程度の小さな張り出しを持つ。玄室は平入りの長方形で奥行き1.55ｍ、奥壁側幅2.1ｍ、中央部幅2.3ｍ、玄門寄り幅2.15ｍである。東壁は比較的直線的に造られるが、西壁はやや雑に造られている。敷石は凝灰岩の角礫を用い、ほぼ東西方向に乱雑に広がる。後述するように出土遺物から追葬が行われた可能性が高く、追葬時に敷石が乱されたとも考えられよう。なお天井は家型である。玄室の主軸はＮ－36°－Ｗである。

遺物の出土状況

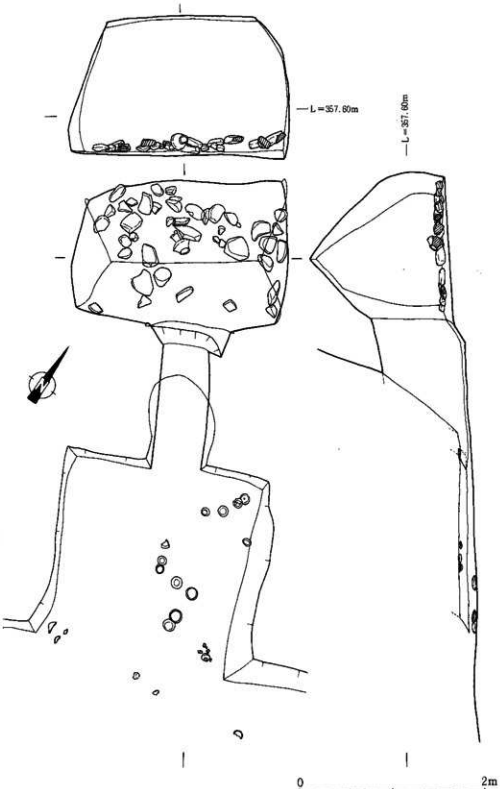
前庭部

前庭部東半部において須恵器が出土した。明確な祭祀の状況は認められないものの東肩部、中央部において遺物が集中している。ここから出土した須恵器は坏蓋９点、坏身７点、鼎１点、長頸壺蓋１点（68）である。

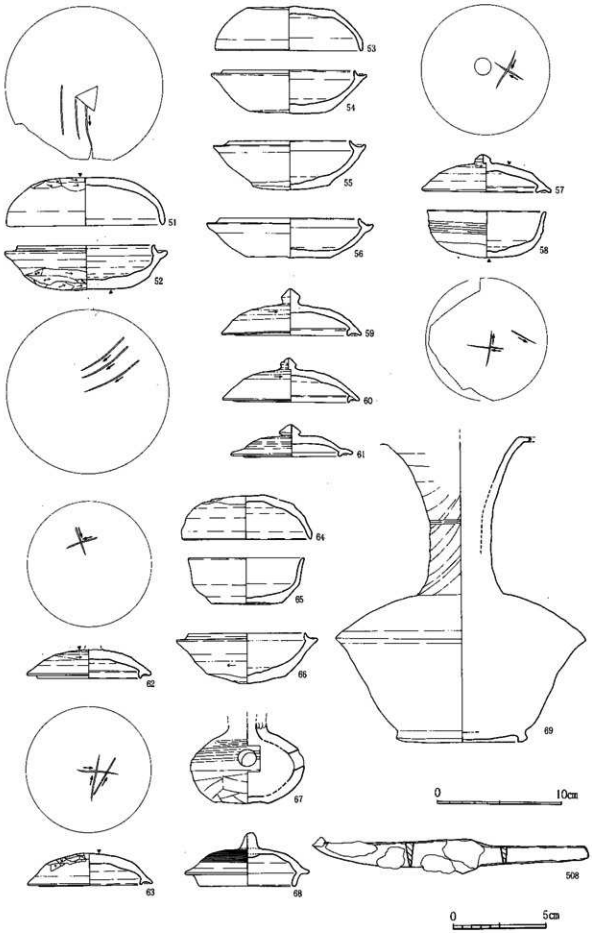
前庭部の出土遺物を見ると、口径10.5～13.6cmに収まるもの（51～56）、口径が8.1～9.4cmに収まるもの（57～66）の２時期が見られる。概ね６世紀末から７世紀後半代に比定できよう。土層観察による追葬の有無は確認できなかったが、前庭部の出土遺物から最低１回の追葬が行われたものと思われる。

羨道・玄室

玄室のほぼ中央部に奥壁側に倒れた状態で長頸壺が１点出土した。また玄室内の埋土の洗浄において刀子が１点出土した。なお、前庭部で出土した長頸壺の蓋はこの壺と同一個体の可能性をもつ。



第33図　11号墓実測図　(1/40)



第34図　11号墓出土遺物実測図（1/3・1/2）

第15表　11号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	器種	器種	残存（残存は復元部・単位cm） 口径	口縁	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外周	色調 内周	備考	ヘラ記号
51	テラス	煮炊器	甕	3.8	12.5			石英・長石を含むが緻密	回転ナデ・縦止ヘラナデより	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N7.5YR7/1灰色	N6/0灰色	天井部分下部に段あり底部外面の変わる丸底	有
52	テラス	鉢炊器	甕	3.5	11.0	13.3		石英・長石を含むが粗密	回転ナデ・縦止ヘラナデより	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色 N3/0黒色	N5/0灰色	外面に自然釉・口縁部に重ね焼痕有	有
53	テラス	煮炊器	甕	3.5	11.2			雲母粒を含むが粗密	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	外面に自然釉(灰)	
54	テラス	煮炊器	甕	3.43	10.6	12.8	6.6	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り 後に強ナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5Y5/1青灰色	N5/0灰色		
55	テラス	鉢炊器	甕	13.2	9.7	12.3	3.9	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り 後に強ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5Y5/1灰色	N5/0灰色	口縁部及び内面全面を打ち欠いている	
56	テラス	煮炊器	甕	3.1	11.2	13.6	6.5	石英・長石を含む（内面する石が表面に多く露出して部分用している）	回転ナデ・ヘラ切り 後に強ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	酸化	N5/0灰色 7.5YR4/3に近い褐色	N6/0灰色	全部に重ね焼き痕跡	
57	テラス	鉢炊器	甕	3	8.3	10.6		石英・長石を微量含むが緻密	回転ナデ・縦横回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5Y5/1灰色	5Y7/1灰白色		有
58	11号テラス12～13 第X層 11号テラス	鉢炊器	甕	3.7	(6.6)		7.7	石英を少量含むが緻密	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ	やや不良	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y7/2灰黄色		有
59	テラス	鉢炊器	甕	3.72	9.1	11.4		石英・長石を含む	回転ナデ・縦横回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	2.5Y6/1黄灰色		
60	テラス	鉢炊器	甕	3.5	9.2	10.2		石英・長石を含むが緻密	回転ナデ・縦横回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色		
61	テラス	鉢炊器	甕	2.55	7.6	10.0		石英・長石を少量含むが緻密	回転ナデ・回転ミガキ？・縦横ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5Y5/1灰色	5Y6/1灰色		
62	テラス	鉢炊器	甕	2.35	8.3	10.5		石英・長石・角閃石を含む	回転ナデ・縦横回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N4.5/0灰色	5Y6.5/2灰白色	つまみ痕大振	有
63	テラス	鉢炊器	甕	2.55	8.1			雲母粒を多くきむが緻密	回転ナデ・縦止ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	酸化	2.5Y7/1灰白色 2.5Y6/1黄灰色	2.5Y7/2灰黄色		有
64	テラス	鉢炊器	甕	3.05	10.4			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5.5/0灰色	N5.5/0灰色	口縁部に重ね焼き痕有 ヘラ切り後のヘラのヘラ痕が認められる	
65	テラス	煮炊器	甕	3.6	9.3		5.6	緻密	回転ナデ・ヘラ切り はなし	回転ナデ	良好	5Y5/1灰色 7.5Y5/1オリーブ黒色	5Y5/1灰色		
66	テラス	煮炊器	甕	4	9.4	11.8		石英・長石を少量含むが緻密	回転ナデ・ヘラ切り はなし・縦横ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5YR5/1褐灰色 7.5YR3/2黒色	N6/1灰色	表面に灰かぶり有	
67	テラス	鉢炊器	鍋			9.0		雲母・石英を含む	回転ナデ・縦横ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ・ガキ山	回転ナデ	良好	7.5YR4/4鈍黄橙色	5.3YR4/4鈍黄橙色		
68	テラス	鉢炊器	長胴甕	4.25	7.8	10.1		石英・長石を少量含むが緻密	回転ナデ・ガキ谷	長石ナデ・不定方向ナデ	良好	5R5/1灰色	N6/0灰色	外底全面に自然釉 胎土中に空洞が入っているため、ふくれたりしている	
69	玄室	鉢炊器	長胴甕	24.2		30	10.5	石英・長石粒を含む	回転ナデ・しぼり痕 ユの字状ナデ	回転ナデ	良好	5YR5.5/1青灰色 5YR4.5/1褐灰色 5PB4.5/1暗紫灰色	5YR5.5/1青灰色	口縁部全体に 5YR4.5/1褐灰色	

第16表　11号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
508	テラス	刀子	14.7	8.8	1.4	0.9	0.5	

12号墓（第35図）

概要

標高約356.5m、３群中最も西に位置する横穴墓である。前庭部～玄室にかけて比較的残りも良く前庭部において土層観察を行った。ただ羨門部及び玄室内の天井部は原状を留めていない部分がある。

規模・構造

前庭部

前庭部は10～12号墓が共有するテラスを切る形で造られている。長さ５m、最大幅3.3mである。肩部は東西とも長さ１m、幅80cm程度の基壇を持つ。さらに東肩部にはN－13°－E方向に長さ85cm、幅35cm、高さ30cmの長方形の穴が掘られている。東側の基壇からはほとんど遺物は出土しなかったが、西側の基壇上には若干の遺物が出土している。

前庭部に堆積した土層はⅣ層に分れⅠ・Ⅱ層は崩落土、Ⅲ層は黒褐色土で初葬埋土にかかわる風化土と思われる。Ⅳ層は暗灰色土層で初葬埋土と思われる。この土層観察では追葬等のラインは確認できなかった。

羨門部

削平を受けて原状は留めていない。現状で立ち上がり部の幅58cm、高さ87cmである。閉塞石等の施設は残っていない。

羨道・玄室部

羨道は長さ1.1m、幅45cm、高さ80cmである。羨門側及び玄門側ともほぼ同じ幅で玄室へ続く。玄門は幅80cm、高さ65cmである。玄室は平入りの不整長方形で、やや台形に近い。奥行き1.45m、奥壁側の幅1.8m、中央部幅２m、玄門側幅2.15mである。また11号墓と同様東壁側の玄門から玄室へ取り付く部分に不整形な張り出しを持つ。西壁の玄門側隅はやや北方向に入り込むようにえぐられている。敷石は全く施されていない。床面は前庭部と約65cmのレベル差があり、奥壁から前庭部まで約15度程度の傾斜を持ちながら下る。玄室と羨道の境は10cm程度の段差を持つ。四隅とも明瞭な稜が立ち上がるが、いずれも約80cmの高さ付近で落盤のため不明瞭となる。玄室の形態からおそらく家型タイプの天井となるであろう。なお最大高は1.2mである。玄室の主軸方向はN－28°－Wである。

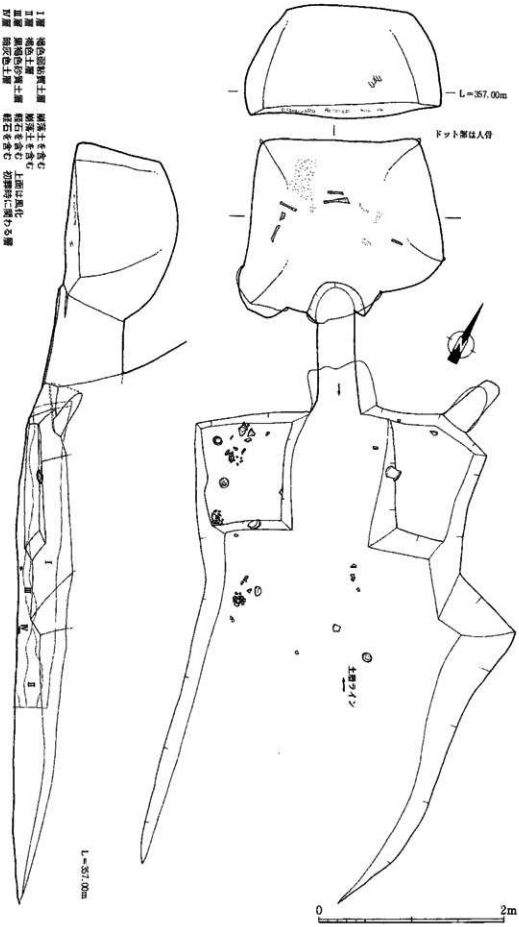
遺物の出土状況

前庭部

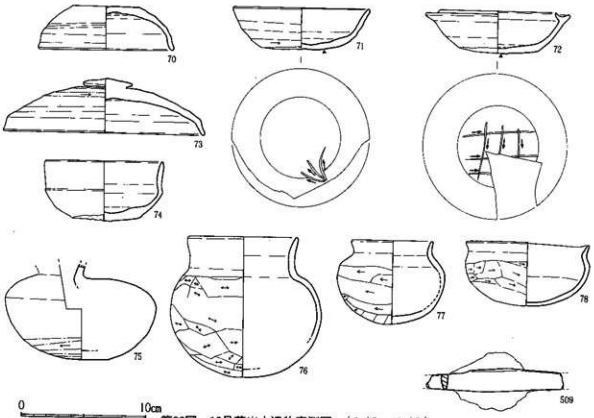
前庭部から出土した遺物は須恵器の坏蓋１（70）、坏身２（71・72）、高坏蓋１（73）、塊１（74）、平瓶１（75）、土師器の塊１（78）、小型短頸壺１（77）、壺１（76）であった。大部分が西側基壇上で出土したが東側基壇上でもわずかに出土している。しかし出土状況に意図的な配置は認められない。概ね６世紀末から７世紀後半代の所産と思われる。

玄室

玄室内は人骨が出土したが細片であった。また埋土の洗浄中に刀子が１点確認されたのみで他の遺物は出土しなかった。



第35図　12号墓実測図　(1/40)



第36図　12号墓出土遺物実測図　(1/3・1/2)

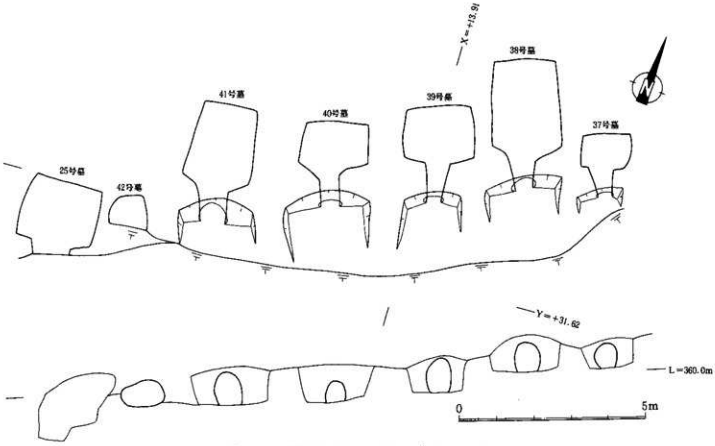
第17表　12号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規模(※は復元値・単位cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
70	テラス	須恵器	坏蓋	3.5	15.9			小石を多く含む	回転ナデ・ヘラ切り後に粗ナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	やや不良	7.5YR3/1灰白色 2.5YR6/6に近い橙色	7.5YR5/3灰黄色		
72	テラス	須恵器	坏身	3.3	13.9		6.6	細砂	回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・部分的に横方向のナデ・不定方向ナデ	良好	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色		有
73	12号テラス 13号テラス	須恵器	坏身	3.3	9.3	11.8	6.1	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後に粗ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	やや不良	7.5Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	他部に重ね焼き痕 手可内に赤色顕著 手性者と思せる 焼められる位置が 色は切り離し痕が 認められる	有
74	テラス	須恵器	坏蓋	4.3	14.1			石英・長石を多く含む	回転ナデ・逆時計回ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5Y7/1灰白色	2.5Y8/1白色		
75	テラス	須恵器	カップ型土器(瓶)	4.8	8.5		3.5	石英・長石を微量含む中細砂	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N7/0灰白色	5GY6/1オリーブ灰色	沈み込り有	
76	テラス	須恵器	甕	7.5※		22		石英・長石を含む	回転ナデ・逆時計回ヘラケズリ		良好	N5/0灰色 N3/0黒色		自然釉	
77	テラス	土師器	皿	11.1	8.7	12.1		細砂粒・雲母を含む少量砂礫	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR7/4に近い橙色 7.5YR7/6に近い橙色	10YR7/6橙色 7.5YR7/4に近い橙色	外面黒斑有	
77	テラス	土師器	小型甕 鍋等	6.6	6.4	8.6		細細砂・雲母を含む少量砂礫	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	10YR6/6橙色	10YR6/6橙色	外面一部黒斑有	
78	テラス	土師器	甕	5.0	9.9			細砂	回転ナデ・静止ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	良好	10YR8/2灰白色 7.5R5/4に近い赤橙色	10YR8/2灰白色 7.5R5/4に近い赤橙色	一部ヘラ状工具の跡有	

第18表　12号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
509	テラス	刀子	7.0＋α	不明	0.8	—	0.4	



第37図　4群遺構配置図及び立面図　(1/100)

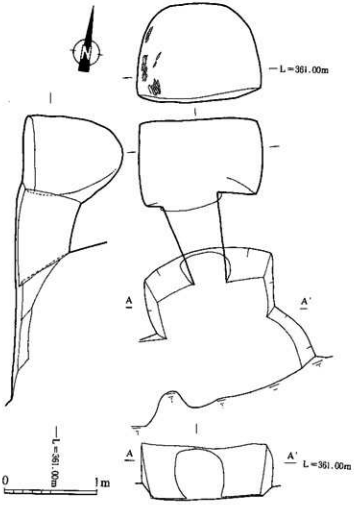
4群（第37図）

4群は調査区上段のほぼ中央部、標高360m付近に展開する。構成する横穴墓は7基（37～42・25号墓）である。このうち37～41号墓は前庭部が確認されている。しかしテラス状の張り出し部を含めて大きく崩落しているため、42号は玄室の一部、25号は羨道の一部と玄室を残すのみであった。また、各横穴墓の前後関係を推定する土層は確認できなかった。ただし39・40号墓については前庭部に若干の土層が確認された。

37号墓（第38図）

概要

37号墓は4群中最も東にあり、標高360.6m付近に位置する。テラスの一部が残存しそこに小規模な前庭部が造られている。玄室もやや小型で造りも雑である。



第38図　37号墓実測図　(1/40)

規模・構造

前庭部

前庭部の規模は長さ40cm、幅60cmで基壇等の付属施設はつかない。

羨門部

羨門は立ち上がり部の幅40cm、最大幅50cm、高さ55cmである。閉塞石等の施設は残っていない。

羨道・玄室部

羨道は羨門側から玄門側へ大きく広がりながら延びる。規模は長さ1.1m、幅は玄門側で60cmである。高さは55～72cmである。玄室は平入り長方形で羨道が西壁側に大きく寄って取り付く。

天井部の形態はドーム型を呈し、最大高は1.1mであった。また奥壁東部分に幅5～7cmの工具痕が観察された。床面は奥壁から緩やかに下り玄門付近で5cm程度の段差を持ち前庭部へと至る。排水溝等の付属施設は確認できなかった。なお主軸の方位はN－10°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部及び玄室からは遺物は出土していない。

38号墓（第39図）

概要

37号墓の西約2m、標高360.3mに位置する。前庭部～羨門部～玄室と遺構の残りは良好である。ただし前庭部の埋土はほとんど失われていて土層観察は出来なかった。前庭部にはほとんど遺物が見られず、羨道～玄室内において遺物が出土した。ただ原位置を保つものはない。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ2m、幅1.85mで基壇等の施設は持たない。東側は長さが1m程で東方向へ曲がり37号墓の前庭部とつながる。

羨門部

残りは比較的良好で、立ち上がり部の幅50cm、最大幅60cm、高さ70cmで、閉塞石等の施設は残っていない。

羨道・玄室部

羨道は長さ90cm、玄門部で幅1m、高さ1.05mで37号墓同様羨道は玄室に向かって大きく広がる。玄室は妻入り長方形で、羨道がやや西壁寄りに取り付く。規模は奥行き2.5m、奥壁側幅1.8m、中央部幅1.8m、玄門側幅1.9mである。玄室は非常に造りが丁寧で、東西壁は稜線が明瞭に観察できる。また奥壁には鴨居状の段差を造り出していて、すべての壁に幅8cm程度の工具痕が観察される。床面には東半部のやや奥壁寄りの部分に凝灰岩を用いた敷石が認められたが非常に疎らであった。天井部は家型で最大高は1.75mである。排水溝等の施設は設けられていない。玄室の主軸はN－20°－Wである。

遺物の出土状況

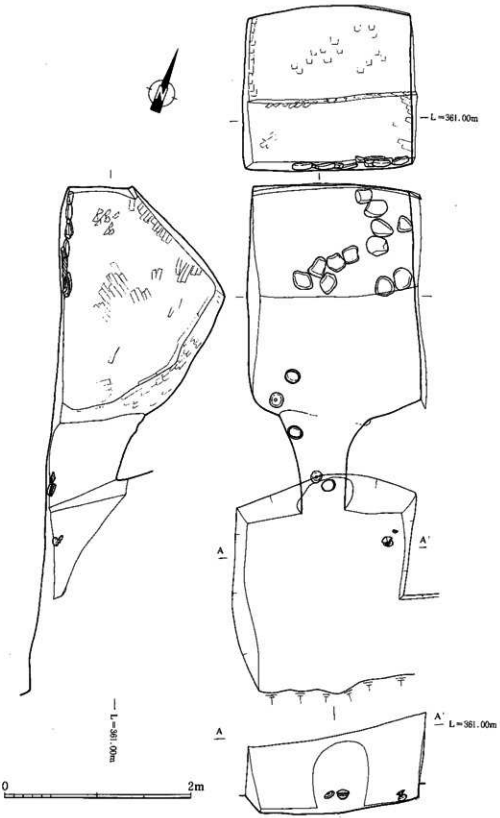
前庭部

前庭部では東肩部付近で鹿が1点出土したのみである。6世紀中葉前後の所産と思われる。

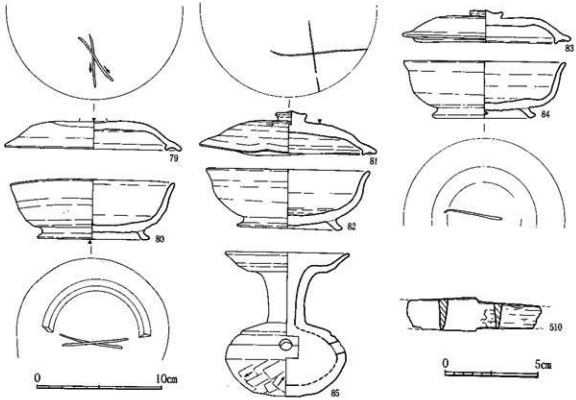
羨道・玄室

羨道～玄室の西壁沿いにかけて坏蓋3、坏身3が出土した。いずれも原位置は保っていないが、セットとなる。7世紀中頃から後半代の所産と思われる。

前庭部及び玄室内の出土遺物から追葬が行われた可能性が高い。



第39図　38号墓実測図　(1/40)



第40図　38号墓出土遺物実測図　(1/3・1/2)

第19表　38号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	量(%) 残存	口径	底径	器高	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
79	表採	黒色土器	坏身	2.21	11.8	14.4		石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5PB5/1青灰色	N5/0灰色	内面に重ね焼き痕跡	有
80	表採	黒色土器	坏身	4.7	13.15			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ・ヨコナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	口縁部に重ね焼き痕有	有
81	玄室	須恵器	坏蓋	3.6	12.05	14.3		石英・長石を含む	回転ナデ・連続刷毛・ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0暗灰色	7.5PB5/1紫色	外面に灰かぶり有	有
82	玄室	須恵器	坏身	4.7	13.1		8.4	石英・長石・無機質を多く含む	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR5/6明赤褐色 5R5/1青灰色	5R5/1青灰色		
83	玄室	須恵器	不明	2.6	11.8	13.8		石英・長石を含む	回転ナデ・連続刷毛・ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5.5/0灰色		
84	表採	黒色土器	坏身	4.5	12.45			石英・長石・赤色土を含む	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ・ヨコナデ・篦削ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5B5/1青灰色	5B4.5/1青灰色		有
85	テラス	黒色土器	鉢	11.3	(30.0)	9.8		石英・雲母	回転ナデ・手持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	口縁部打ち欠き痕跡文	

第20表　38号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
510	玄室	刀子	7.2＋α	不明	1.7	1.4	0.6	木質

39号墓（第42図）

概要

38号墓の西約２m、標高359.5m付近に位置する。テラスは崩落によって失われているものの、前庭部～羨門～玄室の残りは良好である。前庭部の土層観察を行なった。前庭部～玄室における祭祀行為については確認されなかったが、羨道内において礫の集中部分が認められた。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ2m、幅1.85mで東壁が1ヵ所、西壁が2ヶ所小さなくびれを持つ。また西壁は西方向に屈曲し40号墓の前庭部につながる。この前庭部における土層観察では大きく3層に分かれ、Ⅰ層は暗黄褐色砂質土層で上部崖面からの崩落土である。Ⅱ層は暗灰黄褐色砂質土層で、わずかに風化を受ける。堆積状況から、追葬時の埋土と思われる。Ⅲ層は黄褐色粘質土層で、初葬時の埋土である。

羨門部

幅1.5m、高さ1.1mのフラットな面を造り出しそこに立ち上がり部幅54cm、高さ70cmの羨門を造っている。閉塞石等の施設は確認できない。なお、この横穴墓は羨道部に玄室内の敷石を集積しているが、一部が前庭部に露出している。

羨道・玄室部

羨道は玄室に向かってわずかに開き気味に造られている。長さは1.1m、玄門部幅が65cm、高さ68cmである。玄室は平入り胴張り長方形で、天井は家型である。玄室の奥行きは1.55m、最大高1.4mで、奥壁側の幅が1.7m、中央部の幅が1.95m、玄門側の幅が1.8mである。床面に敷石は全く無く、羨道南半部にすべて集積されている。土層観察で追葬が確認されていることから、追葬時に玄室内の敷石をすべて除去し、それを掻き出したものと思われる。また奥壁～羨道～前庭部と段差を造らずに、緩やかに下る。玄室内のすべてに壁に工具痕が残っていて、床面から1.1mまでの間は幅8cm程度の工具で上から下へ整形を施したものが多く、天井部は棟を形作るため横方向へ工具痕が残る。玄室の主軸はN－25°－Wである。

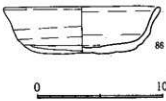
遺物の出土状況

前庭部

前庭部で床面直上から坏身1点と埦1点が出土した。埦は高台がつくことから7世紀後半の所産と思われる。

羨道・玄室部

遺物は出土はしていない。



第41図　39号墓出土遺物実測図　(1/3)

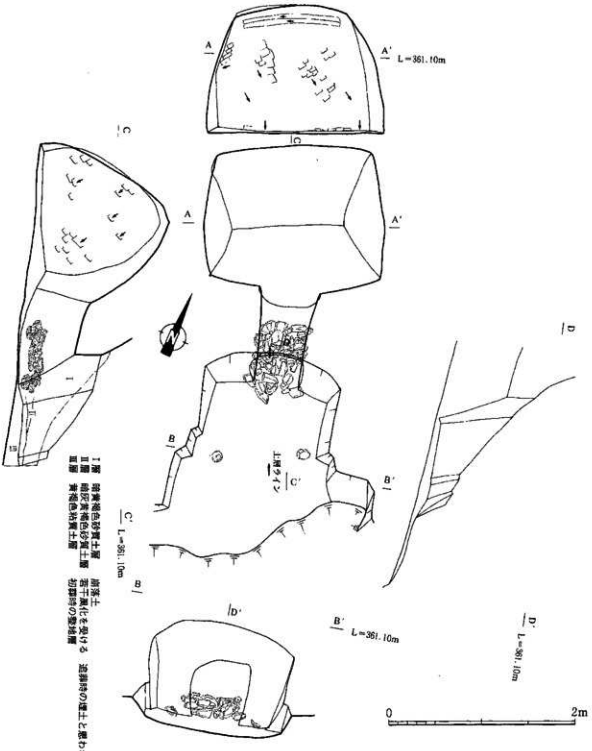
第21表　39号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	残存	器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
86	テラス	須恵器	坏身	完	3.7	12.55		9.45	石英・長石を有る小粒砂	回転ナデ・ヘラ切り 底に金一筋ナデ	回転ナデ・小定方角ナデ	良好	N6.5GY5色 2.5Y7/2灰黄色	10YR7.5灰にぶい黄橙色		
87	テラス	須恵器	埦	完	6.3	11.95		6.3	長石の白色角粒が内外面に目立つ 石英 長石を含むが細粒	回転ナデ・ヘラ切り はなし・底部ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	底ホぶり有	

40号墓（第43図）

概要

39号墓の西約2m、標高359.2m付近に位置する。テラス部分は崩落してほとんど残っていないが、前庭部～羨道部～玄室の残りは良好である。また前庭部の埋土の堆積状況も良好で土層観察を行った。



第42図　39号墓実測図　(1/40)

規模・構造

前庭部

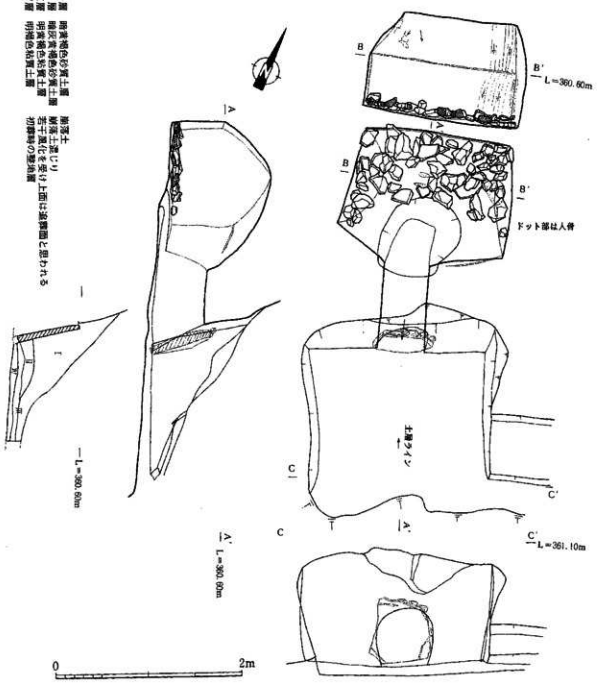
長さ1.7m、幅1.95mで、墓壇やくびれなどは持たないシンプルな造りである。東側は39号墓の前庭部とつながるが、この部分に南北50cm、東西1mのフラットな面を造り出している。ここに堆積した埋土の土層観察では4層に分かれ、Ⅰ層が暗黄褐色砂質土層で崩落土、Ⅱ層が暗灰黄褐色砂質土層でこれも崩落土である。Ⅲ層は明黄褐色粘質土層でわずかに風化を受ける。この層の上面は追葬時の面と思われる。Ⅳ層は明褐色粘質土層で、初葬時の埋土である。

羨門部

幅2m、高さ1.2mのフラットな面を造りそこに羨門が設けられている。羨門には高さ70cm、最大幅65cmの厚さ10cm程度の閉塞石が残っていた。閉塞石に用いた礫は阿蘇溶結凝灰岩の扁平礫を用い、隙間に握り拳大の角礫を充填している。羨門自体は立ち上がり部幅50cm、高さ65cm、最大幅60cmである。

羨道・玄室部

羨道は長さ90cmで玄門幅が50cm、高さ60cmである。玄室は平入り長方形で天井は家型と思われる。奥行き1.35m、最大高1.1mで、奥壁側の幅が1.6m、中央部幅が1.75m、玄門側の幅が1.8mであ



第43図　40号墓実測図　(1/40)

る。床面は玄門付近から奥壁側にかけて南北90cm、東西85cmほど段差を作っているため、敷石も奥壁寄りの部分に見られるのみである。敷石には凝灰岩の角礫が用いられている。また入り口側の壁及び奥壁には庇を意識した稜線が造り出されている。奥壁にはこの庇状の稜線を形成する際の幅8cm前後の工具痕が縦方向に十数条観察され、隅の稜線についても両側壁からと奥壁からの工具痕も明瞭に残る。玄室の主軸方向はN－15°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部及び玄室内から遺物は出土していない。

41号墓（第44図）

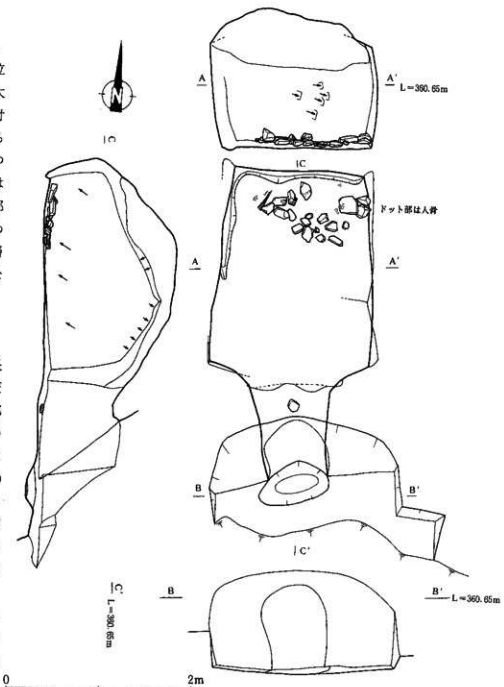
概要

40号墓の西2m、標高360m付近に位置する。前庭部の大半が失われ、羨門付近が残るのみであるが、羨道～玄室については比較的残りは良好である。前庭部が崩落しているために埋土に対する土層観察は行っていない。

規模・構造

前庭部

現状で幅2m、長さ45cmである。ただし東部分は羨門肩部から南へ50cm、その後東へ45cm、さらに南へ45cm延びる。40号墓の前庭部とつながっていた可能性が高い。最大幅が70cmである。閉塞石は確認できなかったが、浅い掘りこみが造られていることから本来は閉塞石があったものと思われる。



第44図　41号墓実測図　(1/40)

羨道・玄室部

羨道は玄室に向かってやや開き気味に延び、長さは１mである。玄門の幅が１m、高さは80cmで天井部は部分的に落盤している。玄室は妻入り長方形で、奥行き2.2m、奥壁側の幅が1.5m、中央部の幅が1.65m、玄門側の幅が1.7mである。天井は落盤が進んでいるため現状での最大高は1.4mである。ただ東壁側の天井部分に残る痕跡からこの横穴墓の天井形は家型であると思われる。床面は段差が無く、わずかに傾斜を持ちつつ前庭部へ至る。奥壁際から西壁中心付近まで幅７cm程度の排水溝を設けている。敷石は奥壁付近にわずかに見られ一部に人骨と思われる細片が認められた。

奥壁及び両側壁には幅10cm程度の工具痕が部分的に観察された。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

42号墓（第45図）

概要

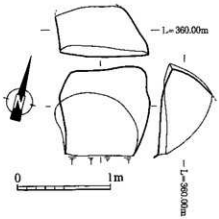
41号墓の西約３m、標高360m付近に位置する。大半が崩落し現状では玄室の一部が残存する。

規模・構造

残存する玄室は奥行き90cm、最大幅95cmである。主軸方向はN－14°－Wである。

遺物の出土状況

遺物は出土していない。



第45図　42号墓実測図　（1/40）

25号墓（第46図）

概要

42号墓の西1.5m、標高359m付近に位置する。前庭部～羨道が崩落し、玄室部も大きく開口し残りが非常に悪い。

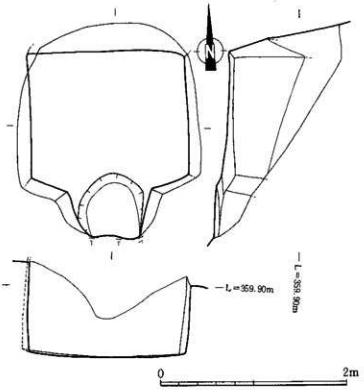
規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道は長さ45cm、玄門部幅が95cmである。玄室は方形で奥行き1.5m、幅1.6mである。床面に敷石は見られない。また玄門付近には高さ８cm程度の段差を持つ。天井形は不明である。なお玄室の主軸はN－２°－Wである。

遺物の出土状況

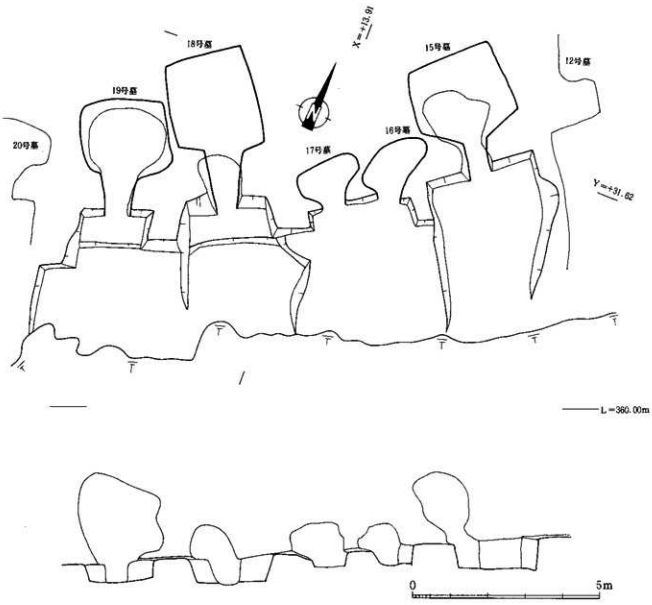
遺物は出土していない。



第46図　25号墓実測図　（1/40）

5群（第47図）

5群は、調査区下段の標高約355m、3群の西隣に位置する。構成する横穴墓は、15～19号墓である。この5基の横穴墓は共有するテラスの北端部が一部崩落しているものの、比較的残存状態は良好である。テラス部における横断土層や玄室形態及びその配置から当初15号墓が形成され、その後18号墓→19号墓→17号墓→16号墓の順に構築されたものと思われる。15・18・19号墓では前庭部に置いて多量の遺物が出土している。いずれの横穴墓も大半の遺物が羨門付近に一括して出土しており、当時の葬送儀礼に関わる祭祀行為を窺い知ることが出来る。遺物の出土量から15号墓が5群中最有力者の墳墓であるものと思われる。逆に16・17号墓は玄室形態も非常に小型化し、遺物も出土しないといった極端な横穴墓であった。



第47図　5群遺構配置図及び立面図　（1/100）

15号墓（第48図）

概要

5群中最も東、標高356m付近に位置する。東隣には12号墓がある。前庭部の残りは良好で、羨門付近には祭祀行為に伴う遺物が多量に出土した。しかし羨道の天井部～玄室にかけては一部削平を受けている。

規模・構造

前庭部

長さ4.4m、最大幅3.3m、端部幅1.1mで、墓道状の平面観を呈している。東肩部から約90cm南に延びた部分で小規模なくびれを持つ。基壇等の施設はない。前庭部の土層観察ではⅠ層が褐色弱粘質土層で崩落土である。Ⅱ層は明褐色砂質土層で崩落土である。Ⅲ層は黒灰色弱粘質土で、追葬時の閉塞埋土である。Ⅳ層は明灰色砂質土層で、同層上面を切りこむ形で追葬が行われている。Ⅴ層は灰色砂質土層で崩落土、Ⅵ層は黒色粘質土で風化を受けている。初葬時の埋土と思われる。土層観察から最低１回の追葬が行われているものと思われる。

羨門部

羨門の立ち上がり部の幅50cm、高さ1.2mでそこから上部は削平されている。閉塞施設は、幅45cm、高さ90cm、厚さ20cmの阿蘇溶結凝灰岩を用いている。また根締め石として凝灰岩の角礫を数個充填している。ただ閉塞石の底面が前庭部床面から10数cm浮いた状態で検出されていることから、追葬時に改めて据えられた可能性が高い。

羨道・玄室

羨道は長さ1.2m、玄門側の幅90cmである。天井部分はすべて削平されているため高さは不明である。玄室は平入り長方形で、奥行き2.2m、奥壁側の幅2.4m、玄門側の幅2.6mである。天井は広範囲に削平、落盤が見られるが、おそらく家型になるものと思われる。現状で高さ1.3mまでは本来の遺構面が残る。床面は奥壁から玄門付近で10cm程度の段が２段設けられている。

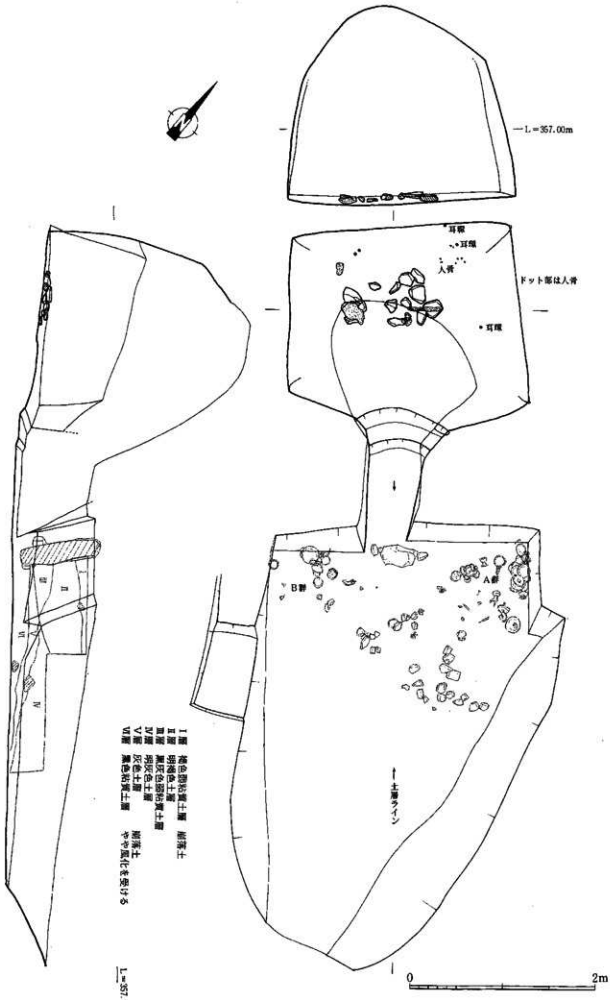
敷石は玄室のほぼ中央部にわずかに確認された。使用された礫は凝灰岩の角礫である。人骨がこの敷石上につぶれた状況で確認されている。排水溝などの施設は設けられていない。玄室の主軸はN－40°－Wである。

遺物の出土状況

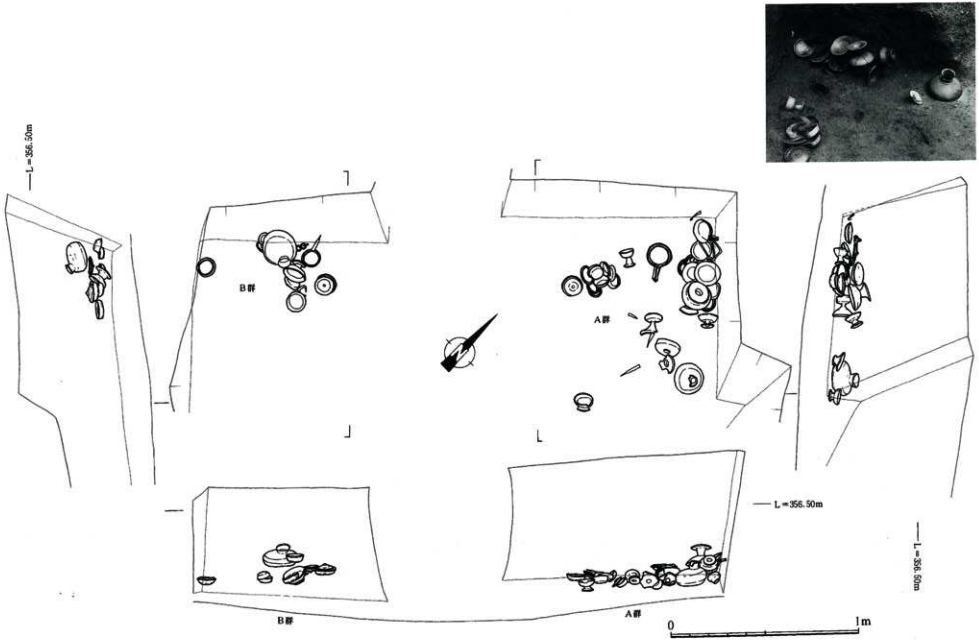
前庭部・羨門部

前庭部及び羨門部で確認された遺物は当時の葬送儀礼に伴う祭祀行為の一端を示すもので、垂直分布状況から、２時期のグループに分類できた。羨門に向かって右側肩部付近にある遺物群をＡ群、左肩部周辺にある遺物群をＢ群とした。Ａ群は床面直上に分布し、Ｂ群は床面から約15cm上にある。これは前庭部の土層観察の結果ともほぼ一致するものでおそらくＡ群が初葬時、Ｂ群が追葬時の祭祀行為によって形成された遺物群と思われる。いずれの遺物群も墓前における祭祀を行った後、一気に片付けられた様相を呈する。ただこの遺物群には玄室内に副葬される例が多い鉄鏃や馬具なども含まれていることは興味深い。

Ａ群は、須恵器の坏蓋12、坏身６、高坏３、甕２、横瓶１、土師器の高坏４、壺１、壺１、鉄鏃10（512～521）、刀子１、馬具７である。Ｂ群は、須恵器の坏蓋３、坏身８、高坏１、横瓶１、土師器の高坏２、鉄鏃１（511）、馬具１である。出土した土器はＡ群、Ｂ群とも概ね６世紀末から７世紀後半代に含まれるが第50図（88）のような坏が含まれていることから若干Ａ群の方が先行するものと思われる。これは前庭部における土層観察の結果とも整合する。ただ、追葬は初葬後あまり時間を経過せず行われた可能性が高い。また鉄鏃はＡ群、Ｂ群ともほとんど形態に差は見られないがＡ群出土で１点だけ鏃の先端が大きく両側に張り出すタイプのものが含まれている。



第48図　15号墓実測図　(1/40)

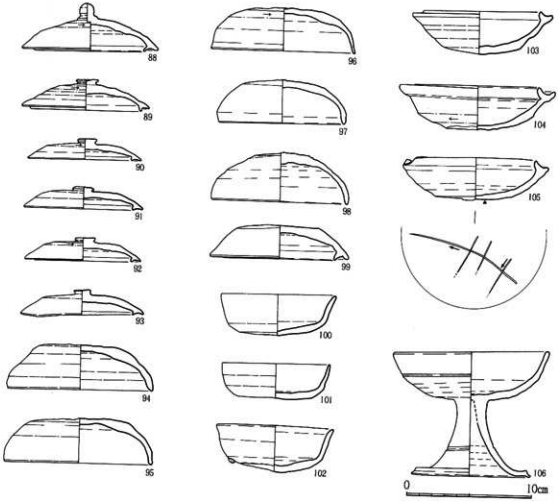


第49図　15号墓前庭部祭祀遺物出土状況　(1/20)

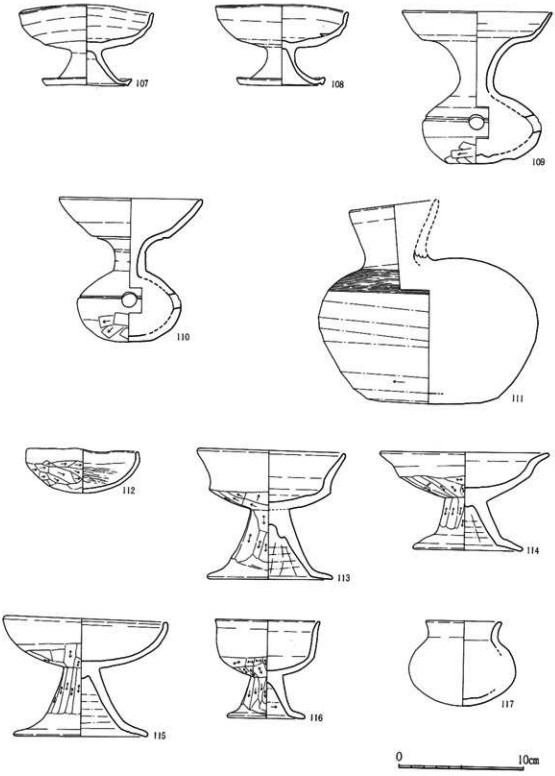
羨道・玄室部

玄室部において人骨周辺で耳環が3点、ガラス玉が1点出土した。耳環は銅地金張が1点、鉄地が2点である。鉄地の耳環は、現状では外面に金ないしは銀を巻いたような痕跡は認められない。

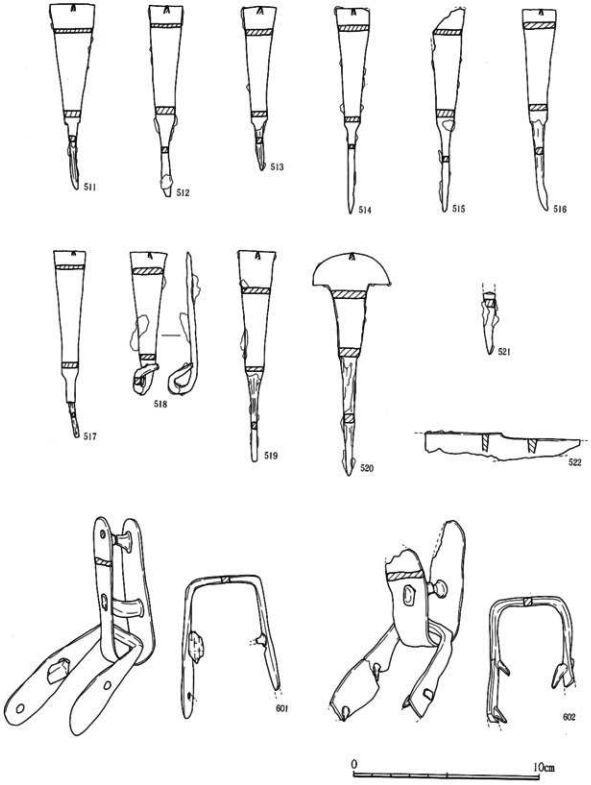
当横穴墓は6世紀後半～7世紀中頃までの遺物を出土している。



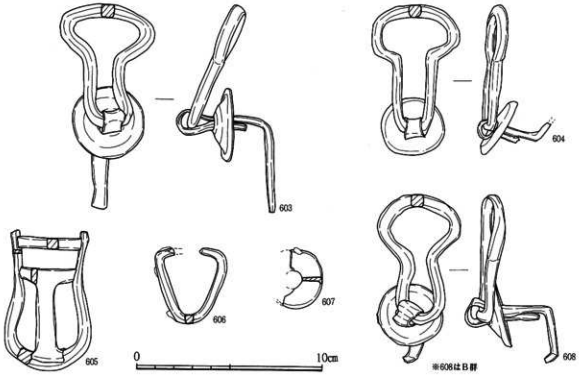
第50図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群1　(1/3)



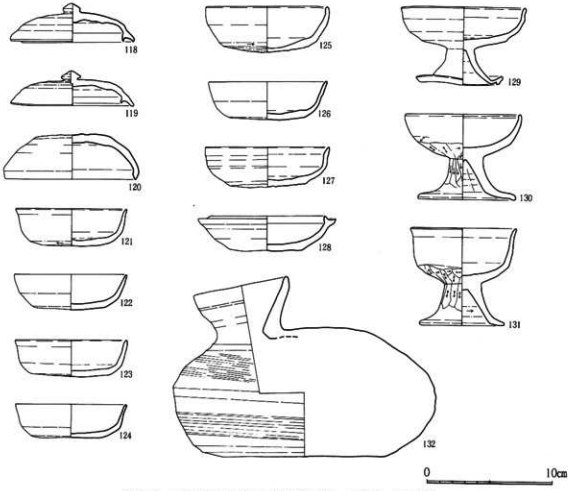
第51図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群2　(1/3)



第52図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群3・B群1　(1/2)
(511はB群出土)



第53図　15号墓前庭部出土遺物実測図　A群4　(1/2)



第54図　15号墓前庭部出土遺物実測図　B群2　(1/3)

0　　2cm

第55図　15号墓玄室内出土遺物実測図　（実大）

第22表　15号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格（ガラス製品：単位mm） 器高	口径	最大径	高台径	胎土	調整 外面	内面	焼成	色調 外面	内面	備考	ヘラ記号
88	テラス	須恵器	平瓶	3.8	8.8	11.1		石英・長石を多く含む	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5Y6/1黄灰色	N4.5/0灰色	全体に重ね焼き跡 平尻状部分は、その部を解体ケガ、その上をヘラケズリしている	
89	テラス	須恵器	平瓶	2.4	8.8	10.4		石英・長石を含む 内面すると白が表面に黒く染み出しているが確認	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5Y5/1黄灰色	2.5Y6/1黄灰色		
90	テラス	須恵器	平瓶	1.65	7.9	9.2		石英・長石を含むが確認	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N3.5/0暗灰色		
91	テラス	須恵器	平瓶	1.7	7.9	9.4		白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色	つまみ青り	
92	テラス	須恵器	平瓶	1.8	7.9	9.4		石英・長石を微量に含むが確認	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5B4/1暗青灰色	N4/0灰色		
93	テラス	須恵器	平瓶	2.0	8.0	10.0		黄白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色	つまみ青り	
94	テラス	須恵器	平瓶	3.5	11.3			黒白色砂粒含む	ヨコナデ・ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB5/1青灰色		
95	テラス	須恵器	平瓶	3.5	11.8			白色砂粒含む	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB5/1青灰色		
96	テラス	須恵器	平瓶	3.4	(11.0)			石英・長石を含む 内面すると白が薄く表面に出ている	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色		
97	テラス	須恵器	平瓶	4	10.95			粗い、石英・長石・角閃石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後しぶ後ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5Y6/1灰色 10Y8/2灰黄褐色	5Y6/1灰色 10Y8/2灰黄褐色		
98	テラス	須恵器	平瓶	3.5	10.1			石英・角閃石・長石を少量含むが確認	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5Y8/4に近い橙色 10Y8/2黄色 5.5Y8/1黄灰色	7.5Y8/3に近い橙色		
99	テラス	須恵器	平瓶	2.7	8.9	11.1		石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし後ナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N4/0灰色	N5/0灰色	外面全体に自然釉	
100	テラス	須恵器	平身	3.2	9.1		5.8	角閃石含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色		
101	テラス	須恵器	平身	2.9	9.0		6.1	白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5Y8/6橙色	5Y8/6橙色		
102	テラス	須恵器	平身	3.7	9.4			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし・一部ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5Y6/1灰色	N5/0灰色	粗の上部の口縁部の端面等に付着	
103	テラス	須恵器	平身	3.4	9.3	11.0		白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラキリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色		
104	テラス	須恵器	平身	3.4	10.1	12.8		石英・長石を少量含	回転ナデ・ヘラ切りはなし・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	2.5Y5/1黄灰色	自然釉がかかっている	
105	テラス	須恵器	平身	3.4	9.7	11.7		石英・長石を含むが確認	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0暗灰色	N4/0灰色	重ね焼きのため腰部に自然釉による変色に付着	有
106	テラス	須恵器	高坏	10	12.5		9.8	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・不定方向ナデ	やや不良	7.5Y7/1灰白色	N5/0灰色		
107	テラス	須恵器	高坏	6.4	10.8		7.0	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N4.5/0灰色	N4.5/0灰色	沈ホ.ぶり有	
108	テラス	須恵器	高坏	6.4	10.5		7.1	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	脚部内面に沈ホ.ぶり有	
109	テラス	須恵器	鉢	12.0	(12.0)	9.4	5.3	粗砂含む	回転ナデ・回転ヘラケズ・手持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/2青灰色	口縁部打ち欠き	

110	テラス	縄文器	鉢	11.3	13.4	8.3		石英・砂粒を含む	回転ナデ・手持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色	
111	テラス	縄文器	鉢底	15.6	6.7		7.7	砂粒・石英を含む	回転ヘラケズリ・タキ目・回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	5PB6/1青灰色 5PB4/1暗青灰色	5PB6/1青灰色 5PB4/1暗青灰色	不明
112	テラス	土師器	甕	3.4	9.1			雲母	回転ナデ・移止ヘラケズリ	回転ナデ・ヘラミガキ	良好	2.5YR7/6橙色	2.5YR6/3にぶい橙色	
113	テラス	土師器	高坏	10.3	11.7		10.1	雲母細粒を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ後ミガキ	回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	10YR8/4浅黄橙色 2.5YR7/4にぶい黄橙色 5YR7/6橙色	10YR8/4浅黄橙色 10YR7/4にぶい黄橙色 5YR7/6橙色	しまり良有
114	テラス	土師器	高坏	7.8	13.5		9.9	雲母細粒を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ後ミガキ	回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色	しまり良有
115	テラス	土師器	高坏	9.5	12.8		10.9	石英・雲母細粒を少量含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラケズリ後ミガキ	良好	10YR7/4にぶい黄橙色 5YR7/6橙色	10YR7/4にぶい黄橙色 5YR7/6橙色 5YR6/6橙色	しまり良有
116	テラス	土師器	高坏	7.8	8.3		6.3	石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	良好	7.5YR7/6橙色 2.5YR7/6橙色 2.5YR6/6橙色	2.5YR7/6橙色 2.5YR6/6橙色	しまり良有
117	テラス	土師器	壺	6.8	6	8.5		石英・角閃石を多く含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラケズリ後手定方向ナデ	良好	5YR7/4にぶい橙色	5YR7/4にぶい橙色	焼成かゆみて全面ヘラミガキの痕跡有者ヒハケ工具痕有
118	テラス	縄文器	甕底	3.0	8.1	9.9		精緻	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB4/1暗青灰色	つまみ有
119	テラス	縄文器	甕底	2.8	7.8	10.0		石英・長石を少量含むが精緻	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5GY6/1オリーブ灰色	N5.5/0灰色	指定用つまみ
120	テラス	縄文器	甕底	3.5	10.3			精緻	ヨコナデ・ヘラキリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB5/1青灰色	
121	テラス	縄文器	甕底	2.9	9			石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・横ヒ回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5/6灰色	N6/0灰色	
122	テラス	縄文器	甕底	2.7	8.9		5.5	白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラキリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色	
123	テラス	縄文器	甕底	2.9	9		6.2	石英・長石を少量含むが精緻	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	N4.5/0灰色	N5.5/0灰色	
124	テラス	縄文器	甕底	2.5	8.7		6.0	白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5PB4/1暗青灰色	5PB4/1暗青灰色	
125	テラス	縄文器	甕底	3.7	9.9		7.8	石英・長石を含む	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色 10YR6/1黒灰色	5Y3/1オリーブ黒色	
126	テラス	縄文器	甕底	3.0	8.4		6.0	白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラケズリ	ヨコナデ	良好	5YR6/6橙色	2YR6/6橙色	
127	テラス	縄文器	甕底	3.23	10		6.1	石英・長石を含むが精緻	回転ナデ・ヘラ状ヒ痕ヒ痕ナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	10YR5/1灰色	N5/0灰色	
128	テラス	縄文器	甕底	2.7	8.1	11.0		白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラキリ	ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	
129	テラス	縄文器	高坏	6.05	10		7.1	石英・長石を含むが精緻	回転ナデ	回転ナデ	良好	5PB5/1青灰色	N5/0灰色	
130	テラス	土師器	高坏	6.7	9.2		8.0	微細粒を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色	しまり良有
131	テラス	土師器	高坏	7.7	(8.5)		6.9	微細粒を含むが精緻	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	良好	2.5YR7/6橙色 2.5YR6/6橙色	2.5YR7/6橙色 2.5YR6/6橙色	しまり良有
132	テラス	縄文器	鉢底	14.2	7.8		13.0	砂粒・石英を含む	回転ヘラケズリ・タキ目・回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	N6/0灰色	不明	自然釉有り

第23表　15号墓出土鉄器計測表　(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
511	テラス	鉄鏃	9.9	6.2	2.4	0.4	0.2	圭頭斧箭式　木質
512	テラス	鉄鏃	10.1	6.0	1.8	0.4	0.3	圭頭斧箭式　木質
513	テラス	鉄鏃	8.7	6.1	1.7	0.4	0.3	圭頭斧箭式　木質
514	テラス	鉄鏃	10.9	6.2	1.8	0.4	0.3	圭頭斧箭式　木質
515	テラス	鉄鏃	10.7+α	5.9+α	不明	0.4	0.3	圭頭斧箭式　茎が曲がる
516	テラス	鉄鏃	10.0	6.4	1.9	0.4	0.4	斧箭式　茎が曲がる
517	テラス	鉄鏃	11.1	6.4	1.9	0.4	0.3	斧箭式　木質
518	テラス	鉄鏃	11.8	5.5	4.1	0.6	0.4	斧箭式　木質
519	テラス	鉄鏃	10.6	5.9	1.8	0.5	0.4	斧箭式　木質
520	テラス	鉄鏃	9.8	6.6	1.7	0.2	0.2	斧箭式　木質
521	テラス	鉄鏃	不明	不明	不明	0.5	不明	茎のみ
522	テラス	刀子	不明	不明	不明	不明	不明	
601	テラス	馬具	—	—	—	—	—	鐙金具　木質
602	テラス	馬具	—	—	—	—	—	鐙金具　木質
603	テラス	馬具	—	—	—	—	—	しおで
604	テラス	馬具	—	—	—	—	—	しおで　円環のみ
605	テラス	馬具	—	—	—	—	—	鈴具
606	テラス	馬具	—	—	—	—	—	しおで？　クリップのみ
607	テラス	馬具	—	—	—	—	—	しおで
608	テラス	馬具	—	—	—	—	—	しおで

第24表　15号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
404	玄室	銅地金張	1.9×1.7	0.7×0.4	7.3	遺存状態良好
405	玄室	鉄地	1.9×1.8	0.4×0.3	2.5	全体にさびが回る
406	玄室	鉄地	1.8×1.7	0.4×0.3	2.9	全体にさびが回る

第25表　15号墓出土玉類計測表

整理番号	種類	材質	色調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
706	玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.3×0.2	0.2	

16・17号墓（第56図）

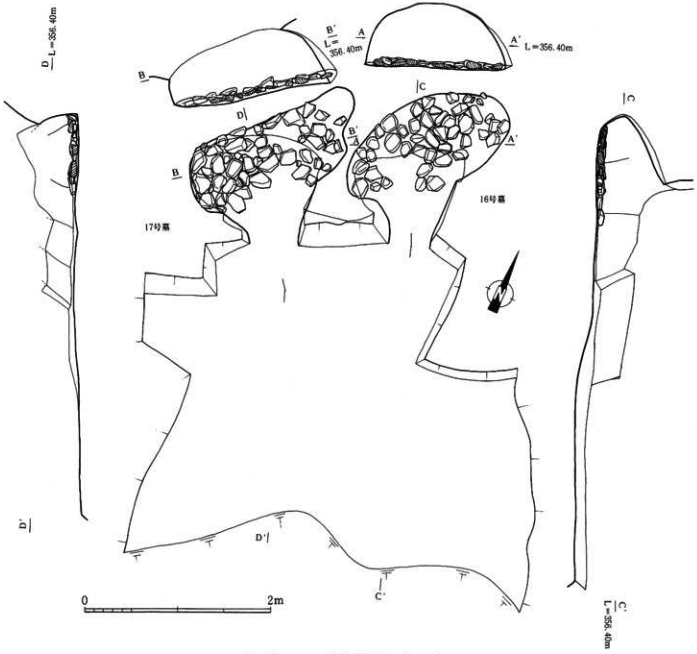
概要

15号墓の西２ｍ、標高356m付近に位置する。２基の横穴墓はテラスと前庭部を共有する形で造られている。横穴墓の立地から２基の横穴墓がこの５群中最終時期に構築されたものと思われる。前庭部には埋土等がほとんど確認できず、土層観察が行えなかったため２基の横穴墓間における前後関係はつかめなかった。ただ、17号墓と18号墓の間隔、16号墓と15号墓の間隔から17号墓が最初に構築されたと考える。玄室形態などは２基の横穴墓は非常に類似している。

規模・構造

前庭部・羨門部

前庭部は西側の長さが40cm、東側の長さが1.1m、幅は2.5mと小規模である。羨門部は天井部が削平されているため立ち上がり部分の幅が確認できるだけである。基壇や閉塞石等の施設は残っていない。



第56図　16・17号墓実測図　（1/40）

羨道・玄室部

2基とも天井部が崩落しているため、長さと玄門幅しか計測できなかった。16号墓の羨道の長さは40cm、玄門幅1m、17号墓の羨道の長さは35cm、玄門幅90cmである。玄室はいずれの横穴墓も不整形な平面形を持ち、主軸方向もほぼN－40°－Wをさす。規模は16号墓が奥行き90cm、幅1.85m、高さ40cm、17号墓が奥行き1m、幅1.7m、高さ40cmである。なお両横穴墓とも敷石は比較的良く残っているものの全面には及んでいない。天井部は削平を受けているがドーム型の天井と思われる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

18号墓（第57図）

概要

17号墓の西約3m、標高355.8m付近に位置する。羨門～羨道にかけて一部削平を受けていたが、その他は比較的残りは良好であった。前庭部には18個体分の遺物が散在していた。また、前庭部には埋土が比較的良好に残っていたため、土層観察を行った。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ2.7m、羨門付近の幅2m、端部付近の幅が2.7mである。羨門部から約70cmで15cm程度の段差が造られている。東側の壁は2ヵ所にくびれを持つ。また西壁に取り付くように長さ40cm、幅80cmのフラットな段を削り出して基壇状の施設を設けている。

前庭部の埋土の堆積状況は、Ⅰ層は褐色弱粘質土層で崩落土である。Ⅱ層は灰褐色砂質土層で崩落土。Ⅲ層は黒灰色砂質土層で、かなり風化を受けている。追葬後に堆積した層である。Ⅳ層は灰色砂質土層で、砂粒を多く含む。Ⅴ層は黒褐色粘質土層で、風化を受けている。この層の上面が追葬面の可能性がある。Ⅵ層は明灰褐色弱粘質土層で、上面がわずかに風化を受ける。初葬時の埋土である。これから2回の追葬が行われている可能性がある。

羨門部

羨門は上部が削平されているため立ち上がり部の幅が確認されたのみである。立ち上がり部の幅は約50cmである。閉塞石は取り払われていたが、閉塞石を据えたと思われる浅い掘りこみが確認された。

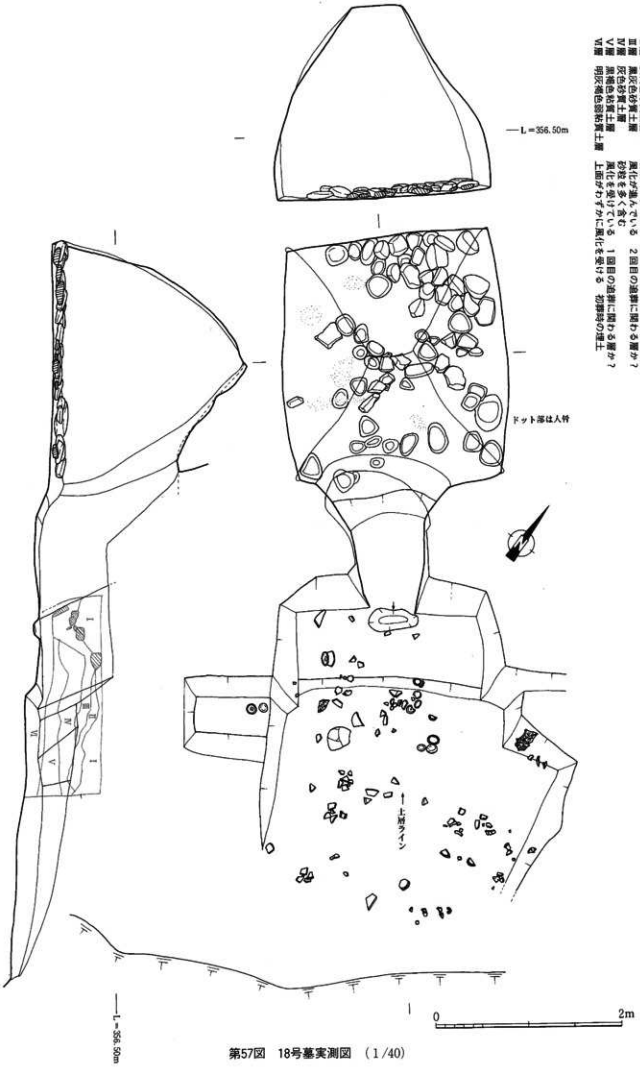
羨道・玄室部

羨道は天井部の大半が崩落しているため、一部計測不能な部分もある。長さは1.2m、玄門部幅が1.45m、高さが1.35mである。玄室は妻入り長方形で、天井部は四柱寄棟型である。玄門はやや西壁側に取り付き、玄門付近で15cm程度の段差を持つ。玄室の規模は奥行き2.7m、幅2.2m、最大高2mである。床面には主に東半部に安山岩の円礫と一部凝灰岩の角礫が混じりながら敷石が広がる。人骨片が一部に残る。玄室の主軸方向はN－36°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部

前庭部において坏蓋5点、坏身4点、坩1点、甕の破片1個体分、土師器高坏2点、埦1点が散乱して出土し、羨門付近において長頸壺が1点出土している。坏については中央付近にやや集中して出土する傾向が見られる。また西側に取り付く基壇状の張り出し部においても坏が出土している。ただし甕については主に東側壁周辺で崩落土中から出土したことから、この横穴墓の上段に展開する横穴墓から転落してきた可能性もある。また坏蓋（136）は玄室内で出土した破片と接合することから追葬時に前庭部に掻き出された可能性もある。

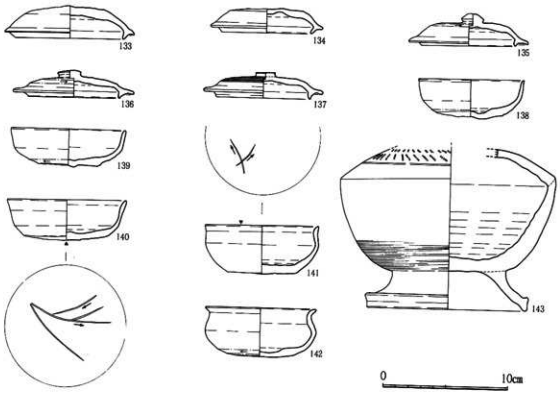


第57図　18号墓実測図　(1/40)

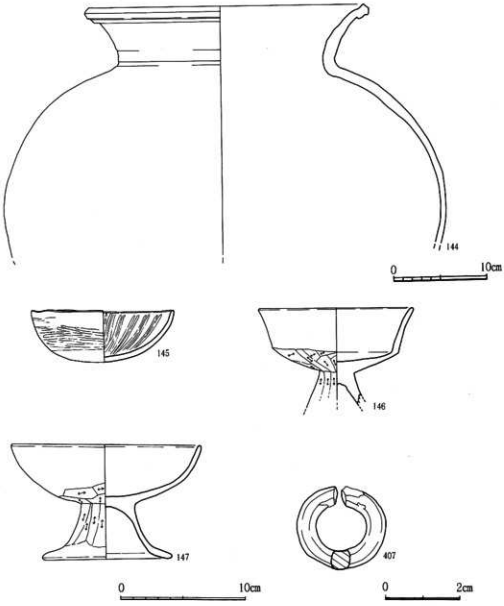
出土遺物は概ね７世紀中頃に比定されるが、遺物の出土状態から初葬時及び追葬時の遺物の抽出は出来なかった。仮に初葬及び追葬の遺物が混在しているとしても、短期間に追葬が行われたものと思われる。

羨道・玄室部

玄室内からは耳環が１点と土器片が数点出土した。耳環は金環である。土器片は１点前庭部出土の土器片と接合するものがある。



第58図　18号墓出土遺物実測図１　（1/3）



第59図　18号墓出土遺物実測図２　（1/3・1/4・実大）

第26表　18号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	残存率 (%)・口径・底径・最大径・器高 (cm) 器高	口径	底径	最大径	器高	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ハケ記号
133	テラス	弥生器	甕	2.6	8.7	10.6			石英・長石を含むが極微	回転ナデ・ヘラ切り後しぼナデ	回転ナデ	良好	5YR4/1灰色	5Y5/1灰色		
134	テラス	弥生器	甕	2.0	7.2	9.1			石英・長石を含むが極微	回転ナデ・ヘラ切り後しぼナデ	回転ナデ	良好	N6/0灰色	7.5YR5/1褐灰色	口縁部に重ね焼き痕有	
135	テラス	弥生器	甕	2.55	7.6	9.6			石英・長石を少量含むが極微	回転ナデ・透絞回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB5/1青灰色	N5/0灰色	口縁部に重ね焼き痕有	
136	テラス 玄室	弥生器	甕	2.1	7.25	9.4			石英・長石を含むが微細　黒色の鉱物粒子が内面に付着している	回転ナデ・透絞回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	N5/0灰色	7.5Y5.5/1灰色	外面に自然釉	
137	テラス	弥生器	甕	2.0	7.6				石英・長石を含むが微細　黒色の鉱物粒子が内面に付着している	回転ナデ・透絞回転ヘラケズリ後水平ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5/1褐灰色	2.5YR5/1赤灰色		
138	テラス	弥生器	甕身	3.1	8.5			5.2	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後しぼナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5YR5/3灰褐色 10YR4.5/1褐灰色	2.5YR5/1黄灰色		
139	テラス	弥生器	甕身	3.05	9.28			4.9	石英・長石を少量含むが微細　口縁部下方が膨出しており、丸く掘り出している	回転ナデ・ヘラ切り後しぼナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	N5/0灰色	5PB5/1青灰色		
140	テラス	弥生器	甕身	3.2	9.5			6.8	石英・長石を多く含む	回転ナデ・ヘラ切り後し	回転ナデ	良好	5B5/1青灰色	5B5/1青灰色		有
141	テラス	弥生器	甕身	3.8	9.1			5.6	石英・長石を含むが極微	回転ナデ・ヘラ切り後し	回転ナデ	良好	2.5YR5/4にぶい赤褐色	2.5YR5/3にぶい赤褐色	凸状突部直上の可能性大	有
142	テラス	弥生器	甕	3.85	8.9				雲母	回転ナデ・透絞回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/2灰黄色		
143	テラス	弥生器	長頸壺	12.8 以上		17.2			石英・長石を含む	回転ナデ・かき目・ヘラ状工具で絞転ナデ	回転ナデ	良好	5Y7/1灰白色		同点紋	
144	テラス	弥生器	壺		30.3	47.3			石英	平行タタキ・ヨコナデ・同心円ナデ	回転ヨコナデ・同心円ナデ	良好	暗青灰色	暗青灰色		
145	テラス	土師器	椀	4.2	11.4				精微　わずかに石英・長石・金雲母の粒子を含む	回転ナデ・ヘラ切り後しぼナデ・回転ナデ後横ケズリ	回転ナデ後ナデ方向のヘラミガキ	良好	2.5YR6.5/6橙色	2.5YR7/6橙色		
146	テラス	土師器	高坏	7.8 以上	12.3				3～5mm大の石英を含むが微細	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ後ミガキ	回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR6/6橙色 7.5YR7/6橙色	5YR6/6橙色 7.5YR7/6橙色	杯部のみ　しぼり痕有	
147	テラス	土師器	高坏	9.2	15			10.4	微細粒を含むが極微	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色 10YR8/4浅黄橙色 10YR7/2にぶい黄橙色	5YR7/6橙色 10YR8/4浅黄橙色 10YR7/2にぶい黄橙色	脚部内＋有	

第27表　18号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
407	玄室	銅地金張	2.2×1.9	0.6×0.4	13.6	遺存状態良好

19号墓（第60図）

概要

18号墓の西約２ｍ、標高約356ｍに位置する。前庭部の残りは比較的良好だが、羨道から玄室にかけて大きく削平されている。特に玄室は大きく開口し崩落土の混入が著しかった。これに対して前庭部は埋土も比較的良好に残っていたため土層観察を行なった。また遺物も比較的多く出土し、祭祀行為の痕跡も認められた。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ3.2ｍ、幅3.7ｍで、羨門から約70㎝下ったところで約20㎝の段差を持つ。西肩部から1.5ｍ南に行ったところでくびれを持つ。また東肩部から1.2ｍ南で１ヵ所、さらに80㎝南に下った部分にもう１ヵ所くびれを持つ。最初のくびれ部の上部に南北40㎝、東西１ｍのフラットな面を削り出し、基壇状の施設としている。土層観察ではⅠ層が黒褐色砂質土で崩落土。Ⅱ層が明灰褐色砂質土で崩落土。Ⅲ層が黒褐色弱粘質土で風化を受けていて初葬時の埋土。また、羨門付近でⅡ層が切りこむ部分が見られることからこの上面が追葬面と想定される。

羨門部

削平を受けているため立ち上がり部分の幅が計測できるのみである。幅は50㎝で閉塞石が残る。閉塞石に用いられたのは70×60㎝、厚さ15㎝の扁平な安山岩である。なお閉塞石は前庭部側に倒れた状態で検出された。

羨道・玄室部

羨道部は長さ1.3ｍ、玄門側の幅が１ｍ、高さは不明である。玄室は隅丸方形でやや西寄りに羨道が取り付く。玄室の規模は奥行き1.8ｍ、幅2.1ｍで床面には敷石が良く残っている。用いられた石材は凝灰岩の角礫で、人骨の細片がわずかに残っていた。また床面は奥壁から玄門まではほぼフラットで羨道との境に約20㎝の段落ちがある。天井形態は不明である。なお玄室の主軸はＮ－14°－Ｗである。

遺物の出土状況

前庭部

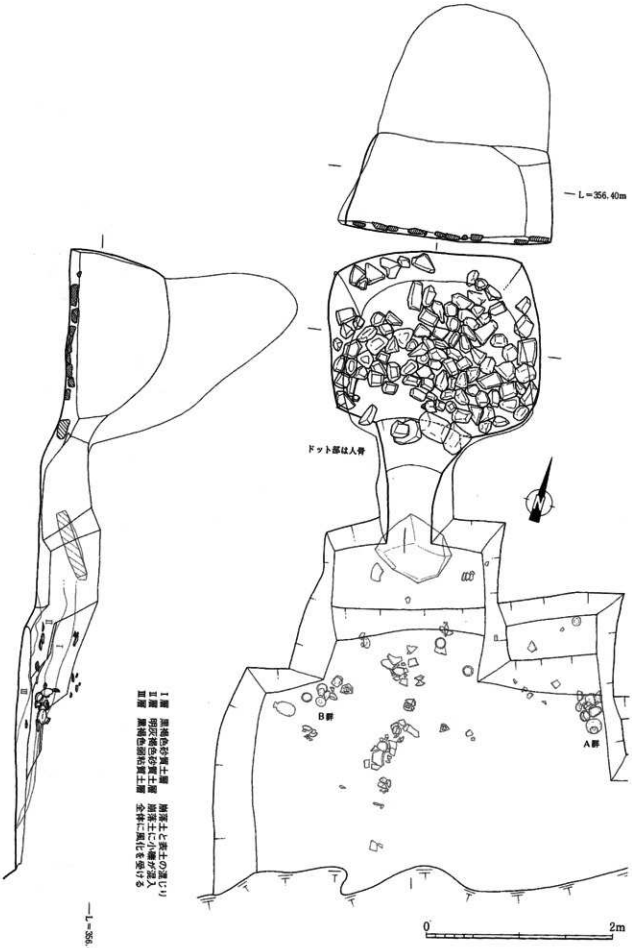
前庭部から出土した遺物は東側の２段目くびれ部付近床面直上において壁に張り付くように１群（坏蓋４点、坏身１点、高坏１点、横瓶２点）、西側くびれ部付近に床面から約20㎝上面で１群（坏蓋１点、坏身２点、高坏２点、甕１点、提瓶１点）が確認された。さらに、中央部付近において遺物が10数点出土した。中央付近の遺物については、崩落土中から出土したものも多く、上段に広がる横穴墓の遺物の可能性もある。しかし、前述の２群については明らかにこの横穴墓において行われた葬送儀礼に伴う遺物である。東の１群をＡ群、西のそれをＢ群とした。遺物の出土状況からＡ群は初葬時に、Ｂ群は追葬時にそれぞれ伴う遺物であると思われる。

Ａ群の出土遺物のうち148と149がセットの状況で出土している。Ｂ群では156と157がセットで出土している。Ａ群とＢ群に大きな時間差は認められず、概ね７世紀初頭から後半代に比定される。

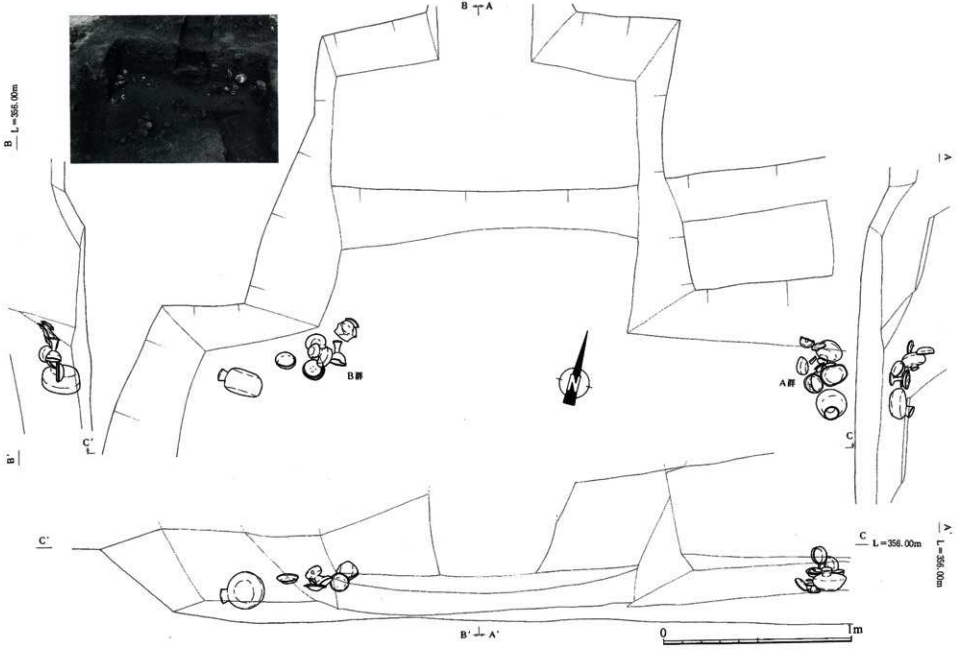
中央部付近から出土した遺物については、７世紀末まで下るものもある。

羨道・玄室部

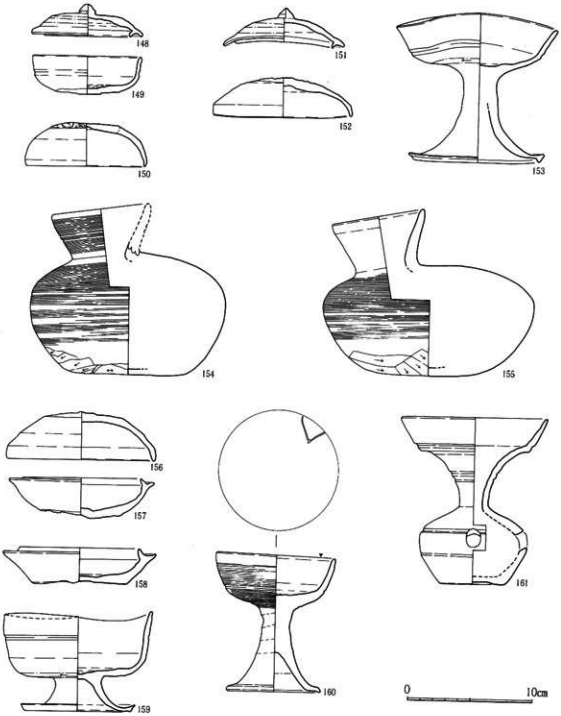
玄室内からは耳環が２点、刀子が１点出土した。耳環については金環と銀環が１点ずつ出土した。また刀子は若干木質が残るものである。



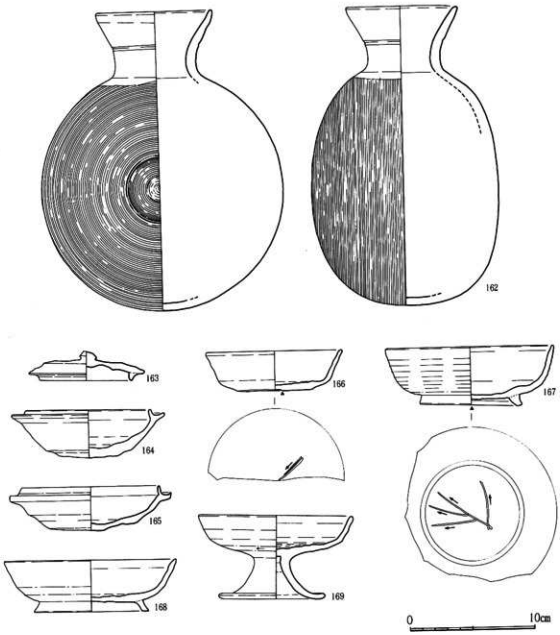
第60図　19号墓実測図　(1/40)



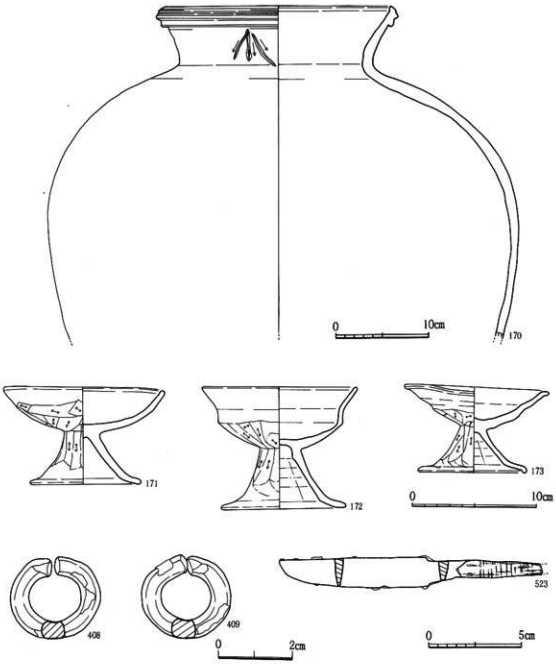
第61図　19号墓前庭部祭祀遺物出土状況　(1/20)



第62図　19号墓出土遺物実測図　A・B群　(1/3)



第63図　19号墓出土遺物実測図　B群・テラス（1/3）



第64図　19号墓出土遺物実測図　テラス・玄室　(1/4・1/3・1/2・実大)

第28表　19号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	器種	胎土	焼成	残存状態	底径(cm)	胎土	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
				程度	口径	最大径	器高						
148	18号テラス	横瓶器	坏蓋	2.65	6.85	9.0		石英・長石を含むが細密。内面まる石が高く張り付けている	回転ケナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ケナデ・一定方向ナデ	良好	10YR5/3灰色	7.5YR5/1	外周灰かぶり
149	18号テラス	横瓶器	坏身	3.1	8.75		5.1	石英・長石を含むが密。内面まる石が高く張り付けている	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し調ナデ	回転ナデ	良好	N6/0灰色　N4/0灰色	N5/0灰色	
150	18号テラス	横瓶器	坏蓋	3.4	9.4			石英・長石を含むが細密	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し調整・ヘラケズリ	回転ナデ	良好	10BG6/1灰青色	10BG5/1青色	内面全面のものが可能性がある い　内外面に炭かぶりあり
151	18号テラス	横瓶器	坏蓋	3.1	7.1	(8.0)		石英・長石を含む	回転ケナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	7.5YR5/1灰色	5B5/1青灰色	
152	18号テラス	横瓶器	坏蓋	3.2	11.2			石英・長石を少量含むが細密	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し	回転ナデ	良好	N6/0灰色	N5/0灰色	
153	18号テラス	横瓶器	高坏	11.8	12.8		11.0	石英・長石を含む	回転ケナデ・縦横ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5/1灰色　7.5YR4/2灰黄色　7.5YR5/1黄褐色	7.5YR5/1灰色　7.5YR4/2灰黄色　2.5YR4/6赤にぶい褐色	口縁部に重ね焼き痕有
154	19号テラス	横瓶器	横瓶	13.2	7.6		6.6	細密・石英を含む	回転ケナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ・回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	良好	5PB6/1青灰色	不明	
155	19号テラス	横瓶器	横瓶	13.5	6.1		7.7	石英含む	回転ケナデ・ヨコナデ・平坦もヘラケズリ・回転ヘラ切り	回転ナデ	良好	5PB6/1暗青灰色	不明	
156	19号テラス	横瓶器	坏蓋	3.8	11.7			石英・長石を含む。黒色の金色雲母が内面に付着している	回転ケナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良好	N5/0灰色	2.5YR5/6赤にぶい黄色	
157	19号テラス	横瓶器	坏身	3.15	9.6	11.8	6.65	石英・長石を少量含む	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5.5/0灰色	5PB6/1青灰色	口縁部に重ね焼き痕有　胎土混り有
158	19号テラス	横瓶器	坏身	3.5	10.9	12.6	7.1	細密	回転ケナデ・ヘラ切り	回転ナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB6/1暗青灰色	自然釉有り
159	19号テラス	横瓶器	坏蓋	7.98	11.65		8.2	石英・長石を含むが細密	回転ケナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ケナデ・不定方向ナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB6/1青灰色	
160	19号テラス	横瓶器	高坏	11	9.5		7.7	石英・長石を含む	回転ケナデ・カキ目	回転ケナデ・不定方向ナデ・回転ヘラケズリ	暗赤	2.5YR6/4にぶい黄色	10R5/6赤褐色	しぼり痕有	有
161	19号テラス	横瓶器	鼎	13.0	11.6	8.6	4.9	石英含む	回転ケナデ・縦横ヘラケズリ	回転ナデ	良好	N7/1灰白色	N7/1灰白色	口縁部打ち欠き	
162	19号テラス	横瓶器	横瓶	23.7	9.4	19.3		石英・長石を含むが細密	カキ目・縦横ナデ	縦横ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色		
163	19号テラス	横瓶器	坏蓋	2.3	7.5	9.3		白色砂粒含む	回転ケナデ・縦横ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB6/1暗青灰色	5PB6/1暗青灰色	つまみ有り	
164	19号テラス	横瓶器	坏身	3.8	(9.5)	12.2	(6.8)	石英・長石を細密に含むが細密	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し	回転ナデ・一定方向ナデ	暗黄	N5/0灰色	N5/0灰色		
165	19号テラス	横瓶器	坏身	2.5	9.9	11.9		白色砂粒含む	ヨコナデ・回転ヘラ切り	ヨコナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB6/1青灰色		
166	19号テラス	横瓶器	坏身	3.1	11.0		6.0	3mm大の石英を含む	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	SY6/1灰色	SY5/1灰色		有
167	19号テラス	横瓶器	坏身	4.75	13.5		8.3	石英・長石を含むが細密	回転ケナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR5/6赤にぶい褐色	10YR5/1灰色		有
168	19号テラス	横瓶器	坏身	(6.1)	(13.8)		9.2	石英・長石を含む細密	回転ケナデ・ヘラ切り・縦し	回転ケナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色	表面部に自然釉	
169	19号テラス	横瓶器	高坏	6.68	12.4		8.6	石英・長石を含むが細密	回転ケナデ・連続回転ヘラケズリ	回転ケナデ	良好	N5.5/0灰色	5PB6/1青灰色　7.5YR5/1灰色	自然釉がかかっている	
170	19号テラス	横瓶器	瓶		25.8	50.2		石英・黒色鉄片	平行タタキ・カキ目・縦横ヘラケズリ	回転ヨコナデ・縦位ヘラケズリ	良好	灰青灰色	灰青灰色		有
171	19号テラス	土師器	高坏	7.7	12.8		9.1	石英・雲母を含むが細密	回転ケナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ　上部ヨコ方向ヘラケズリ	回転ケナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	2.5YR3/6暗色	SYR7/6暗色	しぼり痕有	
172	19号テラス	土師器	高坏	9.6	13.3		10.1	石英・雲母粒を少量含むが細密	回転ケナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ　上部ヨコ方向ヘラケズリ	回転ケナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	7.5YR7/6暗色	7.5YR7/6暗色	しぼり痕有	
173	19号テラス	土師器	高坏	6.9	11.8		8.6	細密粒を含むが特徴	回転ケナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ　上部ヨコ方向ヘラケズリ後ミガキ	回転ケナデ・工具ナデ・ヘラケズリ	良好	SYR7/4にぶい褐色　SYR6/3灰褐色	SYR7/4にぶい褐色　SYR6/3灰褐色	しぼり痕有	

第29表　19号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
408	玄室	銅地金張	2.4×2.2	0.7×0.5	12.8	1/2剥落
409	玄室	銅地銀張	2.4×2.1	0.7×0.5	12.8	内側に銀が残る

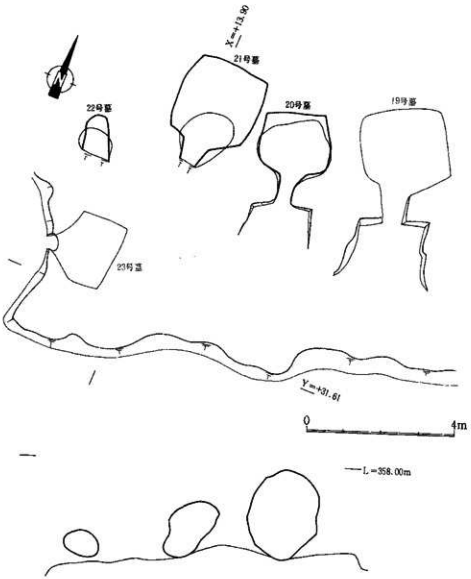
第30表　19号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
523	玄室	刀子	14.0+α	—	1.6	0.9	0.4	木質

6群（第65図）

6群は5群の西、標高356m付近にある。構成する横穴墓は3基（20～22号墓）である。20号墓は前庭部が確認されたものの削平が著しく、深さ10cm程度しか残っていない。また、21・22号墓については前庭部が消失している。さらに羨道～玄室部については20号・22号墓は大部分が削平されている。21号墓についてはやや削平を受けているものの、ほぼ原状を残している。



第65図　6群遺構配置図及び立面図　（1/100）

20号墓（第66図）

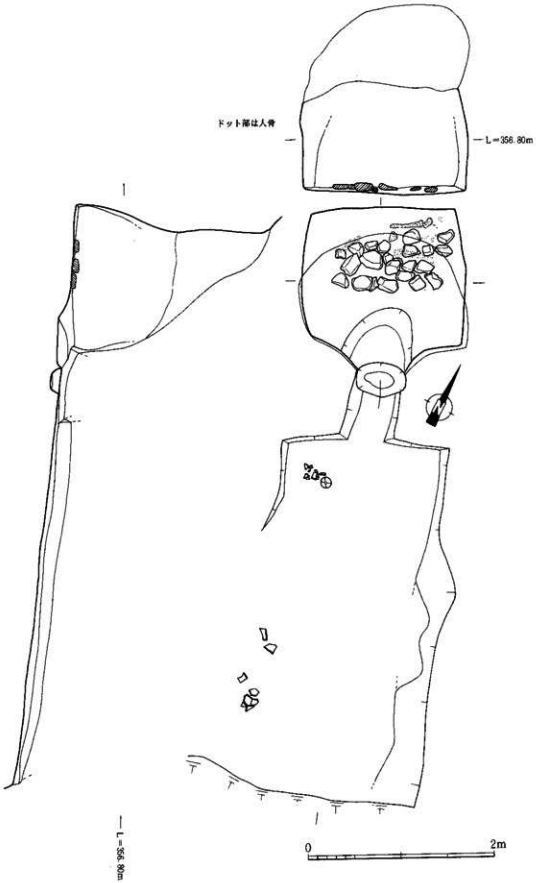
概要

5群19号墓の西約3m、標高356m付近に位置する。前庭部～玄室部にかけて削平を受けていて、遺構の残りはあまり良好ではない。前庭部における土層観察も行えなかった。

規模・構造

前庭部・羨門部

前庭部の長さは1m、幅1.6mで基壇等の施設はない。羨門は立ち上がり部の幅40cmを計測するにとどまった。なお閉塞石等は残っていない。



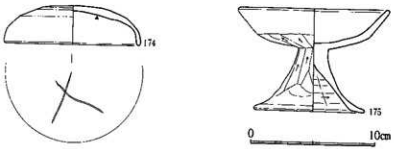
第66図　20号墓実測図　(1/40)

羨道・玄室部

羨道の長さ80cm、玄門部幅50cmで高さは不明である。玄門付近には長軸50cm、短軸40cm、深さ10cmの掘りこみがある。玄室は方形で奥行き1.6m、幅1.7mである。奥壁寄りに敷石が見られ人骨の細片が確認された。床面は奥壁から玄門に約1.1mのところで15cm程度の段差を持ち、羨道へ至る。天井形態は崩落が著しく不明である。なお主軸方向はN－27°－Wである。

遺物の出土状況

羨門西肩部において、坏蓋1点と土師器の高坏1点が出土した。6世紀末に比定できるものと思われる。



第67図　20号墓出土遺物実測図　(1/3)

第31表　20号墓出土土器観察表

番号	器種・遺構	種別	器種	規格(cm)(※は復元値・基準値) 標高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
174	ナラス	須恵器	坏蓋	3.1	(10.2)			石英・長石を含むが緻密	回転ナデ・端部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色		有
175	ナラス	土師器	高坏	8.2	13.1		9.0	石英・長石を少量含むが緻密	回転ナデ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/4にぶい橙色 5YR7/6橙色	5YR7/4にぶい橙色 5YR7/6橙色	しぼり痕有	

21号墓（第68図）

概要

21号墓は20号墓の西約2m、標高356m付近に位置する。前庭部～羨道の一部はすでに削平され、消失している。

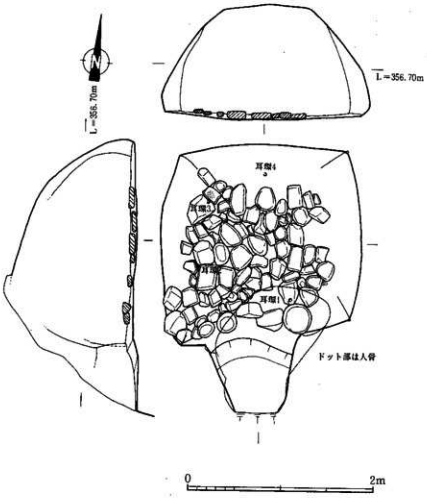
規模・構造

羨道・玄室部

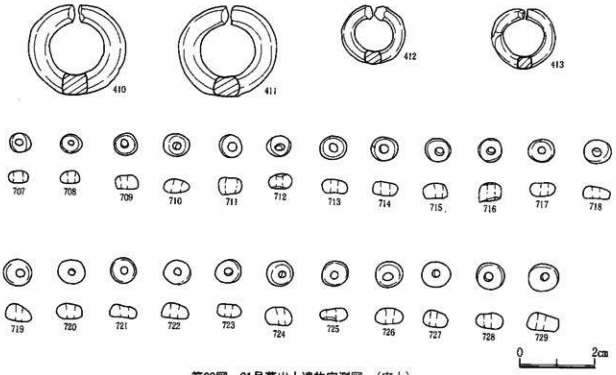
羨道は約70cm残っていて、玄門部の幅は95cmである。高さは不明である。玄室は方形で、奥行き2m、奥壁側の幅1.8m、中央部幅2.2m、玄門側の幅2mで若干開張り気味である。敷石は中央付近に集中して確認され、奥壁及び両側壁際には全く見られない。わずかに人骨片が認められた。床面はほぼフラットで、玄門付近で羨道側に10cm程度の段差を持つ。主軸方向はN－6°－Wである。

遺物の出土状況

玄室内から耳環4点、ガラス小玉23点が出土した。



第68図　21号墓実測図　(1/40)



第69図　21号墓出土遺物実測図　(実大)

第32表　21号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作　り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備　　考
410	玄室	銅地金張	2.6×2.4	0.8×0.6	18.1	遺存状態良好
411	玄室	銅地金張	2.6×2.4	0.8×0.6	18.5	遺存状態良好
412	玄室	銅地金張	1.7×1.5	0.4×0.3	3.3	遺存状態良好
413	玄室	銅地金張	1.7×1.6	0.5×0.3	4.1	約1/5金が残る

第33表　21号墓出土玉類計測表

整理番号	種類	材質	色　調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　　考
707	小玉	ガラス	青	0.5×0.5	0.2×0.2	0.2	
708	小玉	ガラス	うすい青	0.6×0.5	0.1×0.1	0.2	
709	小玉	ガラス	青	0.6×0.6	0.2×0.2	0.2	
710	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
711	小玉	ガラス	青	0.6×0.6	0.2×0.2	0.2	
712	小玉	ガラス	青	0.6×0.6	0.2×0.2	0.2	
713	小玉	ガラス	うすい青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
714	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
715	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
716	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
717	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
718	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.2	
719	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.3	
720	小玉	ガラス	青	0.7×0.6	0.2×0.2	0.3	
721	小玉	ガラス	青	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	
722	小玉	ガラス	青	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	
723	小玉	ガラス	青	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	
724	小玉	ガラス	青	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	
725	小玉	ガラス	うすい青	0.8×0.7	0.2×0.2	0.3	
726	小玉	ガラス	青	0.8×0.7	0.2×0.2	0.3	
727	小玉	ガラス	青	0.8×0.7	0.2×0.2	0.3	
728	小玉	ガラス	濃い青	0.8×0.7	0.2×0.2	0.3	
729	小玉	ガラス	青	0.8×0.7	0.2×0.2	0.3	

22号墓（第70図）

概要

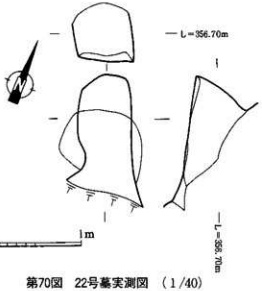
21号墓の西2.5m、標高356.5m付近に位置する。非常に小型の玄室で、前庭部～羨道は消失している。

規模・構造

確認された玄室は、小型の長方形の平面形を持つ。長さは1.2m、幅は55cmで、現存する部分の最大高が55cmである。主軸はN－25°－Wである。

遺物の出土状況

遺物は出土しなかった。

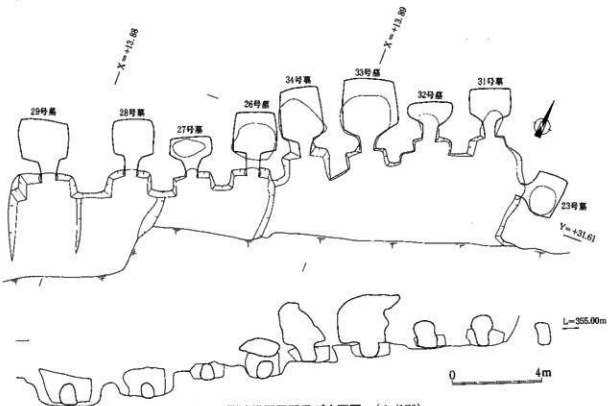


第70図　22号墓実測図　（1/40）

7群（第71図）

7群は6群の西隣、標高353～355m付近に位置する。東西約23mのテラスに横穴墓が9基造られ（東から23号墓、31～34号墓、26～29号墓）、当横穴墓群中では最大規模である。遺構の分布状況から9基の横穴墓のうち23・31～34号墓、26～29号墓はさらに小グループに細分できる。ただし各横穴墓間の新旧関係は不明である。

遺構の残りは一部羨道～玄室にかけて崩落している横穴墓もあるが、全体的にはほぼ良好といえる。そのため、前庭部や羨道内において祭祀行為に伴う遺物が23号墓を除いて見られた。



第71図　7群遺構配置図及び立面図　（1/170）

23号墓（第73図）

概要

標高は約355mで7群中最も東に構築されている。天井部が開口し崩落土が大量に流入していた。それ以外の遺構の残りは比較的良好である。

規模・構造

前庭部

独自の前庭部は持たず、共有するテラス床面から20cmのレベル差を持ち、そこに南北1.3m、東西30cmのフラットな面を造り出し羨門を設けている。前庭部の土層観察で、Ⅰ層が黄褐色弱粘質土層、Ⅱ層がオリーブ褐色弱粘質土層、Ⅲ層が黒褐色砂質土層でいずれも崩落土である。Ⅳ層は暗褐色砂質土層で風化を受けている。当横穴墓の西隣に立地する31号墓の初葬時の埋土と思われる。Ⅴ層は黒褐色砂質土層で、風化を受けている。これも31号墓の埋土である。ここから、23号墓は31号墓が構築され追葬が行われた後に構築された可能性が強い。

羨門部

羨門は立ち上がり部幅60cm、最大幅65cm、最大高55cmである。床面には閉塞石を据えたと思われる長軸35cm、短軸15cmの浅い掘りこみがある。また閉塞石は床面から約30cm浮いた位置で検出されている。土層では確認できなかったが、追葬によって現在の位置に動いた可能性が高い。

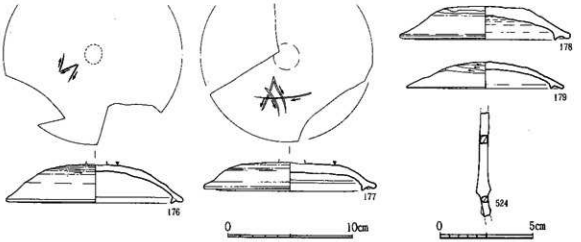
閉塞石は阿蘇溶結凝灰岩の割石が用いられている。

羨道・玄室部

羨道は長さ60cm、玄門部で幅90cm、高さ70cmである。玄室は平入りの不整形な長方形である。奥壁側の幅が1.8m、中央部の幅が1.9m、玄門部の幅1.9m、最大高は不明である。敷石は凝灰岩の角礫が疎らに分布している。床面は奥壁から羨門付近まで平坦に続く。天井部及び四壁はあまり残りは良くなかったが、北壁に残るラインによって家型の天井部が確認されている。玄室の主軸はE－9°－Nである。

遺物の出土状況

テラス部で坏蓋が4点が確認され、玄室内の埋土中から鉄鏃が1点出土している。出土状況に特異なものは認められない。なお出土した遺物は23号墓に属するものか31号墓に属するものか断定できないが、概ね7世紀末代の所産と思われる。



第72図　23号墓出土遺物実測図　（1/3・1/2）

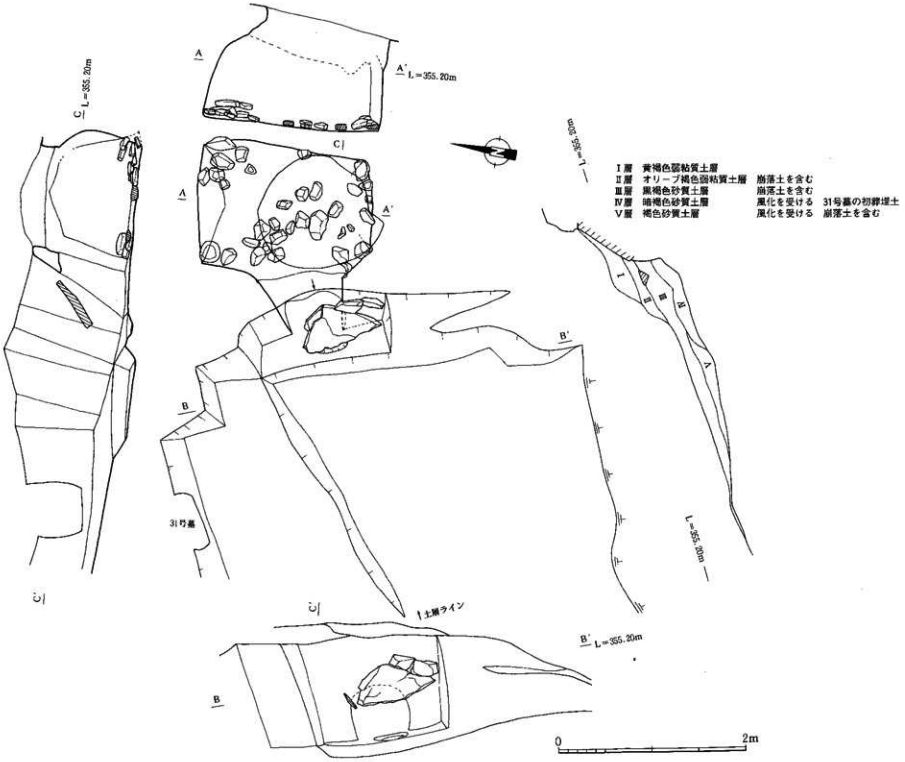
第34表　23号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	寸法 (cm) 口径	底径	器高	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
176	テラス	須恵器	坏蓋	12.2	12.2	14.4		石英・長石を含む	回転ナデ・逆時計回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5Y7/1灰白色	2.5Y6/4浅黄色	受部を取り付け後内面ロクロ工具に巻上げる	有
177	テラス	須恵器	坏蓋	2.25.2	11.5	14.0		0.1～3mm大の石英・長石を少量含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色		有
178	テラス	須恵器	坏蓋	2.65	11.3	13.8		石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ヘラナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5Y6/3灰白色	10YR7/4にぶい黄橙色 2.5Y7/3浅黄色		
179	テラス	須恵器	坏蓋	2.1	(10.6)	12.8		4石英・長石を含む	回転ナデ・静止ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5Y5/3黄灰色	2.5Y5/1黄灰色		

第35表　23号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
524	玄室	鉄鏃	5.4+α	不明	不明	0.4	不明	



第73図　23号墓実測図　(1/40)

31号墓実測図（第74図）

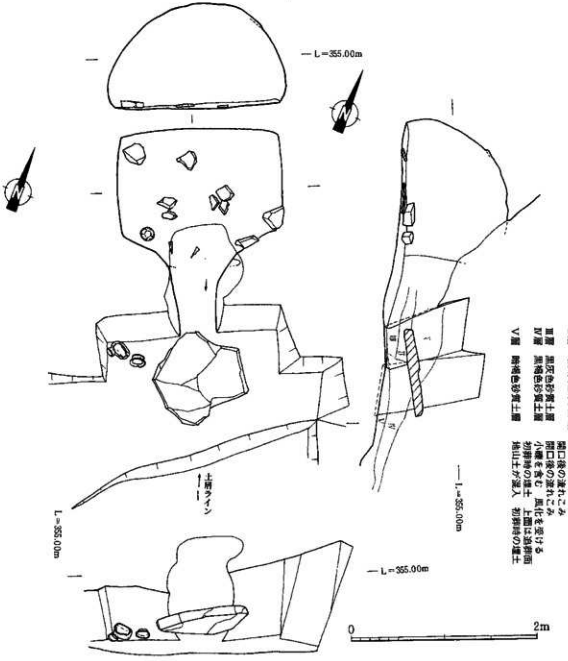
概要

31号墓は23号墓の西、標高355m付近に位置する。羨門～玄室の一部が崩落しているが、ほぼ原状を留めている。また前庭部の埋土の堆積状況も良好で土層観察を行った。

規模・構造

前庭部

長さ１～1.5m、幅1.85mで羨門から1.2m付近で15㎝程度の段差を持つ。基壇等の施設は持たない。土層観察ではⅠ層が黄灰色砂質土層、Ⅱ層が暗灰黄褐色砂質土層、Ⅲ層が黒灰色砂質土層でいずれも崩落土である。Ⅳ層は黒褐色砂質土層でやや風化を受ける。この層の直上に閉塞石がありさらに玄室側に追葬ラインがある。Ⅴ層は暗褐色砂質土層である。このうちⅣ層・Ⅴ層は初葬時の埋土と思われる。



第74図　31号墓実測図　（1/40）

羨門部

羨門は立ち上がり部幅50cm、最大幅70cmである。なお削平を受けているため高さは不明である。羨門の前面には1m×90cm、厚さ10cmの阿蘇溶結凝灰岩を用いた閉塞石が倒れた状態で検出された。その出土状況から追葬時に倒されたことも考えられる。なお閉塞石を据える掘りこみは確認できなかった。

羨道・玄室部

羨道は長さ80cm、玄門部幅70cmで高さは不明である。玄室は平入り長方形で、奥行き1.4m、幅1.8mである。敷石は非常に疎らである。床面は奥壁から羨門に向かってなだらかに下る。天井は崩落しているがドーム型になるものと思われる。主軸はN－25°－Wである。

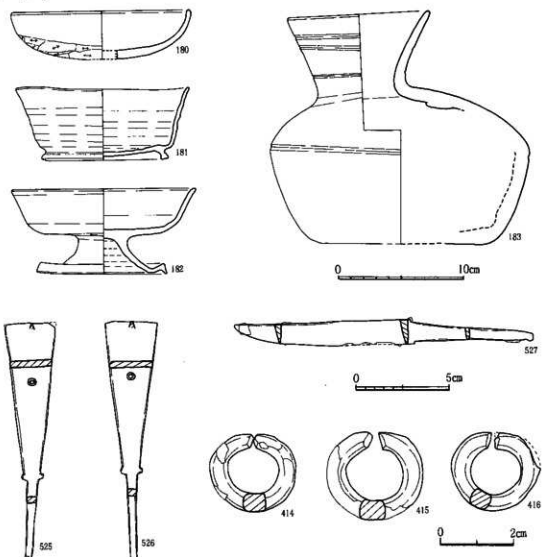
遺物の出土状況

前庭部

羨門左肩部隅、床面直上で高坏1点、横瓶1点が出土した。また崩落土中において土師器の坏が1点出土している。出土した土器は7世紀末～8世紀初頭の所産と思われる。

羨道・玄室部

玄室において坏身1点、鉄鏃2点、刀子1点、耳環3点が出土した。いずれの遺物も原位置は保っていない。



第75図　31号墓出土遺物実測図　(1/3・1/2・実大)

第36表　31号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規模（残存値）・単位(cm) 最高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
180	テラス	土師器	坏身	3.5以上	(14.4)			砂粒多く含む。特に石英・長石を多く含む	回転ナデ・一部ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	良好	5YR5/6橙色	5YR5/6橙色		
181	玄室	須恵器	坏身	5.9	13.9			石英・長石を多く含む	回転ナデ・浅鉄線風ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB6/1青灰色	約第に灰かぶり	
182	テラス	須恵器	高坏	6.75	14.75		10.4	石英・長石を多く含む	回転ナデ・同心ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5Y7/2灰白色 N4.5/N灰色	2.5GY5/1オリーブ灰色		
183	テラス	須恵器	壺瓶	18.4	11.2	20.7		石英・長石を含む。微量	回転ナデ・ヘラケズリ後、回転ナデ・ヘラケズリ後、回転ナデ・回転ナデ	回転ナデ	良好	5YR4/2灰褐色 5YR5/2灰褐色	5YR4/2灰褐色 5YR5/2灰褐色		

第37表　31号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
525	玄室	鉄鏃	12.9	8.3	2.9	0.6	0.3	斧箭式　鏃がつく　木質
526	玄室	鉄鏃	12.8	8.1	2.9	0.6	0.3	斧箭式　鏃がつく
527	テラス	刀子	16.1	9.5	1.1	0.6	0.4	

第38表　31号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
414	玄室	銅地金張	2.3×2.1	0.8×0.5	12.0	内側に銀が残る
415	玄室	銅地銀張	2.6×2.3	0.7×0.5	15.4	内側に銀が残る
416	玄室	銅地金張	2.4×2.0	0.7×0.6	10.6	内側にわずかに金が残る

32号墓（第76図）

概要

31号墓の西、標高355m付近に位置する。羨門～玄室にかけて削平されている。遺物は出土していないが、その立地及び玄室形態から７群中最も新しい時期に構築された横穴墓と思われる。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ60cm、幅1.4mで墓壇等の施設は持たない。前庭部の土層観察ではⅠ層が黒褐色砂質土層で崩落土が混じる。Ⅱ層が黒褐色粘質土層で崩落土が混じる。Ⅲ層は暗褐色砂質土層で追葬時の閉塞埋土か。Ⅳ層は暗オリーブ褐色砂質土層で崩落土である。この層の上面が追葬面の可能性がある。Ⅴ層は黒褐色砂質土層で初葬時の埋土である。以上の土層観察で、最低１回の追葬が行われたと考えられる。

羨門部

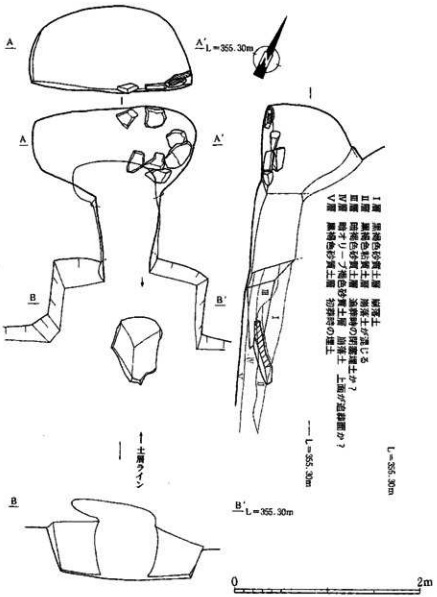
立ち上がり部の幅が50cm、最大幅が70cm、高さは不明である。羨門から約30cm北部分に70×45cmの安山岩を用いた閉塞石が出土した。この閉塞石は前方へ倒された状況で出土していて、おそらく追葬時にこの位置に動いたものと思われる。

羨道・玄室部

羨道の長さ95cm、玄門部の幅70cm、高さは不明である。玄室は平入り不定形で、西側は袖を持つが東側は無袖である。奥行き90cm、幅1.75mで高さは現存で１mである。敷石は東壁～奥壁沿いに数個ある。床面は、奥壁から玄門付近まで比較的フラットで、そこから羨門に向かって緩やかに下る。天井形態は、ドーム型になるものと思われる。主軸はN－26°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第76図　32号墓実測図　(1/40)

33号墓（第77図）

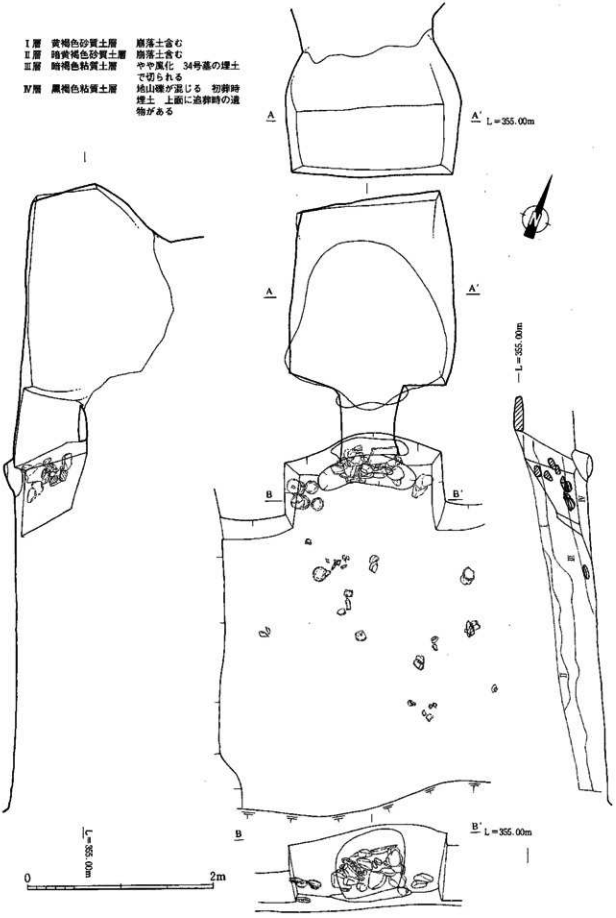
概要

32号墓の西、標高約354.5m付近に位置する。玄室は大きく開口し、内部には敷石や遺物等は見ることが出来なかった。前庭部～羨門～羨道については残りが良く、閉塞状況や祭祀行為に伴う遺物などが確認できた。また前庭部における土層の確認を行った。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ60cm、幅1.4mで基壇等の施設は持たない。土層観察ではⅠ層が黄褐色砂質土層、Ⅱ層が暗黄褐色砂質土層で共に崩落土である。Ⅲ層は暗褐色粘質土層でやや風化を受ける。崩落土であるが、当横穴墓西隣の34号墓に切られている部分がある。Ⅳ層は黒褐色粘質土層で初葬時の埋土である。この層の上面が追葬面と思われる。このように、当横穴墓では最低1回の追葬が行われたと考えられる。



第77図　33号墓実測図　(1/40)

羨門部

羨門は幅1.7m、高さ75cmのフラットな面を削り出しそこに立ち上がり部幅60cm、最大幅70cm、高さ70cmの羨門を掘り込んでいる。また、羨門には安山岩の円礫と凝灰岩の角礫を積み上げた閉塞施設を持つ。ただこの閉塞石の最下部は床面から15cm程度浮いた状況であることから、追葬に伴う閉塞石と思われる。これに対して床面には1.1m×30cm、深さ10cm程度の浅い掘り込みを持つことから本来はこの部分に板石等を用いた閉塞石があったことが考えられる。

羨道・玄室部

羨道は長さ90cm、玄門部幅80cm、高さ70cmである。羨門から玄門までほとんど同じ幅で延びる。玄室は妻入り長方形で、奥行き2m、奥壁側の幅1.6m、中央部幅1.7m、玄門側の幅1.7mである。奥壁が玄室の主軸方向に対してやや北側に傾くため、東壁が2.1m、西壁が1.7mと長さに違いが出ている。床面には敷石が全く残っていない。また奥壁には床面から高さ60cmの部分に横方向に稜がみられる。おそらく軒を意識したものであろう。天井形態は家型になるものと思われる。主軸方向はN－21°－Wである。

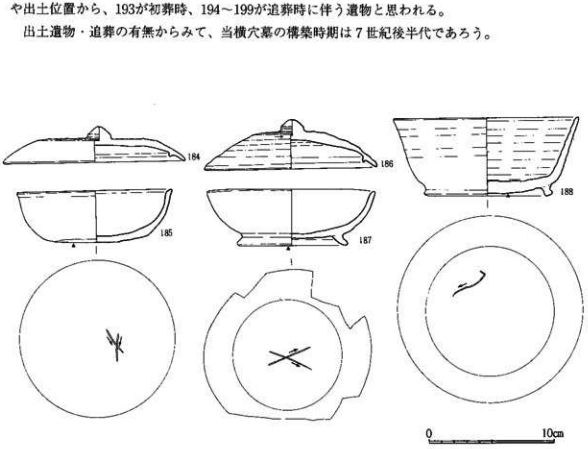
遺物の出土状況

前庭部・羨門部

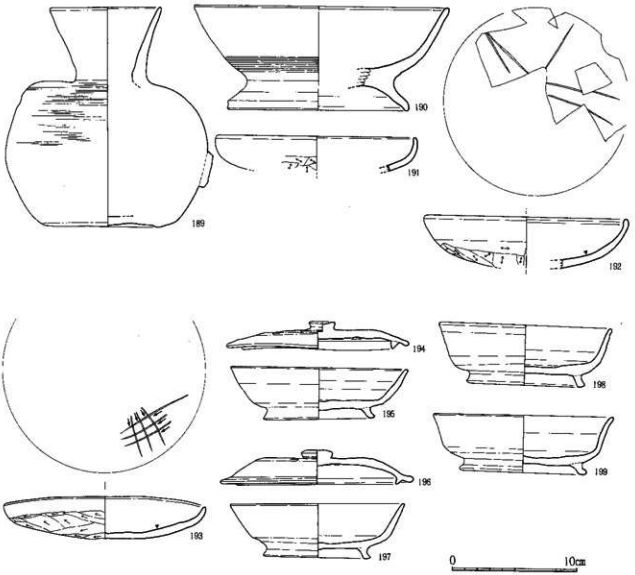
前庭部前に展開するテラスからこの横穴墓に属すると思われる遺物が出土している。出土状況には特異な姿は認められない。ここから出土したのは坏蓋2点（184・186）、坏身3点（185・187・188）、長頸壺1点（189）、台付きの大形壺1点（190）、土師器の皿2点（191・192）である。

また、羨門左隅において遺物の集中部分があった。出土状況から祭祀行為に伴うものである。出土遺物は、床面直上において土師器の皿1点（193）、約15cm上面で坏蓋2点（194・196）、坏身4点（195・197～199）である。このうち194と195、196と197がセット関係にある。土層の堆積状況や出土位置から、193が初葬時、194～199が追葬時に伴う遺物と思われる。

出土遺物・追葬の有無からみて、当横穴墓の構築時期は7世紀後半代であろう。



第78図　33号墓出土遺物実測図1　（1/3）



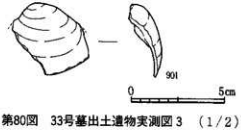
第79図　33号墓出土遺物実測図２　（1/3）

第39表　33号墓出土土器観察表

番号	出土位置・種類	器別	器種	規模（ガッコ内は完存・現存）(cm) 器高	口径	底径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
184	テラス	須恵器	坏蓋	3.95	13.8	14.1		石英・長石を含む	回転ナデ・底部ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	普通	2.5YR5/2灰赤色	2.5Y5/1黄灰色		有
185	テラス	須恵器	坏蓋	4.1	12.4		7.35	白英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後ヘラ押ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR5/1黄灰色	10GY6.5/1緑灰色		有
186	テラス	須恵器	坏蓋	2.8	12.2			石英・長石を含む	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5YR5/6赤橙色	5YR6/4にぶい橙色		
187	テラス	須恵器	坏身	4.5	13.4		9.0	石英・長石を多量に含む	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5Y6/1暗黄色 2.5Y6/1黄灰色	2.5Y5/1黄灰色		有
188	テラス	須恵器	坏身	4.2	14.8		10.6	石英・長石を微量含むが良好	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR4/1にぶい黄色	5Y7/3灰白色		有
189	テラス	須恵器	長頸瓶	(17.3)	(8.6)	(16.1)		石英・長石を含む	ヘラケズリ・ヘラナデ・ヨコナデ・ミガキ	回転ナデ	良好	5Y6/6黄色	N2.0 黒色	自然釉が全体的に かかっている 底部に2ヵ所 ほぼ直径 外底にヨコ ナデ痕有り	
190	テラス	須恵器	台付長頸壺	8.2	20.2		14.4	石英・長石・角閃石含む	回転ヨコナデ・ミガキ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	2.5Y7/1灰白色	5Y5/1灰白色		
191	テラス	土師器	鉢	2.85上	(18)			砂粒を多く含む粗雑	回転ナデ・胴上ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	7.5YR5/4にぶい黄色	7.5YR5/4にぶい黄色		
192	テラス	土師器	鉢	4.1上	(16)			石英・長石を少量含むが良好	回転ナデ・筆ヨハケメリ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色		有
193	テラス	土師器	甕	3.3	16.2			石英・角閃石・金雲母の微粒が混じりわずか粗雑	回転ナデ・胴上ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	良好	7.5YR7/6黄橙色	7.5YR7/6黄橙色	内面に指痕が残る	有
194	テラス	須恵器	坏蓋	2.3	12.1	14.9		石英を含む	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5YR5/6 5YR4/1暗黄色	5Y4/1灰色		
195	テラス	須恵器	坏身	4.2	14.2		9.0	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラ切り・底部ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5/1灰色 7.5YR5/1灰色	10Y6/1灰色		
196	テラス	須恵器	坏蓋	2.7	12.7	15.8		石英・長石を含むが粗雑	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色 5YR5/6赤黄色	5YR5/6赤黄色 5YR4/1暗黄色		
197	テラス	須恵器	坏身	4.4	14		8.8	石英・長石を少量含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR5/1灰色	7.5Y6/1灰色		
198	テラス	土師器	坏身	4.8	13.85		9.6	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後ヘラ押ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5R6/1暗灰色	5GY4.5/1暗緑色 5R6/4暗橙色	火小あり有	
199	テラス	須恵器	坏身	4.6	14.4		10.4	石英・長石を含むが粗雑	回転ナデ・ヘラケズリ後回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N6/0灰色	外面に自然釉	

羨道・玄室部

羨道及び玄室内から出土した遺物は無かったが、玄室埋土からシジミ貝と思われる貝殻片が出土している。



第80図　33号墓出土遺物実測図３　（1/2）

34号墓（第81図）

概要

33号墓の西、標高約355m付近に位置する。

前庭部は比較的残りは良いが羨門～玄室にかけて、削平が著しい。特に玄室は大きく開口している。

また祭祀行為に伴う遺物が羨門付近や羨道～玄室で出土している。前庭部の埋土堆積状況は良好で土層観察を行った。

規模・構造

前庭部

当横穴墓の前庭部は、33号墓の埋土を切るように造られている。長さが東壁側で3.5m、西壁側が1.6m、幅が1.8mである。また羨門部から約65cm下った部分で約15cmの段差を持つ。西壁はさらに西方向に延び、26号墓の前庭部につながる。土層観察ではⅠ層が黄褐色砂質土層で崩落土、Ⅱ層が黒褐色砂質土層で風化を受けている。羨門から約1.2mの位置に追葬ラインがある。Ⅲ層は黒色砂質土層で、初葬時の埋土である。上面は追葬面と思われる。最低２回の追葬が行われたものと思われる。また、西壁端部を中心に凝灰岩の扁平な角礫が1.8m×80cmの範囲に分布していた。これらの礫はⅢ層上面に展開することから、１回目の追葬時に玄室内から掻き出された敷石と考えられる。

羨門部

立ち上がり部幅70cm、最大幅85cm、高さは不明である。床面には1.1m×40cm、深さ25cmの掘り込みがある。閉塞石を据える施設と思われる。なお閉塞石は残っていない。

羨道・玄室部

羨道は長さ１m、玄門部の幅90cm、高さは不明である。玄室は妻入り長方形で、奥壁に行くにしたがって幅が狭くなる。奥行き2.4m、奥壁側の幅1.6m、中央部幅1.7m、玄門側の幅1.9mである。削平が著しく天井形態は不明である。敷石は大半が前庭部に持ち出され玄門～東袖部にかけてわずかに確認されるのみである。床面は奥壁から玄門までほぼフラットで、玄門付近から羨門にかけて下る。玄室の主軸はN－25°－Wである。

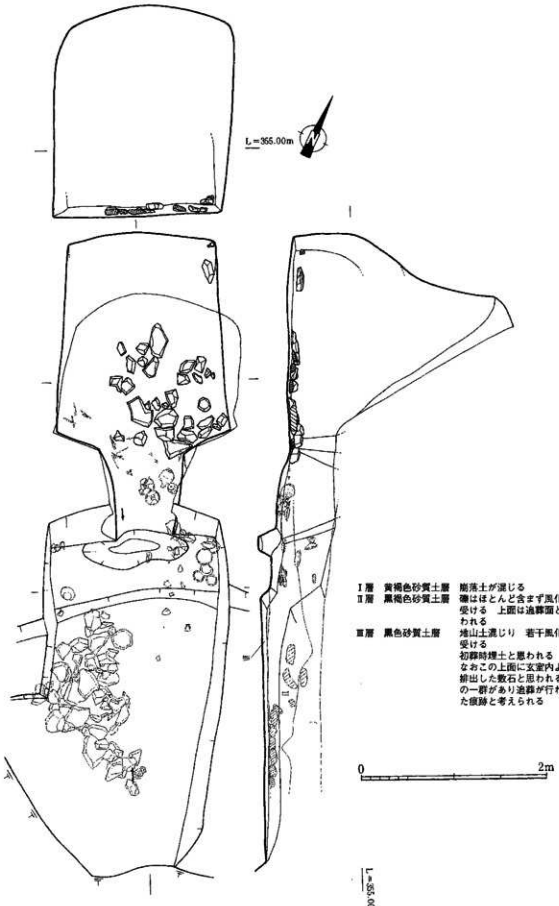
遺物の出土状況

前庭部・羨門部

前庭部から出土した遺物は坏蓋１点（206）、坏身１点（207）、平瓶１点（208）である。出土状況に特異なものは無い。これに対して、羨門東肩部付近において祭祀行為に伴うものと思われる遺物群が確認された。ただ遺物の出土状況から時期差があるものと思われる。まず、坏蓋１点(200)、坏身２点（201・203）、土師器の坏身１点（202）が床面直上で出土した。また土師器の高坏１点（205）、坏１点（204）が床面から30cm程度上位で出土した。このうち土師器の蓋の内部に耳環が１点張り付いていた。上位で出土した土師器は玄室内から持ち出され、この位置に置かれた可能性が高い。出土した遺物は７世紀中頃～後半代の所産と思われる。

羨道・玄室部

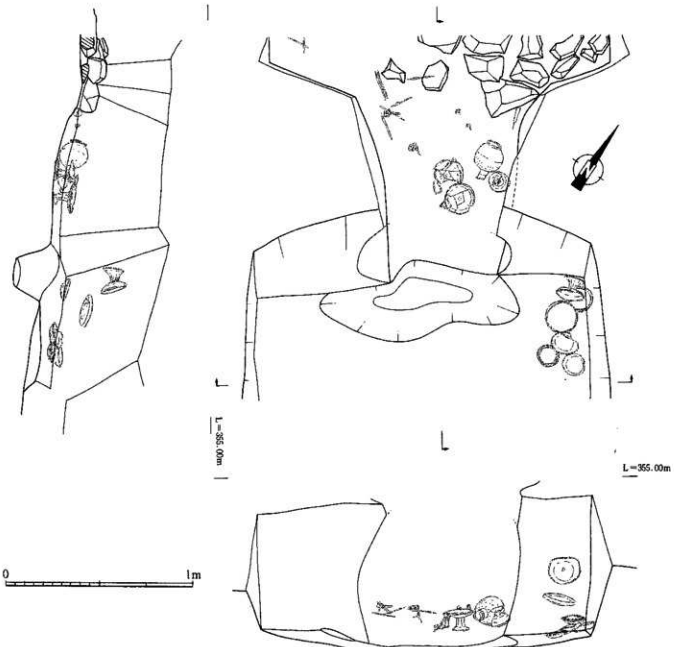
羨道部において須恵器の高坏１点（209）、長頸壺１点（213）、土師器の高坏３点（210～212）が出土した。高坏の209は伏せた位置、残りは正位置で出土した。長頸壺は倒れた状況で出土してい



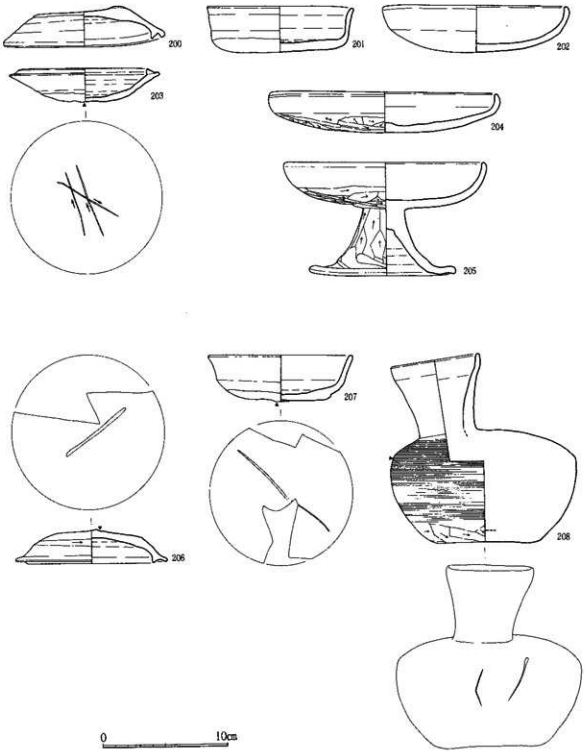
第81図　34号墓実測図　(1/40)

る。やや浮いた状況で出土しているため追葬時の遺物と思われる。玄室内では鉄鏃12点、刀子３点、馬具４点、耳環１点が出土した。鉄鏃は、玄門西側～西袖部にかけてほぼ９割が刃部を玄門方向に向けて出土した。馬具については一定の方向性は認められない。ただ鉄鏃等も床面からやや浮いた位置で出土していて、追葬時の遺物である可能性が高い。

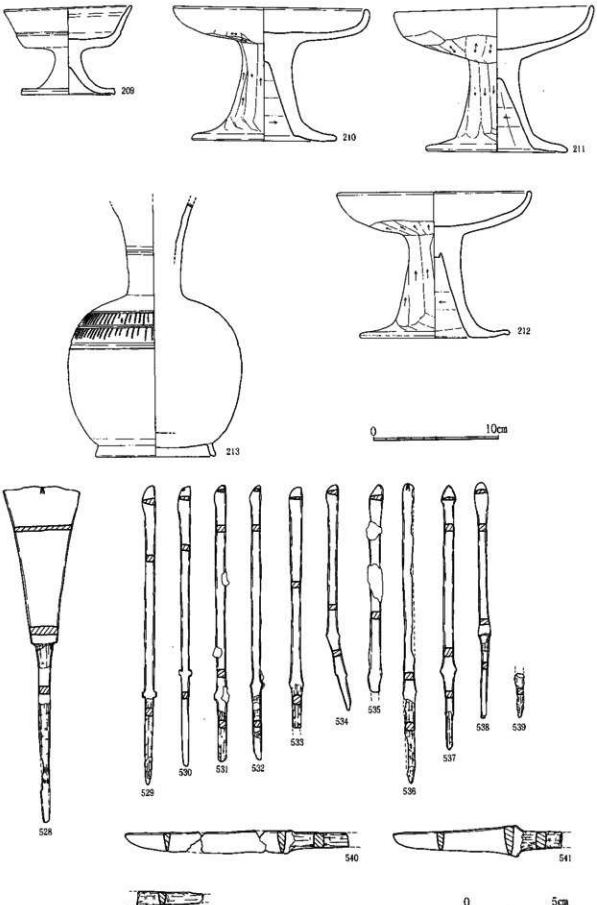
羨門部で出土した土師器の高坏は土層とあわせてみると２回目の追葬面に一致する。共伴した土師器の皿の内部に耳環が張り付いていたことから、１回目の追葬時に羨道にあった遺物をこの位置に掻き出したとも考えられる。玄室内から出土した遺物は、須恵器の高坏から７世紀中葉から後半に比定できよう。



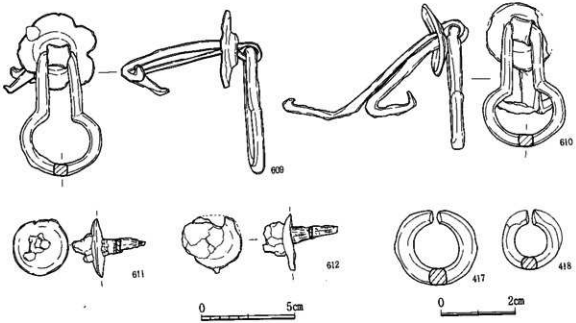
第82図　34号墓前庭・羨道部祭祀遺物出土状況　（1/20）



第83図　34号墓出土遺物実測図１　（1/3）



第84図　34号墓出土遺物実測図２（1/3・1/2）



第85図　34号墓出土遺物実測図３　（１/２・実大）

第40表　34号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	長軸	短軸	深さ(残)	高脚	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ハケ目有
202	テラス	須恵器	甲蓋	2.8	10.8	13.0		白英・長石を少量含む が良好	回転ナデ・ヘラ切り 後に巻 ・定方向ナデ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	2.5Y5/1黄灰色	5Y5/1灰色	口縁部に重ね焼き痕有	
201	テラス	須恵器	甲身	3.7	11.7		10.6	白1～4mm大の石英・長石を多く含む	回転ナデ・ヘラ切り 後に高ナデ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	5Y6/1白に赤い斑 点 N5/灰色	2.5Y5/1灰赤色		
203	テラス	土師器	甲身	3.7	15			赤褐色・黒海を含む	底部ナデ・丁寧なナデ調整	回転ナデ・ヨコナデ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		
203	テラス	須恵器	甲身	2.7	10.4	12.2	7.45	白英・長石を少量含む	回転ナデ・ヘラ切り 後に巻ナデ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	2.5Y5/1暗灰黄色	2.5Y5/1黄灰色		有
204	テラス	土師器	甲身	3.2	18			石英・長石を含むが 微細	回転ナデ・静止ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	5YR6/6橙色	5YR7/6橙色	高台はしっかり 焼き痕	有
205	テラス	土師器	高杯	9	16.2		11.8	石英・長石・雲母を含むが微細	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ハケ目ナデ・連続回転ヘラケズリ・ヘラ状工具痕	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	口縁部一部黒変 ヘラ状工具痕	
206	テラス	須恵器	甲蓋	2.7	10	12.3	8.1	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り 後に、回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	5Y7/1灰白色 N6/灰色	10Y5/1灰 10Y5/1灰色		有
207	テラス	須恵器	甲身	3.65	11.5		8.85	石英・長石を含むが 微細	回転ナデ・ヘラ切り 後に、ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	2.5GY7/1オリーブ灰色	2.5GY6/1オリーブ灰色		有
208	テラス	須恵器	甲蓋	15	6.9	14.8		石英・長石を含むが 微細	回転ナデ・ヘラケズリ後ハケ目ナデ・静止ヘラケズリ・全体	回転ナデ	良好	7.5Y7/1灰白色 N6/灰色 N6/灰色	7.5Y7/1灰白色 N6/灰色 N6/灰色		有
209	玄室	硬質器	高坏	7.1	10.1		7.8	石英・長石を含む	回転ナデ・縦転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ・不定方向 ナデ	良好	5YR5/1黒灰色 5YR7/1灰色	N5/灰色 5Y7/1灰色	灰かぶり有	
210	玄室	土師器	高坏	10.6	15.2		11.7	石英・及石・角閃石・雲母を含む	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ・方向へラケズリ・上下方向へラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色 2YR6/6橙色	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色		
211	玄室	土師器	高坏	11.3	15.6		11.5	角閃石・雲母を含む 声調質	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ・上下方向へラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヘラケズリ	良好	5YR6/6橙色	5YR7/6橙色	しまり悪い	
212	玄室	土師器	高坏	11.6	16.2		12.2	石英・長石・雲母を含む	回転ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ・上下方向へラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヘラケズリ	良好	5YR6/6橙色	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色		
213	玄室	硬質器	長頸壺	20.8以上		14.9	9.6	3mm角程の石英・長石粒を少量含む	回転ナデ・ヘラ切り後、粗ヘラ状方向ナデ	回転ナデ	良好	N3.5灰色 N3.5灰色	N3.5灰色	肩は欠 口縁部 大部 頸部・胴部 一括出土あり 行	

第41表　34号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
528	玄室	鉄鏃	17.7	8.3	5.1	0.6	0.2	斧箭式　木質
529	玄室	鉄鏃	15.9	1.5	0.7	0.4	0.3	棘箆被片刃箭式　木質
530	玄室	鉄鏃	14.8	2.1	0.7	0.4	0.2	棘箆被片刃箭式
531	玄室	鉄鏃	14.7	1.0	0.7	0.5	0.2	棘箆被片刃箭式　木質
532	玄室	鉄鏃	14.6	1.0	0.6	0.5	0.2	棘箆被片刃箭式　木質
533	玄室	鉄鏃	12.7+α	1.3	0.7	0.5	0.2	棘箆被片刃箭式　木質
534	玄室	鉄鏃	11.9+α	1.1	0.7	0.5	0.3	棘箆被片刃箭式　木質
535	玄室	鉄鏃	11.0	1.0	0.7	不明	0.3	棘箆被片刃箭式
536	玄室	鉄鏃	15.9	1.0	0.7	0.6	0.2	棘箆被鏃箭式　木質
537	玄室	鉄鏃	13.9	0.9	0.8	0.4	0.2	棘箆被鏃箭式　木質

538	玄室	鉄　鏃	12.4	1.6	0.7	0.4	0.2	鳶板鏃箭式　木質
539	玄室	鉄　鏃	不明	不明	不明	0.4	不明	茎のみ　木質
540	テラス	刀　子	11.9+α	8.9	1.0	0.8	0.3	木質
541	玄室	刀　子	9.0+α	7.5	1.1	0.9	0.4	刃部に炭化物付着
542	玄室	刀　子	不明	不明	不明	0.8	不明	木質
609	玄室	馬　具	—	—	—	—	—	しおで
610	玄室	馬　具	—	—	—	—	—	しおで
611	玄室	馬　具	—	—	—	—	—	鉄金具 炭化物付着 木質
612	玄室	馬　具	—	—	—	—	—	鉄金具 炭化物付着 木質

第42表　34号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作　り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備　　考
417	主室	銅地銀張	2.2×2.0	0.6×0.5	9.0	内側にわずかに銀が残る
418	主室	銅地金張	1.6×1.6	0.6×0.4	5.3	側縁部が剥落

26号墓（第86図）

概要

34号墓の西２m、標高354m付近に位置する。玄室が大きく開口しているが前庭部～羨道にかけて比較的残りは良好である。ただし前庭部の埋土は大半が流出していたため土層観察は行えなかった。

規模・構造

前庭部

長さ2.8m、幅1.5mで、東側は34号墓前に展開するテラスを、西側は27号墓前に展開するテラスを切るように掘り込まれている。なお、基壇等の施設は持たない。

羨門部

幅1.6m、高さ90cmのフラットな面を削り出し、そこに立ち上がり部幅50cm、最大幅60cm、高さ75cmの羨門部をもつ。この羨門には高さ80cm、幅60cm、厚さ10cmの閉塞石が残っていた。阿蘇溶結凝灰岩の扁平な割石を用いたものである。これと共に羨門から約30cm前方に65×60cm、厚さ20cmの安山岩の扁平礫が前方に倒れた状態で検出された。おそらくこの礫も閉塞石であったと思われる。土層観察は行えなかったが、羨門に正位置で検出されたものが追葬時、前方に倒れたものが初葬時の閉塞石と思われる。

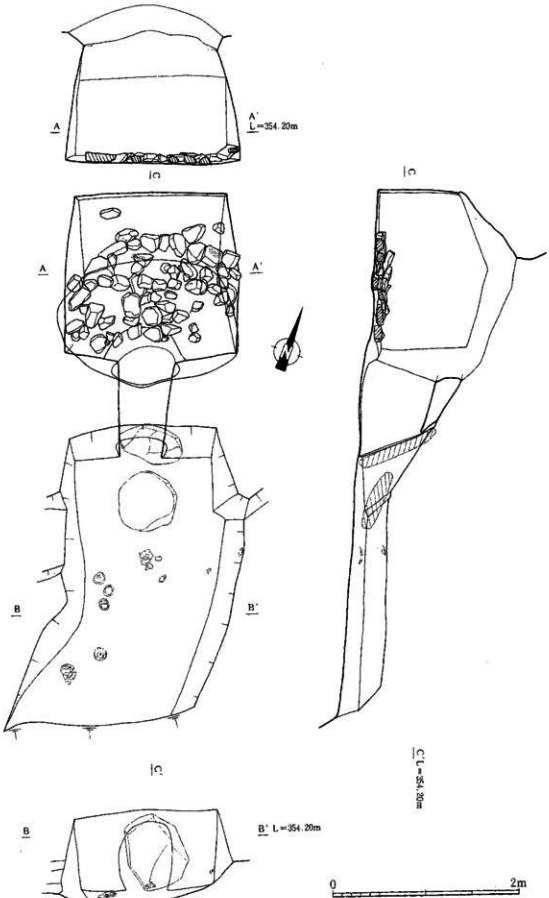
羨道・玄室部

羨道は長さ１m、玄門部の幅60cm、最大幅70cm、高さ75cmである。玄室は胴張り気味の正方形で、奥行き1.8m、奥壁側の幅1.6m、中央部幅1.9m、玄門部幅1.8mである。敷石は奥壁側や東袖部付近にはほとんど見られないが中央付近にかけて凝灰岩の角礫が分布している。部分的に人骨片が見られた。床面は、奥壁から玄門付近まではほぼフラットで、そこから約15cmの段差を持ち羨門へ至る。また奥壁には床面から85cm上部に軒を意識したラインが確認できる。天井形態は東西壁に残った稜線からみて家型である。玄室の主軸方向はN－21°－Wである。

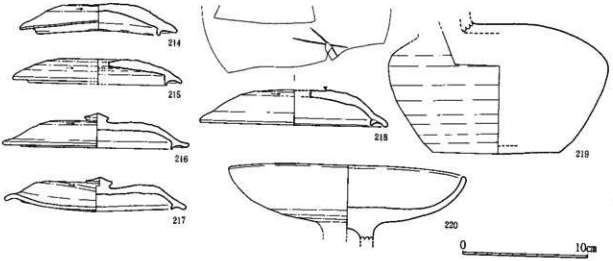
遺物の出土状況

前庭部・玄室部

前庭部から出土した遺物は坏蓋５点、高坏１点、平瓶１点である。出土状況に特異な例は認められない。前庭部の埋土がほとんど流出しているため、上段に展開している横穴墓からの流れ込みの可能性もある。玄室から遺物は出土していない。出土した遺物は７世紀後半代の所産と思われる。



第86図　26号墓実測図　(1/40)



第87図　26号墓出土遺物実測図　(1/3)

第43表　26号墓出土土器観察表

番号	器種/形態/調整	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
214	テラス 須恵器 平底	砂粒・長石を多く含む	良好	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ	2.5YR/1黄灰色	5YR/1灰色
215	テラス 須恵器 平底 口径 2 底径 11 最大径 13.6	砂粒・長石を多く含む	良好	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ	2.5YR/3灰色 2.5YR/1黄灰色	2.5YR/1灰白色
216	テラス 須恵器 平底 口径 2.7 底径 11.9 最大径 15.0	砂粒・長石を多く含む	良好	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	7.5YR5/1褐灰色	N5/N灰色
217	テラス 須恵器 平底 口径 2.7 底径 12 最大径 16.0	1～2mm大の石英を多く含む 長石を多く含む	良好	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	5B5/1青灰色 5B5/1青灰色	5B5/1青灰色 外面灰かぶり
218	須恵器 平底 口径 2.8以上 底径 12.3 最大径 15.4	砂粒・長石を少量含む	良好	回転ナデ・ヘラ切り ヨコナデ・調整ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	5Y4/1灰色	5Y5/1灰色	有
219	テラス 須恵器 平底 高3.2以上 底径 17.6 最大径 30	石英・長石を含む 砂粒	良好	回転ナデ・ヘラ切り ヨコナデ・調整ヘラケズリ 底部回転ナデ		7.5YR4/2褐色 7.5YR5/3にぶい褐色 5Y5/1灰色	
220	テラス 須恵器 高坏 口径以上 底径 18.9	石英・長石を含む	良好	回転ナデ・ヘラケズリ 脚ナデ	横撫で痕	N5/N暗灰色	N5/N暗灰色	底部内面に横撫で痕 ヘラかき1本

27号墓（第88図）

概要

26号墓の西３m、標高約354m付近に位置する。玄室の天井部が一部崩落し開口していたものの、全体的な遺構の残りは良好である。遺物は前庭部を中心に出土したが、埋土は大半が流失していたため土層観察は行えなかった。

規模・構造

前庭部

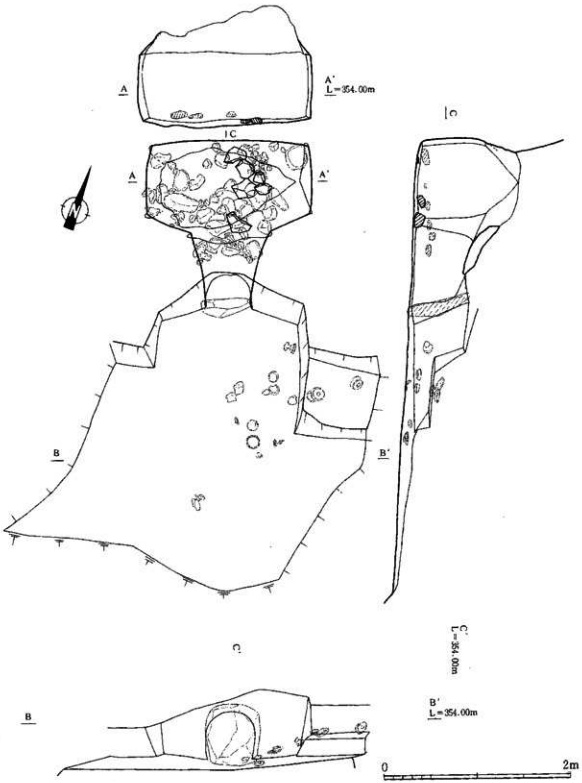
前庭部の長さは西側が50cm、東側が1.2mで幅は1.5mである。東側には80×70cmの基壇状の施設を持つ。当横穴墓前に展開するテラスは西を28号墓に、東を26号墓にそれぞれ切られている。

羨門部

羨門は立ち上がり部の幅50cm、最大幅55cmで、閉塞石もほぼ原位置を保って検出された。閉塞石は高さ70cm、幅55cm、厚さ15cmで安山岩製である。羨門床面に閉塞石を据えるような掘り込みは認められない。

羨道・玄室部

羨道は、玄室に向かって広がり、長さ80cm、玄門の幅90cm、高さ60cmである。玄室は平入り長方形で奥行き１m、幅1.8mである。敷石の分布状況はやや特異で、床面直上で中央付近に敷石が数個確認された。さらに、ここから約20cm上位でもう一面礫の分布が確認された。当初玄室が開口していたため崖面の崩落による流入と思われていたが、他の横穴墓でも同様の検出状況が認められた



第88図　27号墓実測図　(1/40)

ため、追葬時に従来の玄室床面をかさあげして、改めて死床を造り直した可能性を持つ。この面で確認された敷石は非常に雑に分布していて、空白部分がかなりある。また一部礫は羨道まで広がる。ただ2回目の敷石に関わる床面は明瞭な整地面を持っていない。

このような例は、当横穴墓群では8群63号墓で、前庭部の土層観察結果とほぼ合致するように数回の礫面が確認されている。他の報告例でも日田市夕田横穴墓群第10支群3号墓でほぼ同様の検出状況が確認されている。

奥壁には床面から約70cm上がった部分に杆を意識した稜を持つ。また両側壁とも直立して立ち上がる。天井形態は家型である。

初葬時の床面については奥壁から羨門まで非常に緩やかな傾斜で下る。主軸方向はN－21°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部

遺物は主に前庭部東側にある基壇状の施設周辺から出土している。垂直分布状況を見ると、かつては大半の遺物がこの上に置かれていたものが、流れ落ちた様相が見られる。基壇上で出土したものが坏蓋1点（221）、塊1点（222）、高坏1点（223）、基壇下部で出土したものが坏蓋2点（224・225）、坏身4点（226～229）、塊1点（230）、土師器の皿1点（232）、高坏1点（231）である。

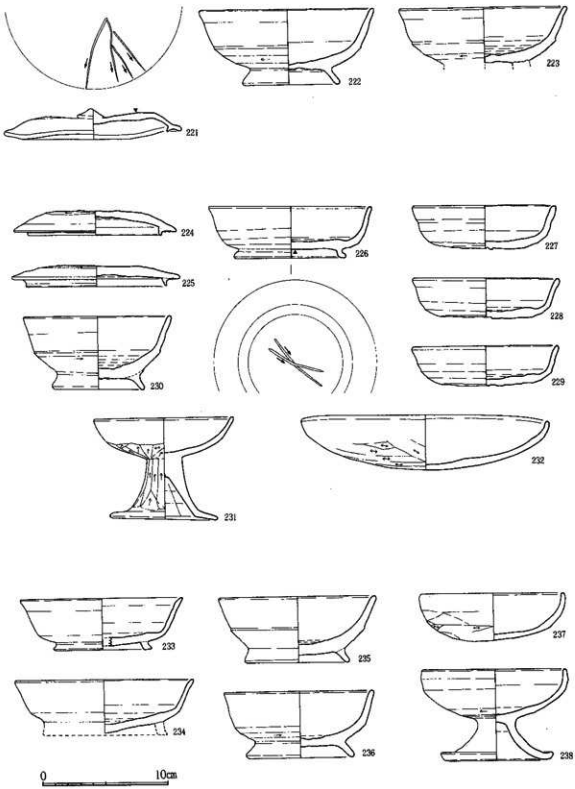
これ以外に埋土中から坏身2点（233・234）、塊2点（235・236）、高坏1点（238）、土師器の坏身1点（237）が出土している。これらはいずれも7世紀後半代の所産と思われる。

羨門部・羨道部・玄室部

遺物は出土していない。

第44表　27号墓出土土器観察表

番号	出土位置・名称	器種	器種	規模(　)内は復元値・単位(cm) 口径	器高	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
221	27号テラス	横穴墓	坏蓋	2.5	2.0	14.3		石英・長石を少量含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5GY5/1オリーブ灰色	N3/0暗紫色	器形極(図)がかっている。口縁部に重ね焼痕跡	有
222	27号遺構面	横穴墓	塊	6	14		7.9	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR7/1明白色	2.5YR7/2淡黄色	5PB4/1暗紫灰色	有(底)(図)は第1図に上部の重焼痕跡大部
223	27号横穴墓	横穴墓	高坏	脚部	脚部			石英・長石を含む	回転ナデ ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ヨコナデ	回転ナデ	良好	5YR7/1明白色	5YR7/1明白色	5YR7/1明白色	脚部欠損
224	27号テラス	横穴墓	坏蓋	2	10.7	13.2		1～2mm大の石英と長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	7.5YR5/1灰色	2.5YR5/1灰色	7.5YR5/1灰色	口縁部に重ね焼き痕有
225	27号テラス	横穴墓	坏蓋	1.7	11.2	13.7		石英・長石を少量含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	2.5YR7/2淡黄色	2.5YR7/1明白色	2.5YR7/1明白色	
226	27号テラス	横穴墓	坏身	4.2	13		9.6	石英・長石を少量含む	回転ナデ・ロクロナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色	N6/0灰色	同かより	有
227	27号テラス	横穴墓	坏身	3.5	11.6		8.2	2mm大の石英を多く含む　長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り後なし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	10BG4/1暗青灰色	10BG3/2暗緑色 N4.5/0灰色	10BG4/1暗青灰色 N4.5/0灰色	同かよりも	
228	27号テラス	横穴墓	坏身	3.3	11.75		7.4	石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6.5/0灰色	5YR5/1暗灰色	5YR5/1暗灰色	
229	27号テラス	横穴墓	坏身	3.15	11.7		7.4	1～2mm大の石英を多く含む　長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	
230	27号テラス	横穴墓	塊	5.8	11.7		7.4	石英・角閃石・長石を含む小礫多	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5YR7/1明白色	10YR8/3淡黄灰色	10YR8/3淡黄灰色	
231	27号テラス	土師器	高坏	8.1	11.8		8.8	石英・長石を含む小礫多	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ、カキ目・ヘラケズリ	良好	5YR6/4橙色	2YR6/6橙色	しまり悪者	
232	27号テラス	土師器	皿	4.2	15.9			石英・長石を微細含む小礫細（雲母）	回転ナデ・強い横ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	5YR6/8橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	底部有
233	27号テラス	石製品	坏身	(4.1)	(12)		7.7	無胎粗を含む小礫多	回転ナデ・ロクロナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5YR5/6明赤褐色	N6/0灰色	10R4/7暗赤灰色	
234	27号テラス 29号遺構	須恵器	坏身	4.3以上	14.4		(10.1)	1～2mm大の石英と長石を多量に含む	回転ナデ・ヘラ切り後ヨコナデ	回転ナデ・小定方向ナデ	良好	2.5GY6/1オリーブ灰色	N5.5/0灰色	2.5GY6/1オリーブ灰色	重ね欠損
235	26号テラス 27号テラス	須恵器	塊	5.3	12.7		8.4	石英・長石・角色粗砂を多量含む小礫多	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	N5/0灰色	N6.5/0灰色		
236	27号テラス	須恵器	塊	5.25	12		8.7	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・小定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	N5/0灰色	全体的に赤色軸がかっている
237	27号テラス	土師器	坏身	3.8	11.9			無胎粗を含む小礫細（雲母）	回転ナデ・静止ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	7.5YR6/6明色	7.5YR6/6明色	7.5YR6/6明色	
238	27号テラス	須恵器	高坏	7.3	11.55		9.3	石英・長石を含む小礫細	回転ナデ・強横回転ヘラケズリ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	5B5/1青灰色	5B5/1青灰色		



第89図　27号墓出土遺物実測図　(1/3)

28号墓（第90図）

概要

27号墓の西３m、標高342m付近に位置する。遺構の残りは非常に良好でほぼ原状を保っている。ただ前庭部の埋土は大半が流失していたため土層観察は出来なかった。

規模・構造

前庭部

前庭部は、墓道状の平面観を持ち、長さ4.5m、幅が１～1.6mである。羨門西肩部から1.2m、及び東肩部から１mの部分にそれぞれ基壇状の張り出しを造り出している。主軸方向がN－20°－Wとなり、玄室の主軸と約15度の差がある。

羨門部

羨門部は高さ1.2～1.4m、幅1.8mのフラットな面を造り出し立ち上がり部幅50cm、最大幅60cm、高さ65cmの羨門を掘り込む。羨門には高さ75cm、幅70cm、厚さ15cmの安山岩製の閉塞石が立てられている。閉塞石を据える掘り込みは無い。

羨道・玄室部

羨道は玄室に向かって広がり、玄門部で幅80cm、高さ70cmになる。玄室は平入り長方形で若干胴張り気味である。奥行き1.5m、奥壁側の幅が1.6m、中央部の幅が1.8m、玄門側の幅が1.7mである。敷石は全く無い。奥壁及び両側壁には幅８cm程度の工具痕が残る。また奥壁には床面から70cm上位で軒を意識したラインが残っている。すべての壁がほぼ直立して立ち上がり家型の天井を形成する。玄室の主軸はN－35°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部・羨門部

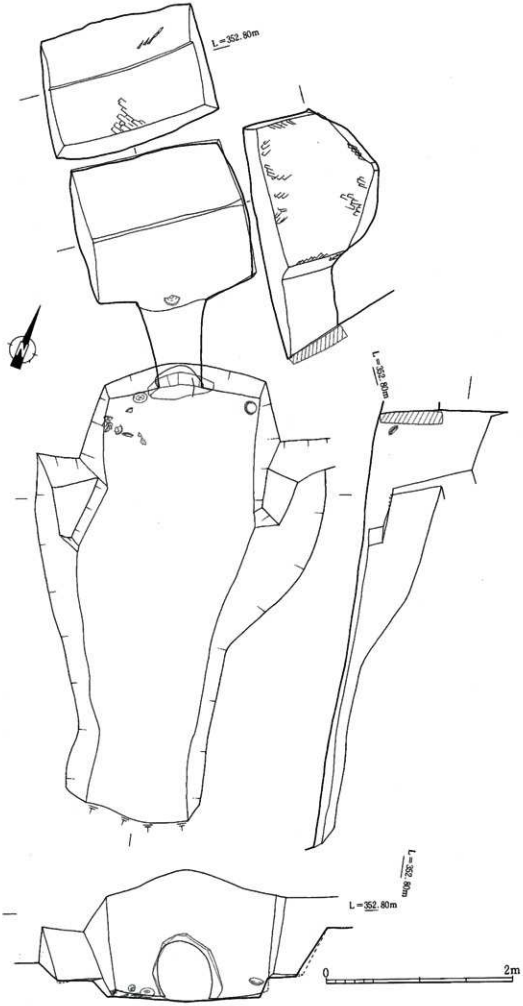
遺物は主に羨門の東西肩部において出土した。西肩部周辺の遺物は、坏蓋３点（239～241）、小型短頸壺１点（242）、土師器の坏身１点（243）がほぼ床面直上で検出され、東肩部では坏身１点（244）が床面から約15cm上位で出土した。土層観察は行えなかったが、追葬に関わる遺物の可能性もある。いずれの遺物も７世紀後半代の所産と思われる。

羨道・玄室部

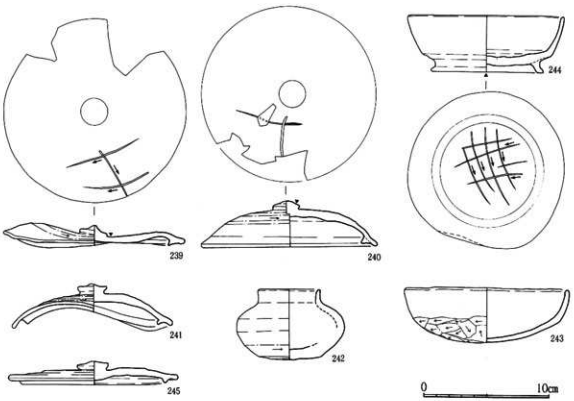
玄室内の埋土から坏蓋が１点（245）出土したが、原位置は保っていない。７世紀後半代の所産と思われる。

第45表　28号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	器種	器種	規模（ ）は復元値・単位cm					胎土	調整		焼成	色調		備考	ヘラ記号
				口径	底径	最大径	器高			外面	内面		外面	内面		
239	テラス	横穴墓	坏蓋	1.95	13.25%	14.8%			石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0暗灰色	N6/0灰色	口縁部に重ね焼き痕 外面に口縁部	有
240	テラス	横穴墓	坏蓋	3.6	13.4				石英・長石を含む	回転ナデ・逆鋸歯状ヘラケズリ・窓枠ヘラ切り 裏面転ナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	10YR5/3にぶい黄橙色 5Y5/2灰緑色	5YR5/4にぶい黄橙色 5YR4/1褐灰色		有
241	テラス	横穴墓	坏蓋	3.65%	10.45%	13.05%			2mm大の石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N4/0灰色	N6/0灰色	口縁部に重ね焼き痕	
242	テラス	横穴墓	小型短頸壺	5.8	4.7	8.6			石英・長石を含むが緻密	回転ナデ・ヘラ記号 ロクロ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5Y5/1黄灰色	2.5Y5/1黄灰色	外面黒程度	
243	テラス	土師器	坏身	3.4	13.2				石英・赤褐色・角閃石を含む	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		
244	テラス	横穴墓	坏身	4.5	12.6				1mm大の石英・長石を含む	回転ナデ・ヨコナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5GY4/1暗緑灰色 N5/0灰色	7.5GY5.5/1緑灰色		有
245	玄室	横穴墓	坏蓋	1.9	11.55	13.8			石英・長石を含む	回転ナデ・逆鋸歯状ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	口縁部に重ね焼き痕	



第90図　28号墓実測図　(1/40)



第91図　28号墓出土遺物実測図　(1/3)

29号墓（第92図）

概要

7群中最も西、標高約353m付近に位置する。全体的に遺構の残りは良好でほぼ原状を保つ。しかし前庭部埋土の流失は著しく土層観察は出来なかった。遺物の出土量も比較的多かったが確実に原位置を保つものは少なかった。

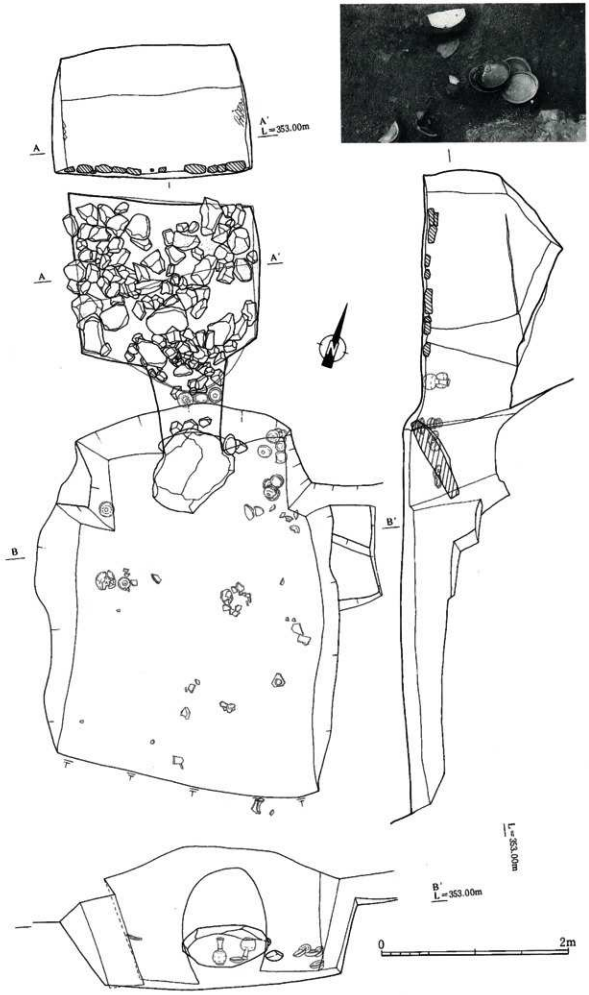
規模・構造

前庭部

前庭部の長さは3.5m、幅は2.6m、羨門西肩部から約80cm、東肩部から90cmにそれぞれくびれを持つ。東くびれ部から北方向に上場ラインに沿って幅45cm、長さ1mの基壇状の張り出し部を造り出している。この張り出し部は2段構造で約30cmの落差を持つ。

羨門部

幅2.2m、高さ1.5mのフラットな面を削り出し、羨門を設ける。羨門は立ち上がり部の幅が70cm、最大幅が90cm、高さが1.1mである。羨門の前には長さ95cm、幅80cm、厚さ20cmの安山岩を用



第92図　29号墓実測図　(1/40)

いた閉塞石が前に倒れた状態で検出された。追葬時に倒された可能性がある。床面には閉塞石を据えるための掘り込み等は確認されなかった。

羨道・玄室部

羨道は玄室に向かって広がり、玄門で幅90cm、高さ１mとなる。玄室は平入りの不整長方形で、奥行きは1.8m、東側壁の長さが1.4m、西側壁の長さが1.7mと北西方向にゆがんでいる。敷石はやや雑だがほぼ玄室内に分布していた。東側奥壁周辺の敷石上には人骨片の分布が見られた。奥壁及び両側壁はほぼ直立して立ち上がり、奥壁側壁とも床面から90cm上位に軒を意識した稜線を持つ。天井形態は家型である。床面は奥壁から羨道まで緩やかに下り、羨門付近で約10cmの段差を持つ。玄室の主軸方向はN－22°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部・羨門部

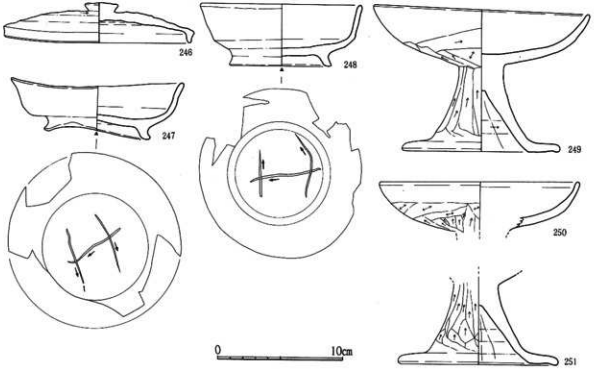
前庭部は主に両くびれ部から北方向で遺物が出土しているが、いずれも原位置を保っていない。

ここから出土したものは坏蓋２点（257・258）、坏身２点（247・248）、高坏１点（253）、埦の蓋１点（252）、長頸壺１点（254）、土師器の高坏３点（249～251）である。南側からは坏蓋１点(246)が出土した。

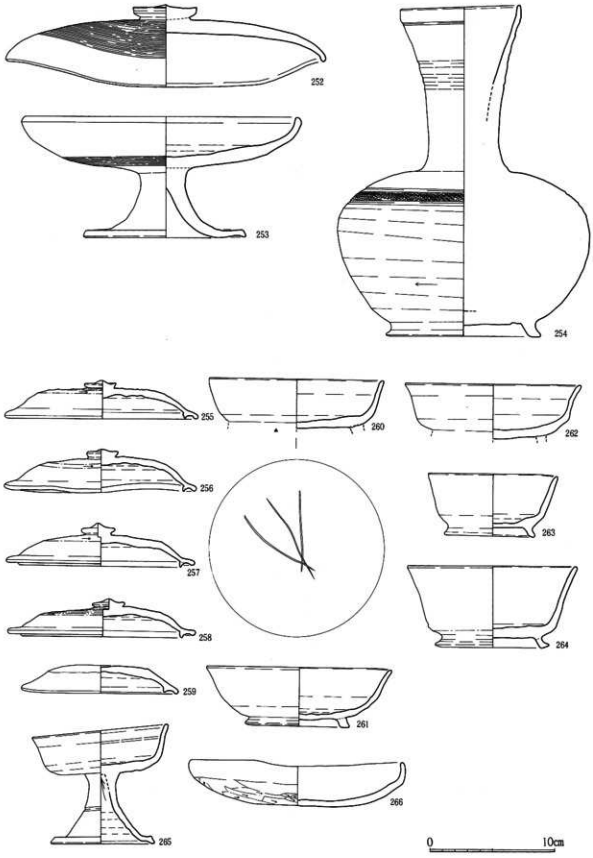
羨門部では主に東肩部周辺で若干浮いた状態で遺物が出土していて、追葬時の祭祀遺物の可能性がある。ここから出土した遺物は坏蓋３点（255・256・259）、坏身３点（260～262）、埦２点（263・264）、高坏１点（265）、土師器の坏身１点（266）である。このうち261と264は重ねた状態で出土した。時期は６世紀末から７世紀後半代の所産と思われる。

羨道・玄室部

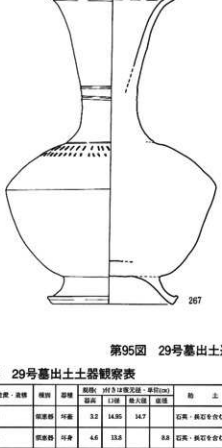
羨道の中ほど、段差が設けられている付近で、長頸壺２点(267・268)、土師器の坏身１点(269)が出土した。８世紀前半代の所産と思われる。



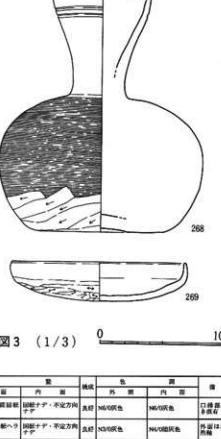
第93図　29号墓出土遺物実測図１　（1/3）



第94図　29号墓出土遺物実測図２　（1/3）



267



268

269

0　10cm

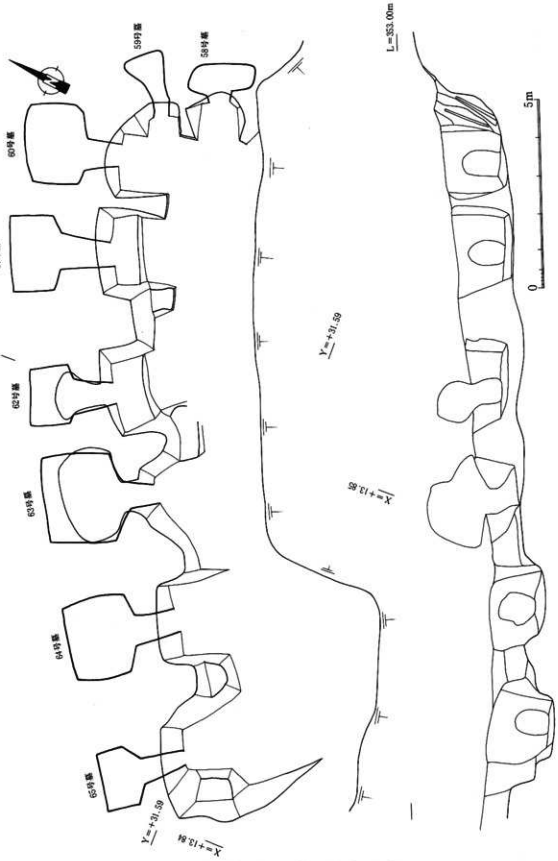
第95図　29号墓出土遺物実測図３　（１/３）

第46表　29号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
246	覆鉢部	須恵器	坏蓋	3.2	14.95	14.7		石英・長石を含む	回転ケズリ・天井部ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N6/0灰色	N6/0灰色	口縁部に重ね焼痕跡	
247	覆鉢部	須恵器	坏身	4.6	13.3		8.8	石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N3/0灰色	N3/0灰色	外面はとんどに自然釉	有
248	テラス 覆鉢部	須恵器	坏身	5	12.8			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ切り離し後ホコナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5Y3/2灰褐色 5Y3/3にぶい赤褐色	5Y3/2灰褐色 5Y3/3にぶい赤褐色		有
249	覆鉢部	土師器	高坏	11.6	17		12.8	石英・長石を含む	回転ナデ・不定方向ヘラケズリ・ミガキヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	5YR7/6橙色 5YR6/6橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	一部黒変有	
250	覆鉢部	土師器	高坏の脚部	4.8上	16			長石を微量含むが細粒	回転ナデ・縦ミガキヘラ状の強ミガキ	回転ナデ・丁寧なナデ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	外面一部黒変有	
251	覆鉢部	土師器	高坏	6.3以上			13.0	石英・長石を含む	回転ナデ・上下方向ヘラケズリ	回転ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色	5YR6/6橙色	脚部のふしぼり痕跡・整形時のなごり痕有	
252	覆鉢部	須恵器	高坏の脚	6.5	(25.6)			石英・長石を含む	回転ナデ・3本1引	回転ナデ・ヘラ状工具痕	良好	N4.5/0灰色 10YR7/2にぶい黄橙色	N4.5/0灰色 10YR7/2にぶい黄橙色		
253	テラス 覆鉢部	須恵器	高坏	9.6	(22.45)		13.4	石英・長石を含む	回転ナデ・3本1引	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N4.5/0灰色 10YR8/2灰白色	N4.5/0灰色 10YR8/2灰白色		
254	テラス	須恵器	長頸壺	26.1	9.5	20.2		石英・長石を多く含む	回転ナデ・ヘラケズリ後回転ナデ・ヘラケズリ底不定方向ナデ・しぼり後回転ナデ	回転ナデ・しぼり後回転ナデ	良好	5YR4/1褐灰色 5YR4/3にぶい赤褐色		櫛描波状文	
255	テラス	須恵器	坏蓋	3	13.3	15.8		石英・長石を多く含む	回転ナデ・滑紙回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	10GY5/1緑灰色	7.5GY6/1緑灰色		
256	テラス	須恵器	坏蓋	3.4	13.3	15.7		石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5GY6/1オリーブ灰色	N6/0灰色	自然釉有	
257	遺構面	須恵器	坏蓋	3.4	12.9	15.4		石英・長石を多量に含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5GY1緑灰色 5GY1/2暗緑灰色	2.5GY5/1オリーブ灰色		
258	遺構面	須恵器	坏蓋	3.1	12.9	15.2		石英・長石を多量に含む	回転ナデ・滑紙回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色		
259	遺構面	須恵器	坏蓋	2.2	16.15		(11.8)	石英・長石を少量含むが細粒	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N5/0灰色	N5/0灰色	一部外面炭かぶり	
260	遺構面	須恵器	坏身	4	13.7			石英・長石を含む	回転ナデ・ヘラ切り離し後ホコナデ	回転ナデ・不定方向ナデ	不良 色調	2.5Y5/3にぶい赤褐色 5Y7/6橙色	10YR6.5/1褐灰色	焼台がはげている	有
261	遺構面	須恵器	坏身	4.7	14.8		8.4	石英・長石を含む	回転ナデ・滑紙回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5GY5/1緑灰色	2.5GY5/1オリーブ灰色		
262	遺構面	須恵器	坏身	4.3	14		9.2	1～2mm大の石英を多く含む・長石を多く含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	2.5GY7/1オリーブ灰色 7.5GY3/1褐緑灰色	2.5GY6/1オリーブ灰色	焼台がはげている 底かぶり有	
263	遺構面	須恵器	鉢	5	10.35		7.4	石英・長石を多量に含む	回転ナデ・ヘラ切りはなし	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	5PB6/1青灰色 5PB6/1青灰色	5PB5/1青灰色	底かぶり有	
264	遺構面	須恵器	鉢	6.49	13.6		9.1	石英・長石を含む	回転ナデ・滑紙回転ヘラケズリ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	N3/0灰色 5PB6/1青灰色	N6/0灰色 5YR7/1灰白色	底かぶり有	
265	遺構面	須恵器	高坏	9.5	10.85		8.4	石英・長石を含むが細粒	回転ナデ・回転ヘラ切り離し後回転ナデ	回転ナデ・一定方向ナデ	良好	7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR3/1褐色 2.5YY1灰白色	7.5YR6/4にぶい橙色	しぼり痕有	
266	遺構面	土師器	坏身	3.5	17			石英・長石を含む	回転ナデ・縦ミガキヘラ状	回転ナデ・縦ミガキヘラナデ（丁寧な）	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		
267	遺構	須恵器	長頸壺	24.8	10.4	16.8		石英・長石を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ・しぼり後回転ナデ	しぼり後回転ナデ	良好	5BG7/1青緑灰色 N3/0暗灰色		焼点数 一部炭かぶり有	
268	遺構	須恵器	長頸壺	19.2	7.9	16.2		石英・長石を含む	ヘラケズリ後ナデ・3本引・縦ミガキヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	良好	N4/0灰色			
269	遺構	土師器	坏身	3.1	13.9			微細粒を含むが細粒	回転ナデ・縦ミガキヘラ状	回転ナデ・不定方向ナデ	良好	7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色		

8群（第96図）

8群は調査区の西端、標高350m付近にある。構成する横穴墓は8基（58～65号墓）で、東西約17mのテラスを共有しながらそれぞれの横穴墓が前庭部を持つ。このうち62・63号墓は羨門部～玄室にかけて天井部の崩落がみられるが、他の横穴墓は比較的残りが良い。



第96図　8群遺構配置図及び立面図　（1/100）

8基の横穴墓はさらに小支群に分れる。西側の63～65号墓、東側の60～62号墓、東端の58～59号墓の3支群である。西側の3基は最初に63号墓が構築され、その後64→65号墓へと展開したと考える。東側の3基は、最初に61号墓が構築され、その後60・62号墓へと展開していく。東端の2基は最後に、東側壁を利用して構築された横穴墓である。

58号墓（第97図）

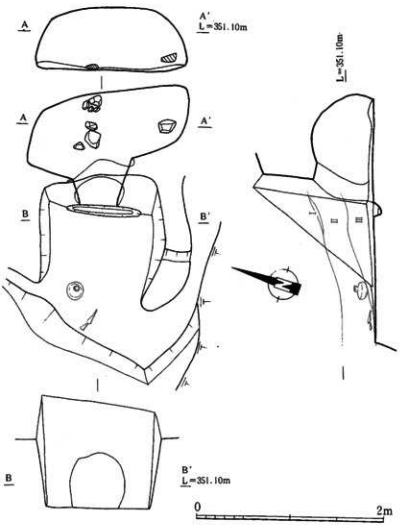
概要

8群テラスの南東端に位置する横穴墓で、羨門付近の標高は350.8mである。羨門上部の一部が崩落しているが、比較的原状を良く保っている。

規模・構造

前庭部

前庭部はテラス先端の地山を削り出し、ほぼ平坦に形成している。テラスとは僅かな段差をもつ。長さは1.4m、幅1.1mである。土層観察ではⅠ層が黒灰色砂質土層で上部からの崩落土、Ⅱ層が茶灰色砂質土層で下面から平瓶・鉄鏃が出土している。羨門の上半分を覆っており、横土層の観察結果から追葬時の埋土と思われる。Ⅲ層は黒灰色砂質土層で、羨門のほぼ中位までを覆っており、初葬埋土と考えられる。土層観察の結果、少なくとも1回の追葬が認められる。



第97図　58号墓実測図　（1/40）

羨門部

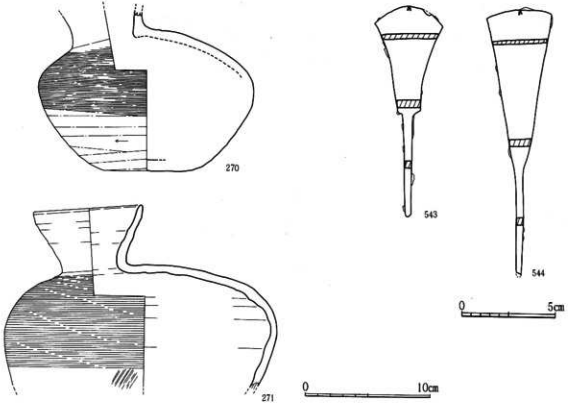
羨門は幅0.5m、高さ0.65mで一部崩落している。前庭部とは段差を持たないが、床面には閉塞石を据えたと思われる深さ10cm程の掘り込みがみられる。なお閉塞石等は残っていない。

羨道・玄室部

羨道は長さ0.2～0.6m、玄門幅0.7m、高さ0.6mで、玄室に向かって広くなる。床面はほぼ平坦で、前庭部に向かって緩やかな下り勾配となる。玄室の平面形は平入り不整長方形で、奥行き0.8m、幅1.6～1.7m、高さ0.6mである。玄室からは径10～30cm前後の灰岩角礫が10数個出土した。この石の配列からみて敷石は追葬時に掻き出されたと思われる。床面には排水溝等の施設は認められない。天井形態はドーム型で、壁面は内湾しながら立ち上がる。主軸方向はN－72°－Eである。

遺物の出土状況

前庭部後方において、平瓶1点（270）と鉄鏃2点が出土した。また、埋土中からも平瓶が破片で出土した。追葬時の遺物と思われる。



第98図　58号墓出土遺物実測図　（1/3・1/2）

第47表　58号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規模（）付きは復元値・単位cm 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ハケ記号
270	チラス	須恵器	平瓶	12.7±1		17.2		石英・長石を含む	回転ナデ・連続回転ヘラケズリ・カキ目	回転ナデ	良好	2.5GY5/1オリーブ灰色 N5.0/灰色	2.5GY5/1オリーブ灰色 N5.0/灰色		
271	チラス	須恵器	平瓶	不明	8.7	(21.5)	不明	石英・長石を含む	平行タタキ・カキ目・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	タタキ痕形の痕跡残る	

第48表　58号墓出土鉄器計測表　(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
543	前庭部	鉄鏃	11.2	5.3	3.6	0.4	0.3	圭頭斧箭式
544	前庭部	鉄鏃	13.9	7.8	3.4	0.4	0.2	圭頭斧箭式

59号墓（第99図）

概要

59号墓は58号墓の北隣に位置する横穴墓で、原状を良く保っている。羨門付近の標高は351mである。玄室の形態から８群中では最後に構築された横穴墓である。

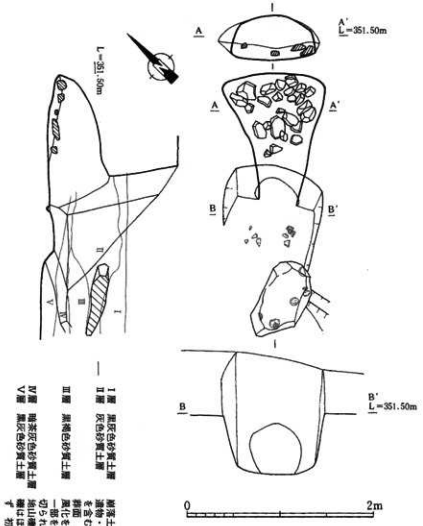
規模・構造

前庭部

前庭部は58号墓と同様８群の東壁を削り出して独自の前庭部を形成している。テラスとは約10cmの段差をもつ。長さ0.3～0.5m、幅0.85mである。土層観察では、Ⅰ層が崩落土、Ⅱ層が灰色砂質土で層中に閉塞石や遺物を含んでいる。Ⅲ層は黒褐色砂質土層で風化を受けているが、羨門付近で追葬による削平を受けている。Ⅳ層は暗茶灰色砂質土層、Ⅴ層は黒灰色砂質土で、前庭部床面の全面に堆積している。土層観察の結果、Ⅲ～Ⅴ層が初層埋土で、Ⅱ層が追葬埋土と考える。

羨門部

羨門は立ち上がり部幅0.45m、高さ0.55mである。閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の１枚石を使用しているが、前庭部後方のⅡ層中から出土した。追葬によって現在の位置に引き倒したと考える。



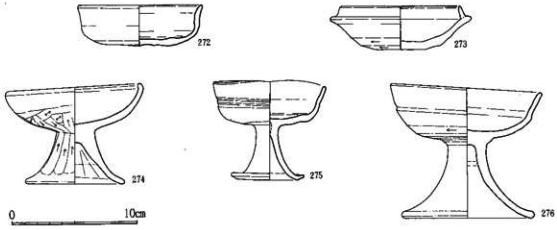
第99図　59号墓実測図　（1/40）

羨道・玄室部

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、いわゆる不整方形型の玄室形態をとっている。このため羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は無袖撥型の様相を呈し、長さ1.35m、奥壁寄り幅1.1m、中央で0.85m、高さ0.6mである。床面奥壁寄りに凝灰岩角礫を配置している。玄室の主軸はN－46°－Eである。

遺物の出土状況

前庭部で坏身２点、須恵器高坏２点、土師器高坏１点が出土した。274は前庭部中央付近の第Ⅱ層中から出土した。他は閉塞石直下の出土で第Ⅲ層中である。出土状況から、原位置にあるものではなく、当横穴墓に直接関わる遺物でない可能性が高い。



第100図　59号墓出土遺物実測図　（1/3）

第49表　59号墓出土土器観察表

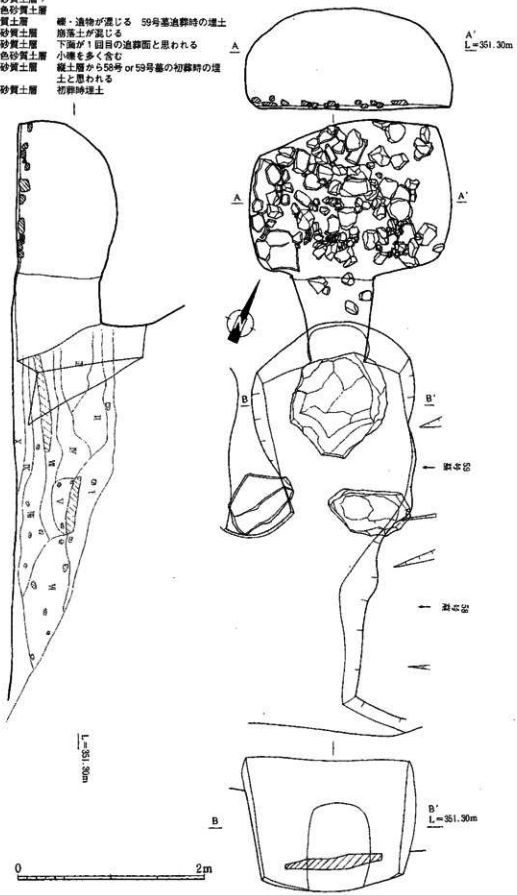
番号	出土位置・遺構	種別	器種	器形（単位：cm）口径	底径	最大径	器高	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
272	前庭部	須恵器	坏身	3.2	9.9			精緻	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	10B5/3赤紫色	10B5/3赤紫色		
273	前庭部	須恵器	坏身	3.4	9.6	11.2	4.5	石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色		
274	前庭部	土師器	高坏	7.8	10.5		8.6	石英・長石・雲母を含む砂粒質	脚部ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ方向ヘラケズリ・丁寧なナデ（末広とナデ六ヘラケズリ）	回転ナデ、丁寧なナデ・ヘラケズリ	良好	2.5YR5/6橙色	5YR6/6橙色 7.5YR7/6橙色	しぼり痕有	
275	前庭部	須恵器	高坏	7.9	10.5		8.0	胎土は良を含むが精緻	回転ヨコナデ	回転ナデ	良好	N3/0黒灰色	N3/0黒灰色		
276	前庭部	須恵器	高坏	10.65	12.1		10.8	石英・長石を含む	回転ナデ・底部回転ヘラケズリ	回転ナデ・脚部接不定方向ナデ・ヘラ状工具で刻目ナデ	硬質	2.5Y5/2黄灰色 2.5Y5/1黒色	2.5Y5/2黄灰色 5Y5/1黒色		

60号墓（第101図）

概要

60号墓は59号墓の北に位置し、羨門付近の標高は350.6mである。羨門～玄室の崩落もなく、ほぼ原状を留めている。また前庭部の埋土の堆積状況も良好で、59号墓との切り合い関係も明確に観察できた。

Ⅰ層　黒灰色砂質土層　崩落土を含む
Ⅱ層　茶灰色砂質土層
Ⅲ層　黒褐色砂質土層　下面が２回目の追葬面と思われる
Ⅳ層　暗茶灰色砂質土層
Ⅴ層　灰色砂質土層　礫・遺物が混じる　59号墓追葬時の埋土
Ⅵ層　茶灰色砂質土層　崩落土が混じる
Ⅶ層　黒褐色砂質土層　下面が１回目の追葬面と思われる
Ⅷ層　暗茶灰色砂質土層　小礫を多く含む
Ⅸ層　黒灰色砂質土層　縄土層から58号or59号墓の初葬時の埋土と思われる
Ⅹ層　茶灰色砂質土層　初葬時埋土



第101図　60号墓実測図　(1/40)

規模・構造

前庭部

テラス先端に独自の前庭部を持ち、長さは1.6m、幅1.45mである。床面はほぼ平坦でテラスへと延びる。基壇等の施設は持たない。土層観察ではⅡ・Ⅲ層はⅣ層を切り込んで堆積している事から最終の追葬埋土。Ⅶ層中に閉塞石が倒れた状態で出土している事からⅦ層も追葬埋土であろう。Ⅹ層は初層埋土である。Ⅰ層は崩落埋土、Ⅴ層は59号墓の埋土で上部に位置する閉塞石は59号墓のものである。Ⅵ層は58号墓の埋土である。Ⅷ・Ⅸ層は60号墓の初層埋土とも思われたが、58号墓あるいは59号墓の初層埋土の可能性も考えられる。土層観察の結果、当横穴墓では少なくとも2回の追葬が行われたと考える。

羨門部

羨門は立ち上がり部幅0.7m、高さ0.95mで、壁面の崩落はほとんど見られない。羨門と前庭部の境には明確な段差はみられない。閉塞施設は羨門前面で凝灰岩1枚石が出土したが、Ⅷ層上面に倒れた状態での検出であった。これは追葬時に倒されたと思われる。なお閉塞石を据える掘り込みは確認できなかった。

羨道・玄室部

羨道は長さ0.9m、玄門部幅0.9m、高さ0.9mで、羨門から玄門に向かって緩やかに開く。玄室の平面形態は平入り隅丸長方形で、西側の61号墓を避けるように東方向へ展開している。奥行き1.05m、中央幅2.15mである。玄室～羨道にかけての床面には径10～30cm前後の凝灰岩と一部安山岩扁平石を疎らに敷いている。玄室床面はほぼ平坦で、玄門付近で僅かに下降し羨道部へ延びる。天井形態はドーム形を呈する。主軸はN－25°－Wである。

遺物の出土状況

玄室・前庭部とも遺物は出土しなかった。

61号墓（第102図）

概要

60号墓の西に位置し、羨門部での標高は350.6mである。玄室・前庭部とも非常に残りが良い。当横穴墓は8群中さらに小支群に分けた東側グループの中心的横穴墓であり、この後左右の横穴墓が形成されていく。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ1.7m、幅1.85mであるが、羨門部前面に長さ0.7m、幅1.85mのフラットな面を造り出し、その後約20cmの段落ちを形成し、テラス方向へと延びていく2段構造をもつ横穴墓である。

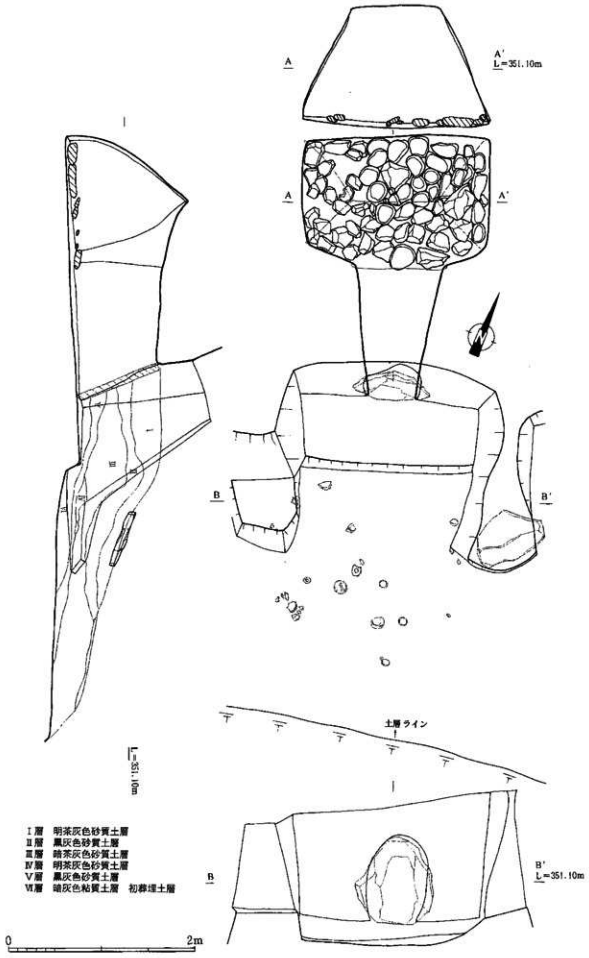
また西側肩部には長さ約50cm、幅約65cmのほぼ長方形の基壇施設を持つ。基壇上からは数点の土器片が出土した。前庭部での埋土は6層確認された。Ⅱ・Ⅴ層に風化現象がみられる。いずれの層も切り合いや攪乱等の痕跡はなく、追葬ラインの確認はできなかった。閉塞石も原位置を保っていると思われ、追葬は無いと判断した。

羨門部

立ち上がり部の幅0.6m、高さ0.95mで約65°の傾斜でほぼ直線状に立ち上がる。閉塞施設は安山岩板石を閉塞石として使用していて、床面直上から羨門部をほぼ隙間なく覆う。長さ90cm、最大幅80cm、厚さ10cm前後である。

羨道・玄室部

羨道の長さ1.35m、玄門部での幅1.0m、玄門の高さ0.95mで、玄室に向かって緩やかに開く。

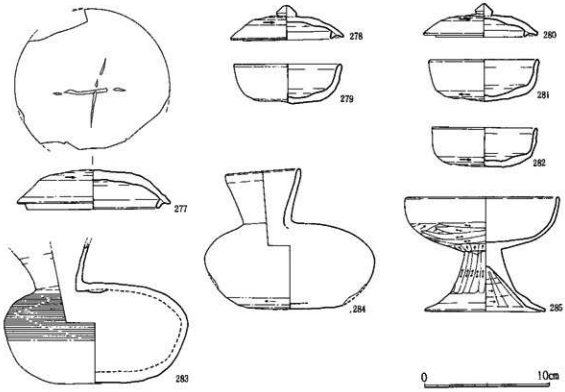


第102図　61号墓実測図　(1/40)

玄室の平面形態は平入り長方形の様相を呈し、長さ1.4m、幅1.95m、高さ1.3mである。玄室床面には径10～30cm前後の安山岩を主体とした敷石を行っている。奥壁・側壁ともほぼ直線状に内傾しながら立ち上がる。天井形態は家型で、四隅から天井に向かって稜線がのびる。主軸はN－23°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部からテラスにかけてこの横穴墓に属すると思われる遺物が出土している。出土状況から一部は西側基壇から落ちたと思われる。出土した遺物は坏のセット2点、坏蓋1点、坏身1点、平瓶2点、土師器高坏1点である。土器からみて当横穴墓は概ね7世紀中頃に構築されたと考える。



第103図　61号墓出土遺物実測図　(1/3)

第50表　61号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	最大径	底径	特記	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
277	テラス	須恵器	坏蓋	3.1	10.4	12.2			精緻	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y5/1黒灰色	7.5Y5/1黒灰色	自然釉有り	有
278	テラス	須恵器	坏蓋	2.7	7.9	9.0		長石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・回転ヨコナデ・指ナデ		良好	5Y7/2灰白色	5Y7/2灰白色	つまみ有り	
279	テラス	須恵器	坏身	3.1	8.8			石英・長石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・回転ヨコナデ・指ナデ		良好	5Y7/2灰白色	5Y7/2灰白色		
280	テラス	須恵器	坏蓋	2.6	7.1	8.1		長石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヨコナデ	回転ヨコナデ・回転ヨコナデ・指ナデ		良好	5Y6/1青灰色	5Y6/1青灰色	つまみ有り	
281	テラス	須恵器	坏身	3.3	8.8			石英・長石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ		良好	5Y6/1青灰色	5Y6/1青灰色		

282	テラス	底径部	平底	2.1	6.4～8.8			赤石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	
283	テラス	底径部	平底	11.0+α	不明	14.5	4.9	石英含む	回転ヨコナデ・ケズリ	回転ヨコナデ	良好	10YR2/3暗褐黒色	10YR2/3暗褐黒褐色	
284	テラス	底径部	平底	11.1	3.8	13.6		石英・長石・角閃石を含む	回転ケズリ・高速回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	2.5Y7/3浅黄色 2.5Y6/1黄灰色	2.5Y7/3浅黄色 2.5Y6/1黄灰色	
285	常滑焼テラス	口縁部	直口	9.1	12		9.8	赤色粒子・金雲母・微砂粒を含む小礫含	回転ケズリ・ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ・ケズリ・ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・リング状ハケ・ヘラケズリ	良好	5YR6/6橙色	5YR5/6赤色	こぼれ痕有

62号墓（第104図）

概要

61号墓の西に位置し、羨門部での標高は350.6mである。羨道全域と玄室の一部は崩落して残存しない。当横穴墓は60・61号墓と小支群を形成し、61号墓造営後に造られた横穴墓である。

規模・構造

前庭部

前庭部は、羨門部前面に長さ0.7m、幅1.85mのフラットな面を造り出している。テラスとは約5㎝の段差をもつ。また西側肩部には長さ約0.6m、幅約1.1mのほぼ長方形の基壇施設を持つ。この基壇は構築状態からみて63号墓の基壇として造られた可能性もある。基壇上からは甕の破片が出土した。前庭部での堆土は7層確認された。Ⅰ層は現表土、Ⅱ層は崩落土、Ⅲ層は黒褐色砂質土層で、Ⅴ層とともに追葬時の埋土の可能性をもつ。Ⅵ層は黒灰色砂質土層で風化している。Ⅶ層とともに初葬時の埋土である。

羨門部

立ち上がり部の幅0.7m、高さは崩落のため不明である。閉塞施設は安山岩板石2枚を閉塞石として使用していて、左右の隙間を甕の破片で覆っている。床面には閉塞石を据える掘り込み等はみられなかった。

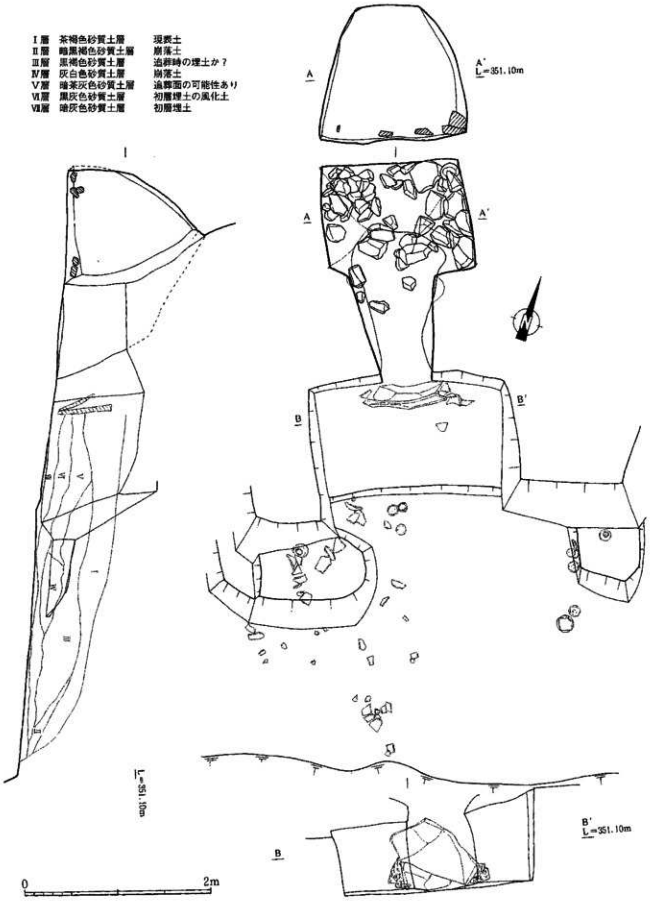
羨道・玄室部

羨道は長さ1.1m、玄門部での幅1.0m、高さは不明である。羨道は玄室に向かって緩やかに開き、床面は緩やかに上昇する。

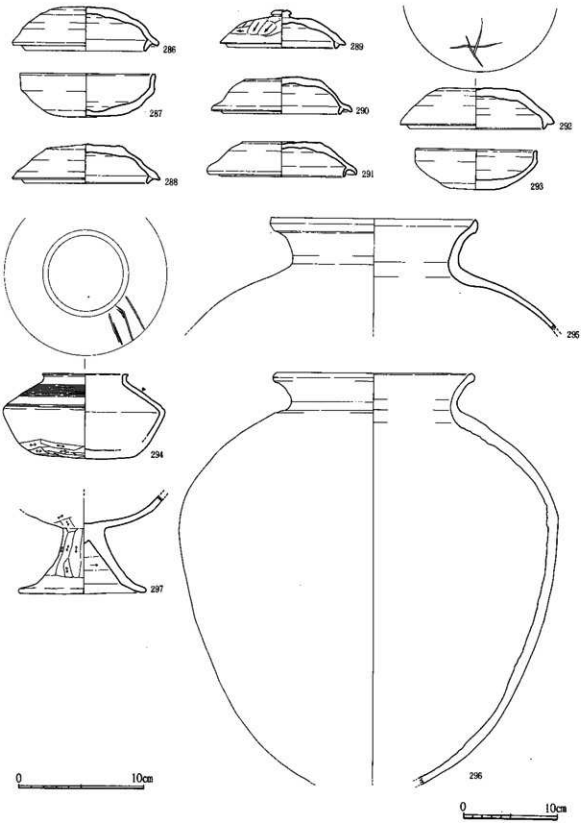
玄室の平面形態は平入り長方形の様相を呈し、長さ1.25m、中央幅1.6m、高さ1.4mである。床面には径10～40㎝前後の安山岩を乱雑に敷いて礫床としている。奥壁は床から70㎝の位置までほぼ垂直に立ち上がり、その後内湾しながら天井部へと延びる。両側壁は緩やかに内湾しながら天井へと延びる。天井形態は家型で、四隅から天井に向かって稜線がのびる。主軸はN－19°－Wである。

遺物の出土状況

遺物は前庭部・テラス・基壇からほぼ一括して出土している。東側基壇下方からは坏蓋3点（288・291・292）と坏身1点（293）、基壇やや南で坏蓋1点（290）が出土した。これらの遺物は出土状況からみて東側基壇から落ちたと思われ、61号墓の埋葬遺物の可能性も持つ。前庭部とテラスの境付近からは坏のセット1点（286・287）と坏蓋1点（289）が出土した。西側基壇上からは完形の短頸壺1点（294）が出土した。この他に甕2点（295・296）が破砕された状態で西側基壇上やテラス・閉塞施設周辺から、さらに埋土中から土師器高坏1点（297）が出土した。土器からみて当横穴墓は概ね7世紀中頃に構築されたと考える。



第104図　62号墓実測図　(1/40)



第105図　62号墓出土遺物実測図　（1/3・1/4）

第51表　62号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
286	前庭部	弥生土器	甕	3.4	9.5	11.6		雲母	回転ヨコナデ・写真ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5YR7/2明白色	2.5YR7/2明白色		
287	東側部	弥生土器	甕	3.4	10.7			石英・長石含む	回転ヨコナデ・底部ヘラキリ・ナデ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5YR6/1黄灰色	5YR6/1黄灰色	内面に炭化米付着	
288	東側部	弥生土器	甕	3.1	9.8	13.7		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	7.5Y3/1黒褐色	7.5Y3/1黒褐色		
289	前庭部	弥生土器	甕	2.45	8.6	10.0		雲母	回転ヨコナデ・ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒褐色	7.5Y3/1黒褐色	内面煤付ツタル化	
290	前庭部	弥生土器	甕	2.9	9.3	11.2		石英・長石含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5YR6/1黄灰色	5YR6/1黄灰色		
291	東側部	弥生土器	甕	3.7	9.9	11.9		雲母	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5YR7/2明白色	5YR7/2明白色		
292	東側部	弥生土器	甕	3.2	10.6	12.3		石英含む	回転ヨコナデ・ヘラキリ・ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5G5/1緑灰色	5G5/1緑灰色		有
293	東側部	弥生土器	甕	3.15	9.8			石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
294	前庭部	弥生土器	壺頸部	6.7	6.1	12.9		石英・長石を少量含むが細緻	回転ナデ・縦之ハケケズラ・ハケ状痕跡・ヘラケズリ・ヘラタタキ	回転ナデ	良好	7.5YR7/1灰白色 7.5YR7/2明色 7.5YR7/6橙色	7.5YR6/4にぶい黄橙色 7.5YR5/4にぶい橙色		有
295	前庭部	弥生土器	壺		21.7			砂粒少ない	平行タタキ・ホキ目・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・同心円タテキ	良好	黒灰色	黒灰色	内面煤付かる	
296	前庭部	弥生土器	壺	43+α	31.7	40.3		石英	平行タタキ・ホキ目・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・同心円タテキ	良好	暗青灰色～黒色	暗青灰色～黒色		
297	前庭部	土師器	高杯	7.65上			10.5	赤色粒子・白色粒子・金雲母・角閃石・微粒子を含むが細緻	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・下部タテナデ・回転ヘラケズリ	良好	7.5YR7/6橙色	7.5YR7/6橙色	L字状痕有り	

63号墓（第106図）

概要

8群の中央に位置し、羨門部での標高は350.1mである。羨道全域と玄室の大部分が崩落のため残存しない。当墓は8群の中心的横穴墓であり、当群中では最初に構築された横穴墓である。

また、64・65号墓とは小支群を形成していて、63号墓→64号墓→65号墓の順に構築されている。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ1～1.5m、幅1.5mで、羨門部前面にほぼ方形のフラットな面を造り出している。

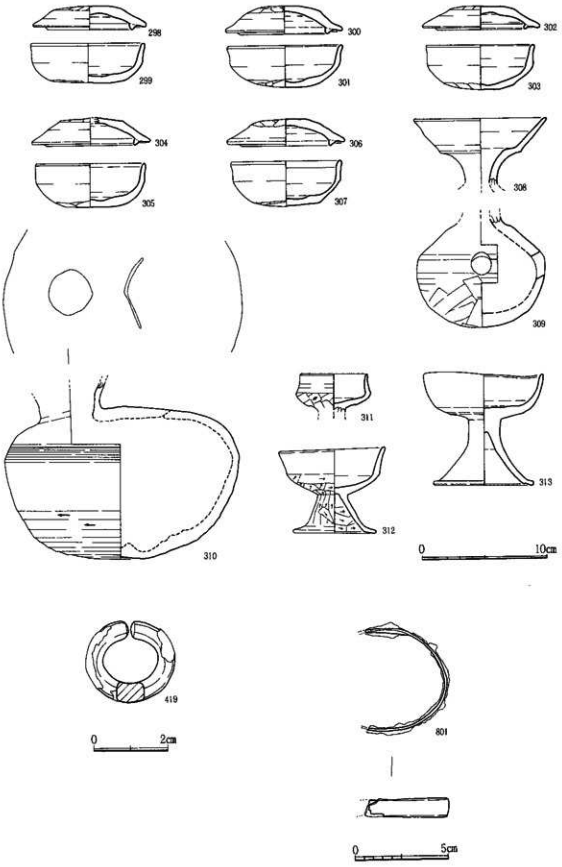
この横穴墓は東西両肩部に長さ約0.6m、幅約1.1mのほぼ長方形の基壇施設を持つが、東側基壇は62号墓と共有していると考える。埋土は6層確認された。玄室内の様相から考えて、Ⅴ・Ⅵ層は初層時の埋土、Ⅲ・Ⅳ層は最初の追葬時の埋土で一部削平を受けている。Ⅰ・Ⅱ層はそれぞれその後の追葬時の埋土と考える。

羨門部

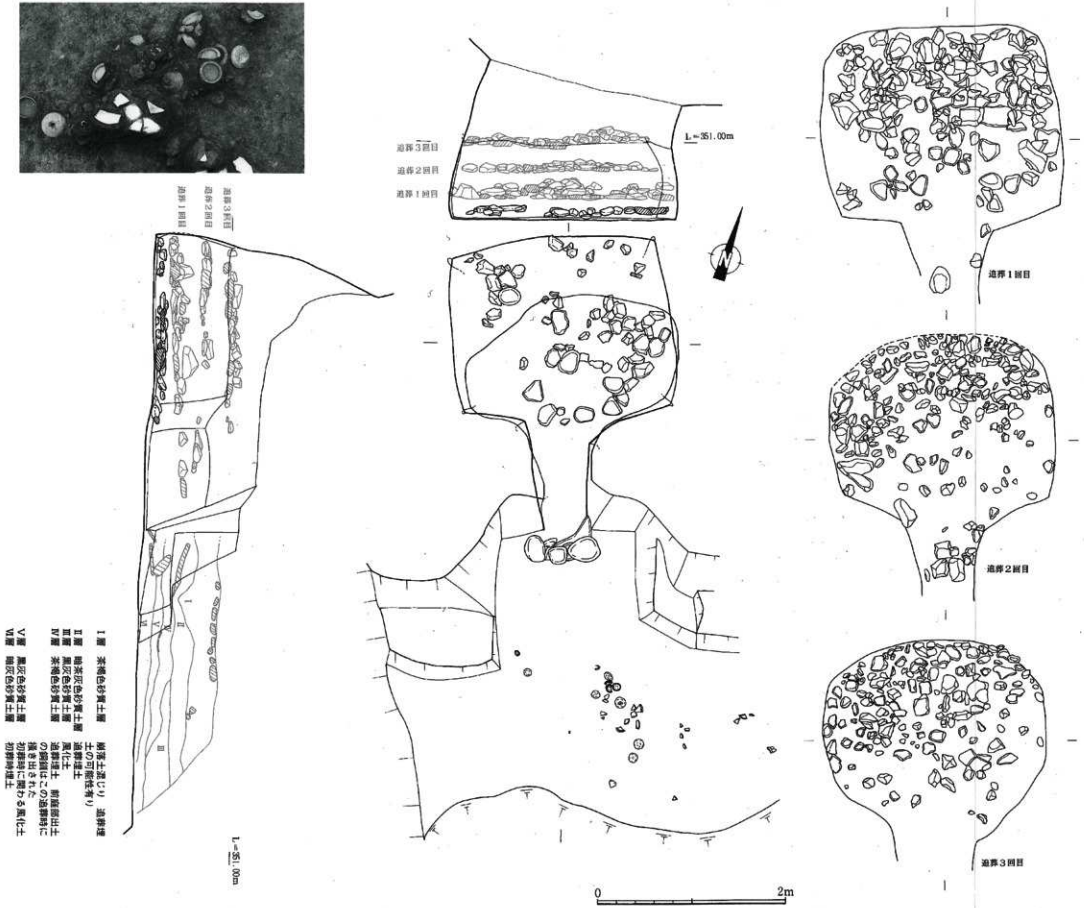
立ち上がり部の幅0.5mで高さは崩落のため不明である。羨門部前面に閉塞施設が一部残っていた。使用石材は安山岩板石と扁平礫・円礫で、羨門の下部を覆っていた。床面には閉塞石を据える掘り込み等はみられなかった。

羨道・玄室部

羨道は長さ1.15m、玄門部での幅0.9m、高さは不明である。羨道は玄室に向かって緩やかに開き、床面は玄門と玄室の境付近で緩やかに上昇する。



第106図　63号墓出土遺物実測図　（1/3・1/2・実大）



第107図　63号墓実測図　（1/40）

玄室の平面形態は隅丸方形の様相を呈し、長さ2.1m、幅2.3m前後、高さは崩落のため不明である。玄室内からは4面の床面が検出された。初層時の床面には径10～40cm前後の安山岩を乱雑に敷いて礫床としている。敷石上面の標高は350.30m前後である。その後1回目の追葬時に初層床面に約20cmの埋土を行い、敷石を敷き、追葬床面を形成している。2回目の追葬時にはこの上面に20cm前後の埋土・敷石を行い、2度目の追葬床面を形成している。さらにこの上面に20cm前後の埋土と敷石を行い、3回目の追葬床面を形成している。この結果、当横穴墓は少なくとも4回の埋葬が行われている。壁面は奥壁・側壁とも内湾しながら天井部へと延びる。天井形態は崩落のため不明であるが、四隅からは天井に向かって稜線がのびている。

遺物の出土状況

遺物は前庭部からテラス部にかけて一括して出土した。初層埋土中に含まれ、床面から5～10cm程度浮いた状態で出土した。出土遺物は坏5セット、平瓶1点、鏃1点、土師器高坏3点である。また、Ⅳ層追葬埋土中からは耳環1点、銅釧1点が出土した。この2点は追葬時に玄室内から掻き出されたと考える。

第52表　63号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	器種	器種	規模(括弧は復原値・単位cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ハケ 記号
298	テラス	横穴墓	坏蓋	1.8	6.8	9.0		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5Y6/1青灰色	5Y6/1青灰色		
299	テラス	横穴墓	坏身	3.1	9.1			石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色		
300	テラス	横穴墓	坏蓋	2.2	7.0	9.2		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
301	テラス	横穴墓	坏身	3.3	8.3			石英・黒色粒子	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
302	テラス	横穴墓	坏蓋	1.8	7.1	9.4		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色	自然釉あり	
303	テラス	横穴墓	坏身	3.5	8.6			石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色	自然釉あり	
304	テラス	横穴墓	坏蓋	(2.2)	(7.1)	(9.8)		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
305	テラス	横穴墓	坏身	3.4	8.6		3.8	黒色粒子含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色		
306	テラス	横穴墓	坏蓋	2.1	7.2	9.4		黒色粒子含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色	自然釉あり	
307	テラス	横穴墓	坏身	3.5	8.9			石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y3/1黒灰色	7.5Y3/1黒灰色	自然釉あり	
308	テラス	須恵器	鏃		10.5			石英含む	回転ナデ	回転ナデ	良好	5PB6/1青灰色	5PB5/1青灰色	無数付着に打ち込み鏃状	
309	テラス	須恵器	鏃			10.2		石英含む	回転ナデ・回転ヘラキリ・手持ちヘラケズリ	不明	良好	N7/0灰白色	N7/0灰白色		
310	テラス	須恵器	平瓶	13.7+α	不明	18.9	4.0	石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・内面ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色		有
312	テラス	土師器	高坏	6.8	8.3		6.8	角閃石・赤黒色・赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む多孔質	回転ヨコナデ・ヨコ方向ヘラケズリ・ナデ及び角ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヨコ方向ヘラケズリ	良好	5YR6/8橙色	5YR6/8橙色	しぼり痕有	
313	テラス	須恵器	高坏	8.9	9.6		8.0	石英・長石を含む少精緻	回転ナデ	回転ナデ	良好	10R5/1赤灰色	10R5/1赤灰色	内面に炭か.ぶり有	
316	テラス	土師器	高坏		8.4			精緻	ヨコナデ・下位ヘラケズリ	ヨコナデ・指ナデ	補彩	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		

第53表　63号墓出土耳環・銅鈴計測表

整理番号	出土地	作　り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備　考
419	テラス	銅地金張	2.2×2.2	0.8×0.5	7.9	1/3剥落
801	テラス	銅鈴	(6.5)×5.5	0.9×0.1		1/3欠　テラス部で出土

64号墓（第108図）

概要

63号墓の西に位置し、64号墓の後に構築された横穴墓で、羨門部での標高は350.6mである。羨門部天井の一部が崩落のため残存しないが比較的残りの良い横穴墓である。当横穴墓は63・65号墓と小支群を形成している。

規模・構造

前庭部

前庭部は、羨門部前面に長さ1.4m、幅1.9mのフラットな面を造り出して単独の前庭部を形成している。前庭部から延びるテラスは63号墓テラスより約0.4m低く、65号墓テラスからは約0.4m高い位置にあり、64号墓独自の墓域を形成している。羨門部からの長さは4.2mである。前庭部左肩部には長さ0.4m、幅0.6mのほぼ長方形の基壇施設をもつが、基壇上及び周辺からは遺物の出土はなかった。前庭部での埋土は7層確認された。Ⅰ～Ⅲ層は二次堆積土、Ⅳ・Ⅴ層は追葬埋土で、Ⅵ・Ⅶ層を切り込んでいる。Ⅵ・Ⅶ層は初葬埋土でⅦ層は風化しているが、両層とも追葬時に切り込まれている。この結果、最低1回の追葬が行われたと考える。

羨門部

立ち上がり部の幅0.65m、高さは0.9mである。閉塞施設は薄手の安山岩板石2枚を閉塞石として使用しており、羨門を隙間なく覆っている。床面には閉塞石を据える掘り込み等はみられなかった。

羨道・玄室部

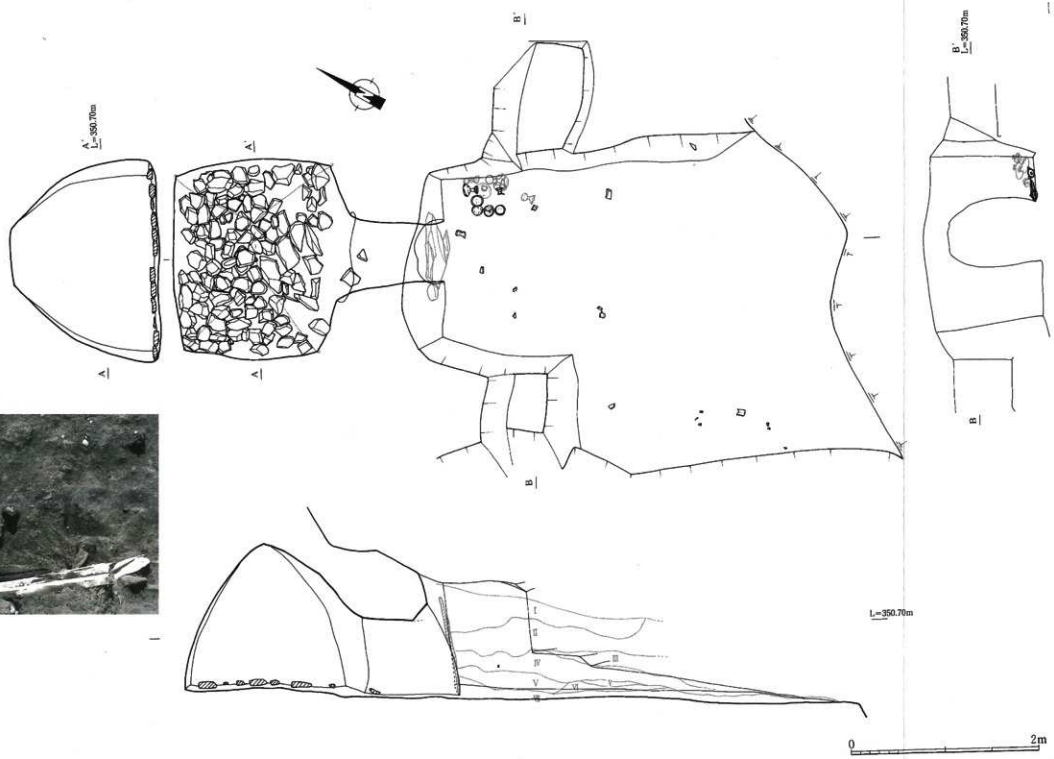
羨道は長さ1.1m、玄門部での高さ0.85m、幅0.95mで玄室に向ってやや開き気味で、緩やかに上昇する。羨道床面はほぼ平坦で玄室と玄門の境付近に僅かな窪みをもつ。

玄室の平面形態は平入りの胴張り長方形で、長さ1.9m、中央での幅2.1m、高さは最大で1.5mである。床面には10～20cm前後の安山岩と凝灰岩礫を敷き詰めている。奥壁・側壁とも内湾しながら立ち上がる。天井形態は家型で、四隅から天井に向かって稜線がのびる。

主軸はN－31°－Wである。

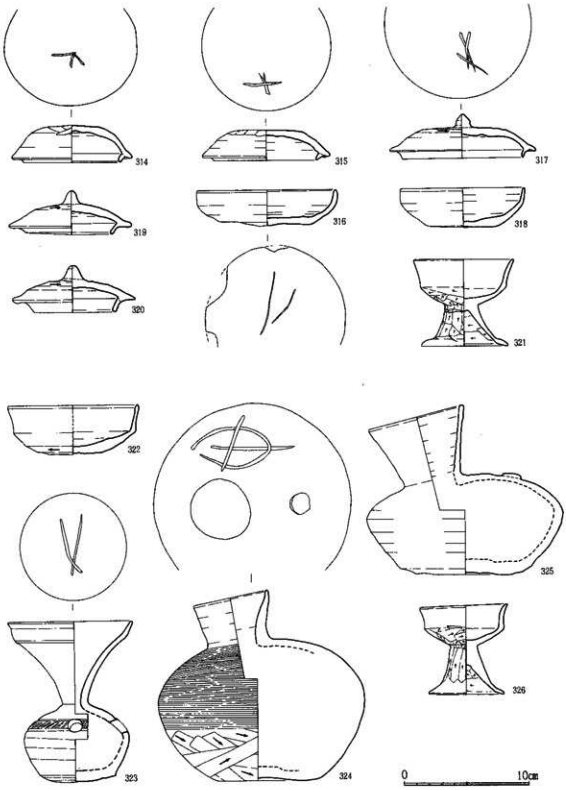
遺物の出土状況

副葬品は前庭部右肩部分から上下2群に別れて一括出土した。下部の一括遺物はⅦ層床面直上からの出土（314～321）で、坏蓋5点、坏身2点、土師器高坏2点（内1点は実測不可能）である。上部の一括遺物はⅤ層からの出土（322～326）で坏身1点、甕1点、平瓶2点、土師器高坏1点である。この2群については明らかにこの横穴墓において行われた葬送儀礼に伴う遺物である。遺物の出土状況から下部の1群は初葬時に、上部の1群は追葬時にそれぞれ伴う遺物であると思われる。出土遺物は7世紀中頃から後半の所産であろう。



Ⅰ層　茶褐色砂質土層　崩落土
Ⅱ層　黒灰色砂質土層　崩落土
Ⅲ層　黒褐色砂質土層　小礫含む崩落土
Ⅳ層　暗黒灰色砂質土層　追葬埋土
Ⅴ層　暗茶灰色砂質土層　風化を受ける　Ⅵ層と同じ
Ⅵ層　黒灰色砂質土層　初葬後の風化土
Ⅶ層　暗灰色砂質土層　初葬時埋土

第108図　64号墓実測図　（1/40）



第109図　64号墓出土遺物実測図　（1/3）

第54表　64号墓出土土器観察表

番号	出土位置・器種	種別	器種	開口部（胴部径・最大径・底径）(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
314	前庭部	弥生系	甕	2.9	7.6	9.6		石英含む	刷毛ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5PR5/1赤灰色	5PR5/1赤灰色		有
315	前庭部	弥生系	甕	2.4	8.3	10.2		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・手持ち ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	7.5YR4/1黒灰色	7.5YR4/1黒灰色		有
316	前庭部	弥生系	甕	2.8	11.2		7.2	黒色砂粒・石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	7.5YR4/1黒灰色	7.5YR4/1黒灰色	自然釉有り	有
317	前庭部	弥生系	甕	3.5	9.5	11.7		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヨコナデ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5YR5/3にぶい赤褐色	5YR5/3にぶい赤褐色		有
318	前庭部	須恵器	甕	3.1	10.0		5.4	雲母	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	7.5YR4/1黒灰色	7.5YR4/1黒灰色	自然釉有り	
319	前庭部	須恵器	甕	3.5	6.8	9.8		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・ヨコナデ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	2.5YR3/1暗赤灰色	2.5YR3/1暗赤灰色	つまみ有り	
320	前庭部	須恵器	甕	3.7	6.4	9.7		雲母	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・ヨコナデ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
321	前庭部	土師器	高杯	6.8	(8)		7.0	角閃石・金雲母・赤色粒子を含む	刷毛ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ・ナデ方向ヘラケズリ	回転ナデ・丁寧なナデ・ヨコ方向ヘラケズリ	良好	5YR6/6橙色	5YR7/6明橙色		
322	前庭部	須恵器	甕	3.8	10.4	4.3		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	良好	2.5YR3/1暗赤灰色	2.5YR3/1暗赤灰色		
323	前庭部	弥生系	鉢	12.7	10.0	8.3	5.5	石英・雲母	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PR5/2灰白色	5PR5/2灰白色	胴部文様有	有
324	テラス	弥生系	甕	15.3	6.4	18.4	6.9	石英含む	ヨコ方・手持ちヘラケズリ・回転ヨコナデ・ヨコ撫	回転ヨコナデ	良好	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	ヨコ方向はお指の痕 ヘラ撫では不定方向	有
325	前庭部	弥生系	甕	13.4	7.8	13.6	6.0	石英含む	回転ヨコナデ・不定方向ナデ	回転ヨコナデ	良好	N2/0黒色	N2/0黒色	自然釉が各部上面にかかる	
326	前庭部	土師器	高杯	7.2	7.1		6.0	石英・金雲母・赤色粒子を含む	回転ヨコナデ・ナデ・不定方向ヘラケズリ・ナデ方向ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ・ヨコ方向ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色	5YR6/6橙色		

65号墓（第110図）

概要

８群の西端に位置し、64号墓の後に構築された横穴墓で、羨門部での標高は349.2mである。羨門部から羨道にかけて天井の一部が崩落のため残存しないが、他は比較的残りがよい。

規模・構造

前庭部

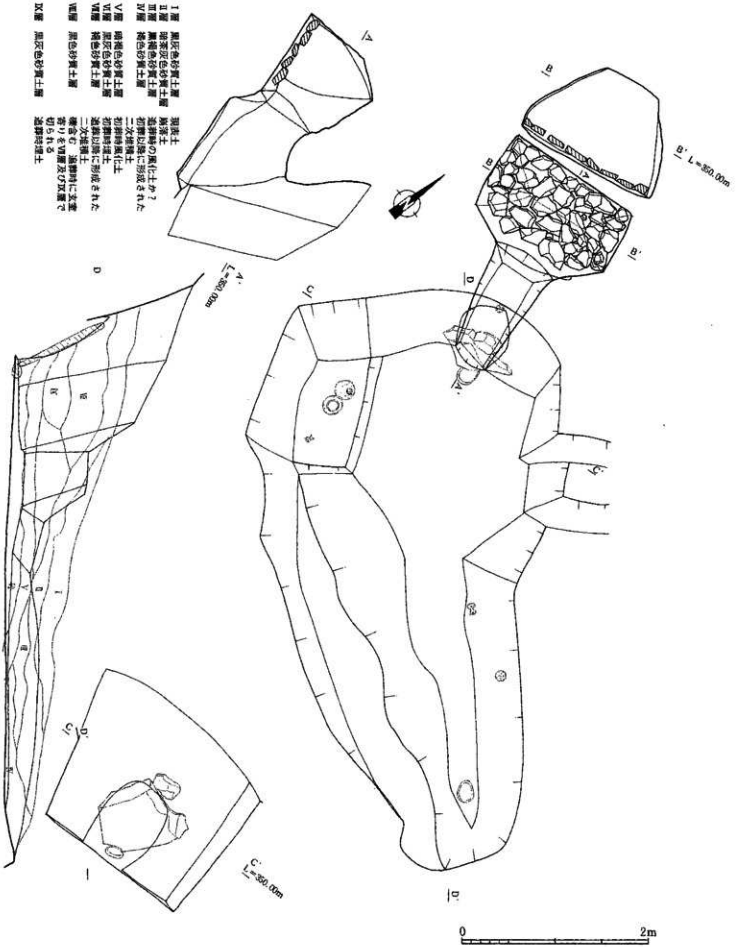
前庭部は、羨門部前面に長さ1.4m、幅1.7mのフラットな面を造り出し、さらに南方向に長さ３m、幅0.5m程度延びる。また西側肩部には長さ約１m、幅約0.6m、高さ0.5mのほぼ長方形の基壇張り出し部を持つ。基壇上からは平瓶・壺・土師器高坏が出土した。前庭部の埋土は９層確認された。Ⅰ・Ⅱ層は現表土と崩落土、Ⅲ・Ⅶ・Ⅸ層が追葬時の可能性をもつ。Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ層が初葬時の埋土と考える。

羨門部

立ち上がり部の幅0.4m、高さは崩落のため不明である。閉塞施設は安山岩板石１枚と人頭大の円礫２個を閉塞石として使用している。床面には閉塞石を据える掘り込み等はみられなかった。

羨道・玄室部

羨道は長さ1.3m、玄門部での高さ0.7m、幅0.73m、前庭部より15cm、玄室より25cm低く構築されている。

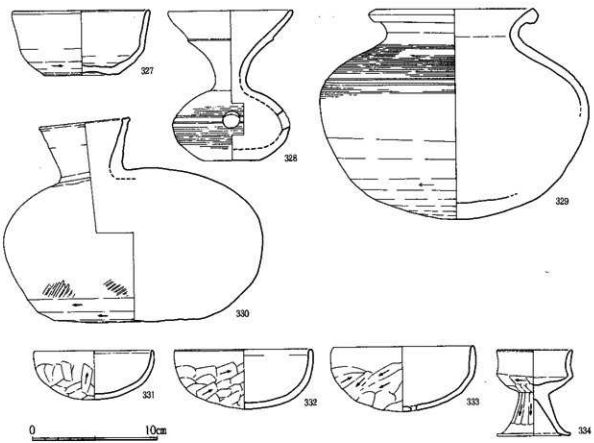


第110図　65号墓実測図　(1/40)

玄室の平面形態は平入り長方形で、長さ1.1m、中央での幅1.55m、高さは最大で1.05mである。床面には20～30cm前後の凝灰岩礫を敷き詰めている。奥壁・側壁とも内湾しながら立ち上がる。天井形態は家型で、四隅から天井に向かって稜線がのびる。主軸はN－17°－Wである。

遺物の出土状況

前庭部右肩基壇上からは平瓶（330）、壺（329）、土師器高坏（334）が出土した。これら以外に裾部から須恵器坏身（327）、鼎（328）・土師器壙（333）が出土したが、壁面中腹からの検出であり、64号墓前庭部からの可能性をもつ。羨道部からは土師器壙2点（331・332）が出土した。



第111図　65号墓出土遺物実測図　（1/3）

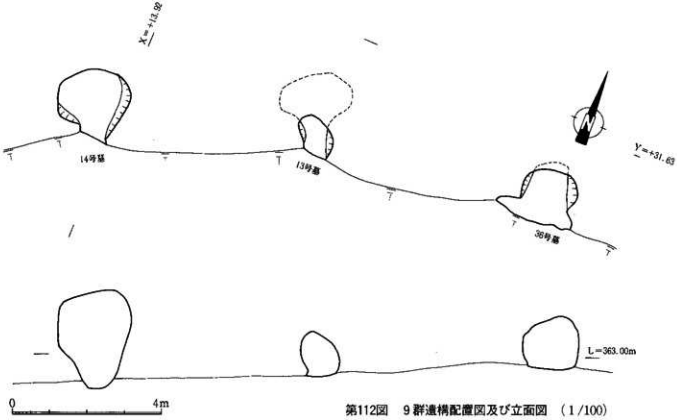
第55表　65号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
327	前庭部	須恵器	坏身	3.1	11.0			精緻	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	7.5Y5/1黒灰色	7.5Y5/1黒灰色	自然釉有り	
328	前庭部	須恵器	鼎	11.8	10.0	9.4	4.3	石英を含む	回転ケズ・カキ目・下持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	自然釉有り	
329	前庭部	須恵器	壺	15.6	13.6	21.6		石英・長石粒を少量含む	回転ケズ・カキ目・回転ヘラケズリ後回転ナデ	同転ナデ	良好	N6/N	5PB6 5/1青灰色		
330	前庭部	須恵器	平瓶	16.1	7.3	20.6	5.8	石英・長石を含む	平行タタキ・回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色	タタキ成形の痕跡残る	
331	羨道	土師器	壙	3.8	9.6			砂粒に精緻	ヨコナデ	ヨコナデ・ボロ万向ナデ	良好	10YR8/1灰白色	7.5YR5/6明黄褐色		
332	羨道	土師器	壙	4.7	11.0			砂粒に精緻	ヨコナデ・下持ちヘラケズリ	ヨコナデ・指ナデ	良好	10YR8/3浅黄橙色	N7/8.5浅黄灰色		

33J	縄文期	土師器	鉢	6.8	6.0			5.8	稀薄	サコナデ・手持ちヘラケズリ	ナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	一部黒斑あり	
33K	縄文期	土師器	壺か	6.1	11.5				稀薄	サコナデ・ヘラケズリ	サコナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		

9群（第112図）

9群は調査区の東端部、1群の西隣、標高363m付近に位置する。東側には1群が、直下には3群が位置する。9群を構成する横穴墓は3基（36・13・14号墓）である。現状では崩落が激しく、36号墓は玄室の一部、13・14号墓は玄室と羨道の一部を残すだけである。このためテラスの有無や墓前祭祀等の行為は確認できない。



第112図　9群遺構配置図及び立面図　（1/100）

36号墓（第113図）

概要

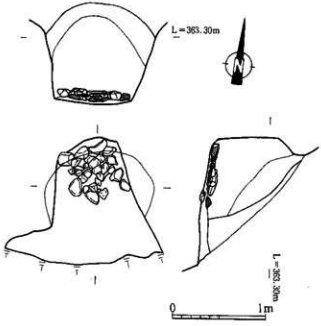
36号墓は9群の東端に位置する。前庭部・羨道部は既に崩落し、玄室の一部が残っている。

規模・構造

現存する玄室は奥行き約80cm、最大幅約90cmである。床面には凝灰岩角礫と円礫を敷き詰めている。床面の標高は362.6mである。玄室の平面形態及び天井形態は不明である。玄室主軸方位はN－8°－Wである。

遺物の出土状況

遺物は出土していない。



第113図　36号墓実測図　（1/40）

13号墓（第114図）

概要

9群の中央、36号墓の2m西に位置し、羨道部での標高は362.3mである。

前庭部及び羨道の一部と、羨道部の天井が崩落のため、残存しない。

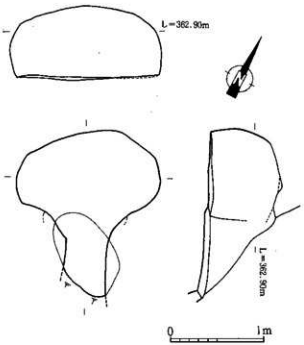
規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道部は長さ約0.9m、前庭部寄りの幅0.55m、玄門幅0.45m、高さ不明で玄室に向ってやや狭まる傾向にある。床面はほぼ平坦で玄室に向って緩やかに上昇する。玄室との境には約5cmの段差をもち、1段低く構築されている。玄室の平面形態は平入りの楕円形で、長さ0.8m、中央での幅1.55m、高さは0.78mである。天井形態はドーム形で、奥・左右両壁とも内湾しながら立ち上がる。玄室の主軸はN－29°－Wである。

遺物の出土状況

遺物は出土していない。



第114図　13号墓実測図（1/40）

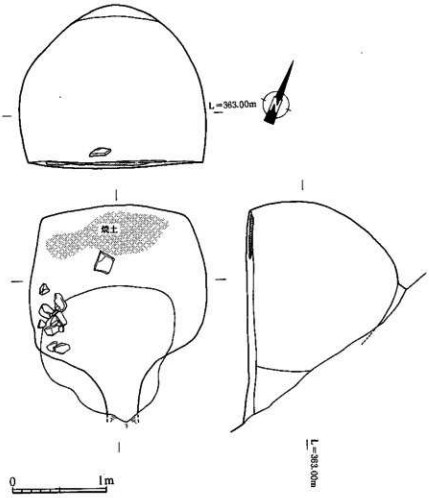
14号墓（第115図）

概要

14号墓は9群の西端、13号墓の2m西に位置する。前庭部と羨道部の一部はすでに無く、玄室も大きく開口し、残りが非常に悪い。玄室床面での標高は361.8mである。

規模・構造

残存する羨道は長さ約0.5m、玄門部幅0.65mで、床面は削られている。玄室の平面形態はほぼ方形で、長さ約1.6m、中央幅1.8mである。左側壁玄門寄りの床面からは敷石の一部を検出した。また奥壁寄り床面からは焼土が確認されたが、この焼土のもつ意味合いは不明である。天井形態は崩落のため明確ではない



第115図　14号墓実測図（1/40）

が、ドーム形をしていたと考えられる。玄室の主軸方向はN－23°－Wである。

遺物の出土状況

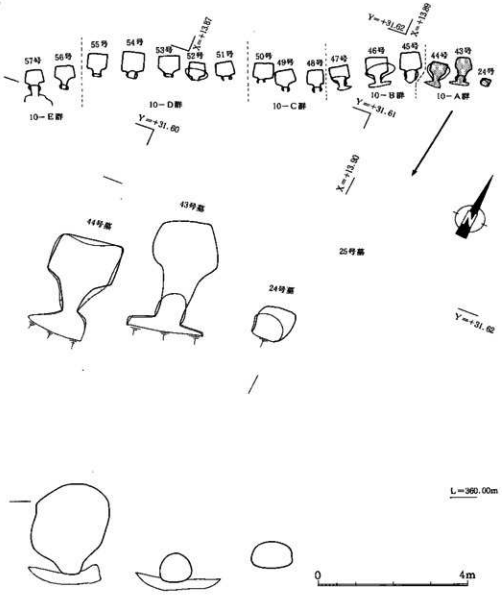
遺物は出土していない。

10群

10群は当横穴墓群の上位に位置し、中央付近から西端までを占める一群で、合計16基を確認・調査した。この一群は上位に位置するため、崩落が激しく、ほとんどの横穴墓は前庭部から羨道部を失っていて、残りは非常に悪い。さらにこの一群は地形や検出状況から５支群に分けた。

10－Ａ群（第116図）

10－Ａ群は10群の東端、横穴墓群中の中央付近上位に位置し、３基（25・43・44号墓）で構成されている。43・44号墓は羨道部まで確認できたが、25号墓は玄室の一部を確認しただけである。



第116図　10－Ａ群遺構配置図及び立面図（1/100）

24号墓（第117図）

概要

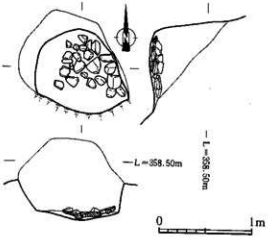
24号墓は10－A群の東端に位置する。前庭部・羨道部は既に崩落し、玄室の一部が確認されただけである。標高は358.1mである。

規模・構造

残存する玄室は奥行き約0.9m、最大幅1mで、床面中央が幾分窪んでいる。床面には雑に凝灰岩角礫を敷いている。玄室の平面形態・天井形態は不明である。主軸方位はほぼ真北である。

遺物の出土状況

遺物は出土していない。



第117図　24号墓実測図　（1/40）

43号墓（第118図）

概要

43号墓は24号墓の西1mに位置し、羨門床面での標高は357.3mである。前庭部はごく一部が残り、羨道天井部も崩落している。

規模・構造

前庭部

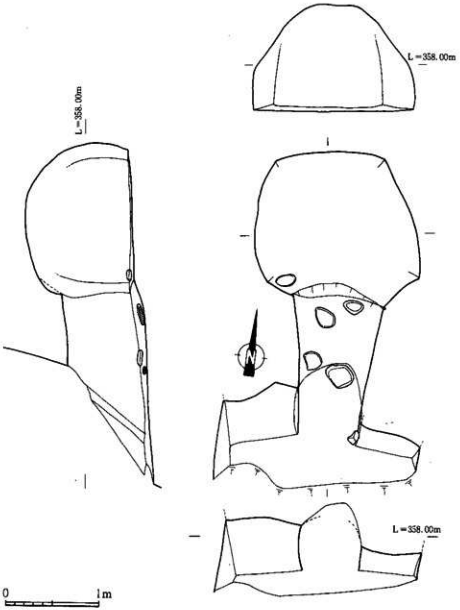
前庭部は羨門前面がわずかに残るだけである。残存する長さは0.4m前後、幅1.95mである。

羨門部

羨門は幅0.62mで高さは崩落のため不明である。閉塞石は検出されなかった。

羨道・玄室

羨道は長さ1.6m、玄門幅0.98m、高さ0.85mで玄室に向って広くなる。床面はほぼ平坦で玄室に向って緩やかに上昇する。玄室との境に約15cmの緩やかな段差をもつ。また、玄室から運び出されたと思われる敷石の一部が羨道より出土した。



第118図　43号墓実測図　（1/40）

玄室の平面形は平入り不整隅丸方形で、奥行き0.75m、幅は裾部1.63m、中央部1.75m、奥壁1.17m、高さ1.14mである。玄室からは左側壁裾部から敷石と思われる円礫1点が出土した。敷石は追葬時、或いは攪乱を受けて玄室内から掻き出されたと思われる。左右側壁は床面から約40cmまではほぼ垂直に立ち上がり、その後内傾しながら天井へと延びる。奥壁は内湾しながら立ち上がる。天井形態はドーム形に近いと考えられ、四隅から天井に向って稜が延びるが途中で消滅する。玄室の主軸方向はN－8°－Wである。

遺物の出土状況

玄室・前庭部とも遺物は出土していない。

44号墓（第119図）

概要

44号墓は10－A群の西端、23号墓の西2mに位置し、羨門付近での標高は357.8mである。前庭部は一部が残存し、羨道から玄室の天井は陥没していてる。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ0.7m、幅1.6m程度で床面の一部しか残っていない。

羨門部

羨門は幅0.35m、高さは崩落のため不明である。閉塞施設は確認されなかった。

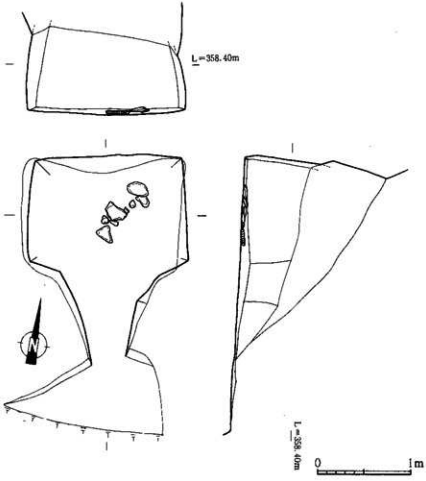
羨道・玄室部

羨道は長さ約0.6～1.0m、玄門幅約0.7mである。床面は玄室に向って緩やかに上昇する。

玄室の平面形は平入り長方形で、奥行き1.1m、幅1.68mである。玄室からは中央部で敷石と思われる礫8点が出土した。敷石は追葬時、或いは攪乱を受けて玄室内から掻き出されたと思われる。奥壁・左右側壁はやや内傾しながら立ち上がる。天井形態は崩落のため不明であるが、四隅から天井に向って稜が延びる。玄室主軸方向はN－10°－Wである。

遺物の出土状況

玄室・前庭部とも遺物は出土していない。



第119図　44号墓実測図　（1/40）

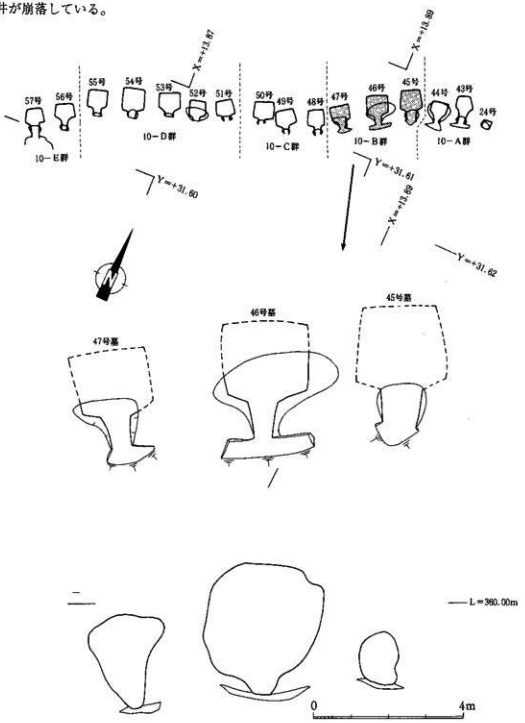
10－B群（第120図）

10－B群は横穴墓群中の中央付近上位に位置し、3基（45・46・47号墓）の横穴墓で構成されている。いずれの横穴墓も羨道部から玄室にかけての天井と前庭部のほとんどを消失していて、残りは悪い。

45号墓（第121図）

概要

45号墓は10－B群東端に位置し、羨門部での標高は357.7mである。前庭部は既に無く、羨道部も天井が崩落している。



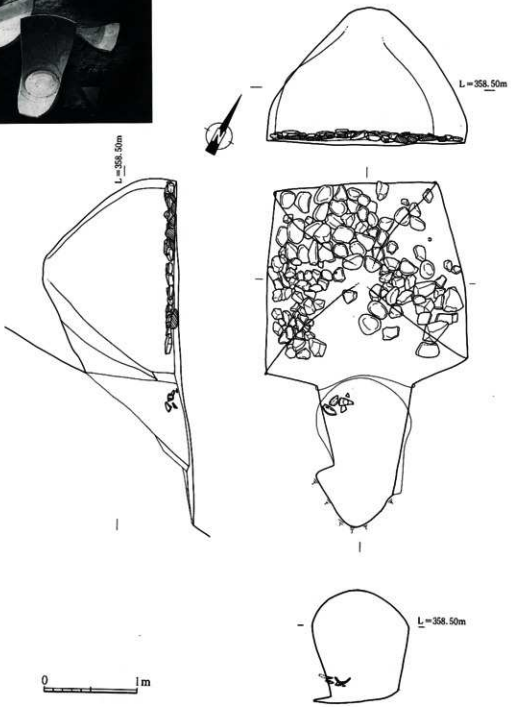
第120図　10－B群遺構配置図（1/100）

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは1.5mで、崩落のため羨門部の位置は確認できなかった。玄門幅は1.0mで、玄室に向って広がり、床面は緩やかに上昇する。

玄室の平面形は不整方形で奥行き2.1m、奥壁幅1.73m、裾部幅2.15mである。玄室床面には10～30cm前後の河原礫や凝灰岩礫を敷石としているが、中央から玄門寄りと左奥壁付近は希薄である。後世の撹乱を受けた可能性もある。天井は四柱寄棟型で、四隅からは天井に向って稜が延びる。玄室主軸方向はN－28°－Wである。

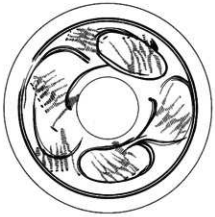


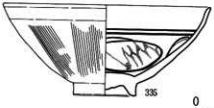
第121図　45号墓実測図　（1/40）

遺物の出土状況

羨道部

玄門西側付近から同安窯系青磁碗１個体分の破片が出土した。床面からは約10cm浮いている。出土状況等からみて、当横穴墓は中世を中心とした時期に再び墓として利用されたと考えられる。また、羨道部埋土中から耳環２点が出土した。玄室内から掻き出された埋土中に含まれていたと思われる。





第122図　45号墓出土遺物実測図　（1／3・実大）

第56表　45号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格(　)付きは推定値・単位(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ヘラ記号
335	表面	青磁	碗	7.1	16.5		10.0	極微			良好	7.5Y4/3オリーブ	7.5Y4/3オリーブ	同安窯系(三類ヵ) 体部下半は無釉	

第57表　45号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
420	羨道	銅地金張	2.4×2.2	0.7×0.5	13.8	内側に金が残る
421	羨道	銅地銀張	2.2×2.1	0.8×0.6	13.4	内側に銀が残る

46号墓（第123図）

概要

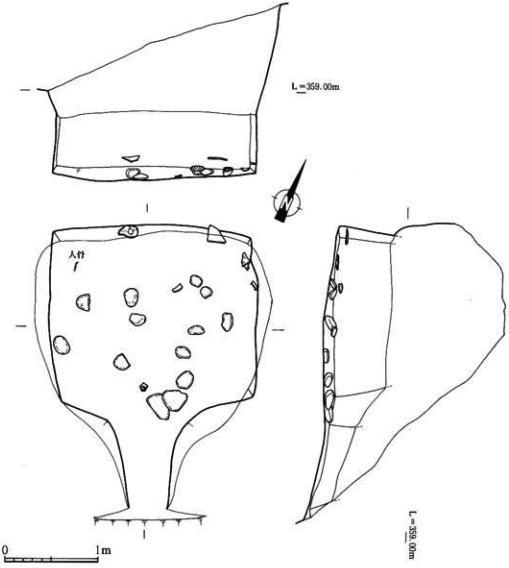
46号墓は10－B群中央、45号墓の西1.5mに位置し、羨門付近での標高は357.9mである。現状では羨道部と玄室が残っているが、天井は崩落していて残りは悪い。

規模・構造

羨道・玄室部

羨道の長さは0.92m、羨門部幅0.4m、玄門部幅0.85mで、玄室に向って広がる。床面は凹凸が激しく、約15°の傾斜で玄室に向って上り勾配となる。後世に床面を削った可能性もある。

玄室の平面形は方形に近い平入り長方形で、奥行き2.0m、幅2.2mである。床面には扁平河原礫と凝灰岩礫の散石が十数個散乱している。後世の攪乱を受けたと考える。天井形態は崩落のため不明であるが、奥壁・左右両側壁とも垂直に立ち上がり、四隅から天井に向って稜が延びていることから考えて、家型の形態をとると思われる。玄室の主軸方向はN－23°－Wである。



第123図　46号墓実測図　（1/40）

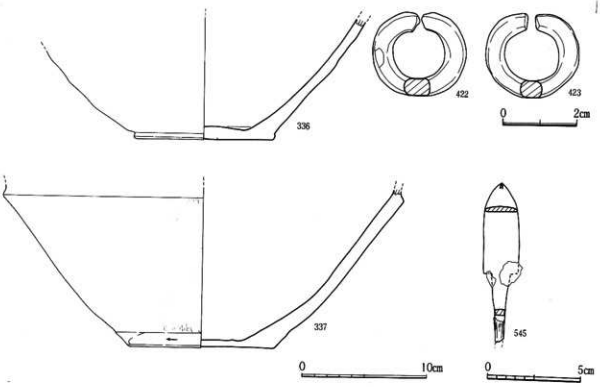
遺物の出土状況

羨道部

羨門部付近の埋土中から鉄鏃1点が出土した。玄室内から掻き出されたと考える。

玄室

左側壁の奥壁寄りで人骨片が出土した。ほぼ床面直上での出土からみてこの横穴墓に伴う人骨と思われる。右側壁の奥壁寄りからは陶器の擂鉢片（336）が出土した。床面からは5㎝前後浮いた状態であった。また、奥壁中央付近からは瓦質の擂鉢破片（337）が出土した。やはり床面からは5㎝前後浮いた状態であった。



第124図　46号墓出土遺物実測図　（1/3・1/2・実大）

第58表　46号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	規格：（）は復元値・単位(cm) 器高	口径	最大径	底径	胎土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	備考	ページ記号
336	玄室	陶器	擂鉢				11.0	角閃石・黒母含む	ナデ・平滑ナデ	平滑ナデ・4条1単位のオロシ	良好	2.5Y7/6灰黄色	2.5Y7/6灰黄色	ホゾ目は左方向	
337	玄室	瓦器	擂鉢				(32.1)	(11.8)	鉄錆	ヨコナデ・ナデ ハケ・ヘラケズリ・ホゾ目	ヨコハケ・ナデホゾ目 |良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		

第59表　46号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
442	主室	銅地金張	2.5×2.2	0.8×0.5	12.1	内側に金が残る
443	主室	銅地銀張	2.5×2.2	0.7×0.5	14.7	内側に銀が残る

第60表　46号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
545	テラス	鉄鏃	8.4＋α	4.3	1.8	0.6	0.3	篦被柳葉式

47号墓（第125図）

概要

47号墓は10－B群の西端、46号墓の西２mに位置し、羨門部での標高は357.4mである。前庭部はごく一部が残り、天井は羨道と玄室の一部が崩落していて、全体の残りは良くない。

規模・構造

前庭部

前庭部は長さ0.4m、幅1.2m程が残っている。

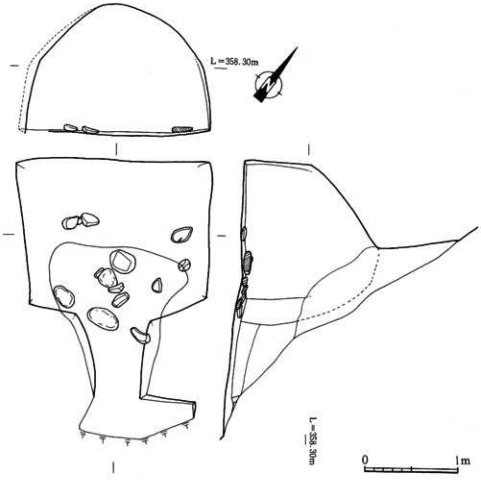
羨道・玄室部

羨道は長さ0.85m、羨門幅0.5m、玄門幅0.8mで玄室に向って緩やかに上りながら広がる。

玄室の平面形は平入り不整長方形で、奥行き1.7m、奥壁幅2.1m、裾部幅1.9m、高さは現状で1.45mである。床面には扁平河原礫が十数個点在している。敷石の残存と考えられ、追葬或いは二次使用を受けた時に荒されたと推定される。奥壁は床から0.7mまでほぼ垂直に立ち上がる。左右両壁も床から0.7mまで僅かに内傾しながら立ち上がる。天井形態は崩落のためはっきりしないが、ドーム型と思われる。壁の四隅からは天井に向って稜が延びる。玄室の主軸方向はN－38°－Wである。

遺物の出土状況

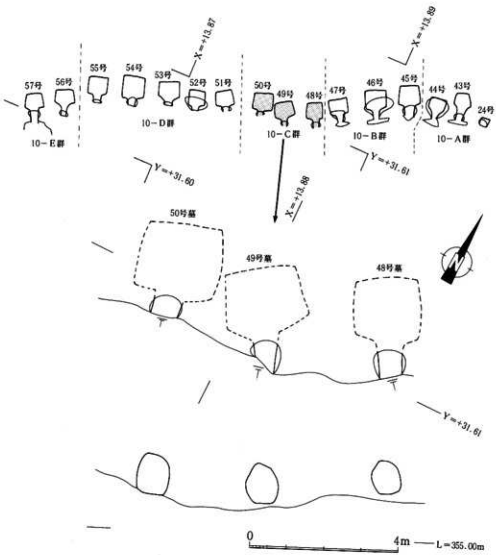
遺物は出土していない。



第125図　47号墓実測図（1/40）

10－C群（第126図）

10－C群は横穴墓群中の中央よりやや西側付近上位に位置し、3基（48～50号墓）の横穴墓で構成されている。いずれの横穴墓も前庭部を消失していて、残りは悪い。



第126図　10－C群遺構配置図及び立面図　（1/100）

48号墓（第127図）

概要

48号墓は10－C群東端に位置し、玄室床面での標高は356.0mである。前庭部及び羨門部は既になく、羨道の一部と玄室が残るだけである。玄室の残りは良好である。

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは1m、羨門寄り幅0.6m、玄門幅0.7m、高さ0.73mである。床面は凹凸がみとめられ、羨道途中から羨門方向へかなりの下り勾配となる。後世削平されたと考える。

玄室の平面形は胴張り方形で奥行き1.7m、中央幅1.7m、高さ1.28mである。床面からは奥壁寄りで敷石の一部が出土した。天井形態は四柱寄棟で四隅から天井に向って稜が延び、天井中央で一致する。玄室主軸方向はN－25°－Wである。

遺物の出土状況

羨道・玄室とも遺物は出土していない。

49号墓（第128図）

概要

49号墓は10－C群中央、48号墓の約3m西に位置する。羨門床面での標高は356.3mである。前庭部は崩落のためほとんど残っていないが、玄室の残りは良い。

規模・構造

羨道・玄室

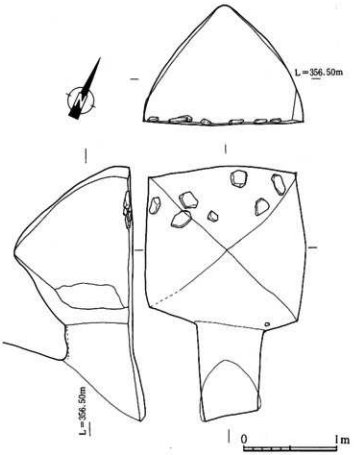
羨道は長さ0.82m、羨門幅0.55m、玄門幅0.75m、玄門高0.75mで玄室ににに向って緩やかに広がる。床には玄室から掻き出されたと考える大型の敷石数個が出土した。床面は羨門から玄室に向ってやや湾曲しながら上昇する。

玄室の平面形は平入り不整長方形で奥行き1.7m、奥壁幅1.83m、裾部幅2.1m、高さ1.5mである。床からはまばらであるが敷石が出土した。床面はほぼ平坦である。天井形態は四柱寄棟で四隅から天井に向って稜が延び、天井中央付近で一致する。

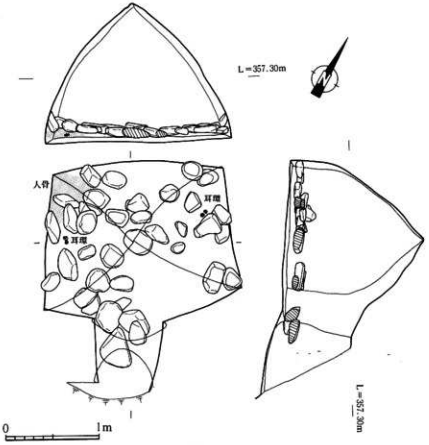
奥壁は床から約0.5mまでほぼ垂直に立ち上がり、その後、内傾しながら天井となる。両側壁は内湾しながら立ち上がる。主軸方向はN－30°－Wである。

遺物の出土状況

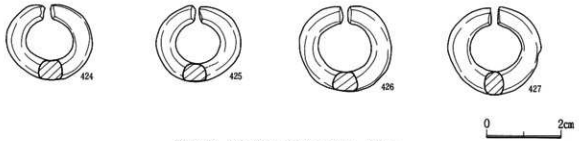
玄室内から人骨片と耳環4個が出土した。人骨片は玄室左奥敷石下から出土したことから、埋葬後に敷石は撹乱を受けたことがわかる。耳環は左側壁の中央付近から2個体、右側壁の中央付近から2個体が出土した。この事から当横穴墓では少なくとも一回の追葬が行われている。



第127図　48号墓実測図　（1/40）



第128図　49号墓実測図　（1/40）



第129図　49号墓出土遺物実測図　（実大）

第61表　49号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作　り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備　　考
424	玄室	銅地銀張	2.3×2.1	0.8×0.5	12.1	内側にわずかに銀が残る
425	玄室	銅地銀張	2.3×2.1	0.8×0.6	12.4	内側に銀が残る
426	玄室	銅地金張	2.4×2.3	0.7×0.6	14.2	内側に金が残る
427	玄室	銅地銀張	2.5×2.3	0.7×0.6	14.0	内側にわずかに銀が残る

50号墓（第130図）

概要

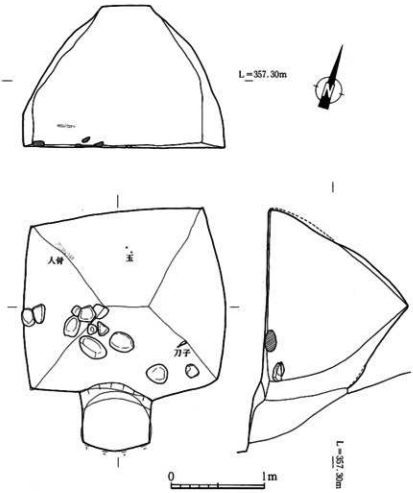
50号墓は10－C群西端、49号墓の約2.5m西に位置する。玄室床面での標高は356.6mである。前庭部及び羨道の一部は崩落のため残っていない。

規模・構造

羨道・玄室

残存する羨道の長さは0.7m、羨門寄りの幅0.7m、玄門幅0.75m、高さ1.0mである。天井は崩落のためほとんど残っていない。床面は玄室に向って緩やかに上昇する。また、玄室と羨道の境には約10cmの段差をもち、玄室が一段高く構築されている。

玄室の平面形は平入り胴張り長方形で奥行き1.8m、幅2.15mである。床からは敷石の一部が出土した。天井形態は家型で、中央に棟木を造り出している。

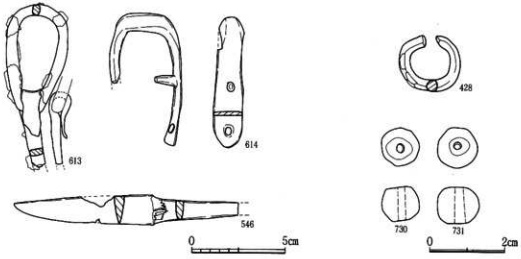


第130図　50号墓実測図　（1/40）

四隅から稜線が天井に向って延びる。玄室の主軸方向はN－18°－Wである。

遺物の出土状況

玄室内から馬具２点、刀子１点、耳環１点、ガラス小玉２点、人骨片が出土した。馬具は左裾部コーナー付近から出土した。鐙金具と鉸金具である。刀子は右裾部コーナー付近で出土した。耳環は中央から左やや奥壁寄りで１点だけ出土した。ガラス小玉は中央からやや奥壁寄りで２点出土した。耳環出土地とは約50cm離れており、追葬時或いは後世の攪乱時に耳環等は動かされたと思われる。人骨は左奥壁コーナー付近で大腿骨の一部と思われる骨片が出土したが残りは良くない。



第131図　50号墓出土遺物実測図　（1/2・実大）

第62表　50号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
546	玄室	刀子	12.1＋α	7.5	1.5	1.1	0.6	木質
614	玄室	馬具	—	—	—	—	—	鐙金具
613	玄室	馬具	8.6＋α	—	—	—	—	鉸具

第63表　50号墓出土耳環計測表

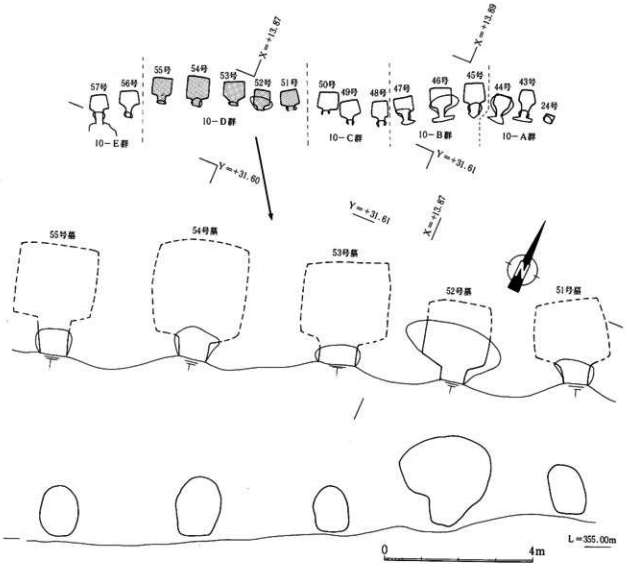
整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
428	玄室	銅地金張	1.6×1.4	0.3×0.3	1.6	わずかに金が残る

第64表　50号墓出土玉類計測表

整理番号	種類	材質	色調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
730	玉	ガラス	緑	1.1×0.9	0.2×0.2	2.4	完形 溶解時の付着有り
731	玉	ガラス	緑	2.1×0.9	0.2×0.2	3.3	完形

10－D群（第132図）

10－D群は横穴墓群中の西側上位に位置し、5基（51～55号墓）の横穴墓で構成されている。いずれの横穴墓も残りが悪く、前庭部はすでに無い。また羨道部も一部消滅している。また、羨道部天井はすべて崩落していて、52号墓に至っては玄室天井部の大半を失っている。しかし、玄室内は高位に位置するためか比較的残りは良かった。



第132図　10－D群遺構配置図及び立面図（1/100）

51号墓（第133図）

概要

51号墓は10－D群東端に位置し、羨道先端面での標高は355.8mである。前庭部及び羨門部は既に無く、羨道天井部も大部分が崩落していて、羨道の一部と玄室が残るだけである。玄室内部施設の残りは比較的良好である。

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは最大0.55m、玄門幅0.82m、高さ0.74mである。床面はほぼ平坦で、玄室に向って広がりながら緩やかに上昇し、玄門部付近で僅かな段差を形成する。

玄室の平面形態は平入り不整長方形で、奥行き1.75m、奥壁幅1.55m、袖部幅1.95m、高さ1.15mである。床面からは疎らであるが凝灰岩角礫を使用した敷石が出土した。天井形態は四柱寄棟で、中央に棟木を造り出している。四隅から稜線が天井に向って延びる。玄室の主軸方向はN－24°－Wである。

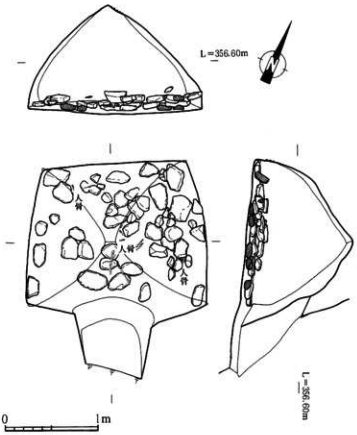
遺物の出土状況

玄室内からは数カ所で人骨片が出土したが、残りは悪かった。

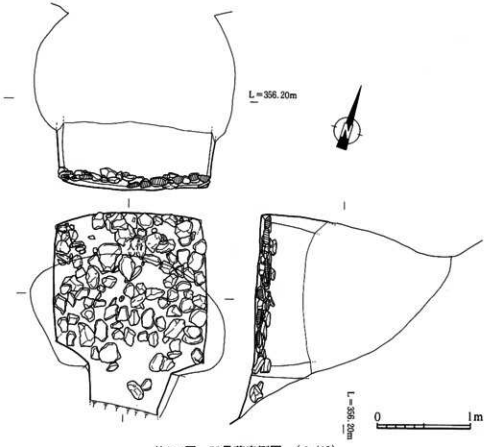
52号墓（第134図）

概要

52号墓は51号墓の西2.5mに位置する。羨道先端面での標高は355.5mである。前庭部及び羨門部は既に無く、羨道から玄室天井部が崩落していて、羨道の一部と玄室が残るだけである。



第133図　51号墓実測図　（1/40）



第134図　52号墓実測図　（1/40）

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは最大0.45m、玄門幅0.87mである。床面は凹凸がみられ、玄室に向ってかなりの勾配で上昇していることから、構築時の床面は残っていないと考える。

玄室の平面形態は不整方形で奥行き1.67m、幅1.65m、高さは不明である。床面からは凝灰岩角礫を使用した敷石が出土した。比較的しっかりした礫床である。天井形態は崩落のため不明であるが、奥壁・両側壁ともほぼ垂直に立ち上がることから、家型の可能性を持つ。玄室の主軸方向はN－17°－Wである。

遺物の出土状況

玄室内中央奥壁寄りの敷石上から人骨片が出土したが、残りは悪い。

53号墓（第135図）

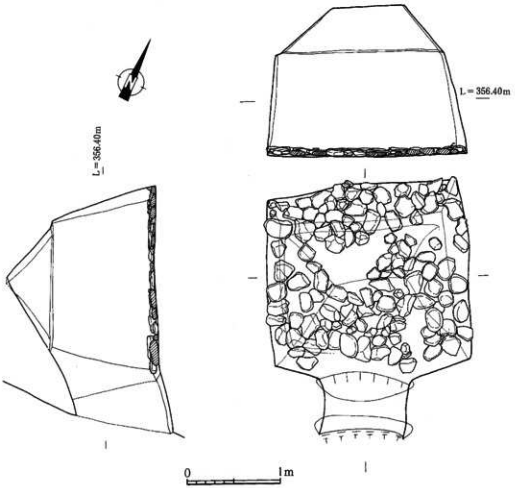
概要

53号墓は10－D群中央、52号墓の西2.5mに位置する。玄室床面での標高は355.6mである。前庭部及び羨門部は既に無く、羨道の一部と玄室が残る。玄室の残りは良好である。

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは最大0.6m、玄門幅0.95m、高さ1.05mである。床面は凹凸がみられ、玄室に向って約13°の勾配で上昇していることから、構築時の床面ではない可能性もある。

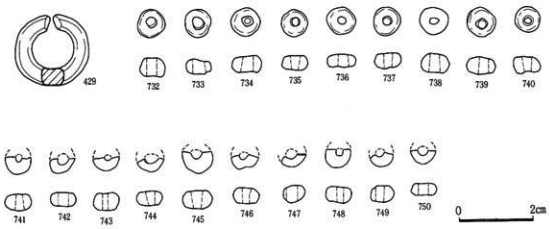


第135図　53号墓実測図　（1/40）

玄室の平面形態は方形で奥行き2.05m、幅2.15m、高さ1.6mである。床面からは凝灰岩角礫を使用した敷石が出土した。中央部分に一部空白があるが、比較的まんべんなく敷き詰めている。奥壁は約75°、両側壁は80～85°の傾斜で直線状に立ち上がる。天井形態は家型で天井部に棟木を造り出している。壁には稜線をもち、「軒」を表現している。四隅からも稜線が「軒」に向ってのびる。玄室の主軸方向はN－25°－Wである。

遺物の出土状況

玄室内敷石間の埋土中から、耳環1点、ガラス小玉19点が出土した。



第136図　53号墓出土遺物実測図（実大）

第65表　53号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
429	玄室	銅地金張	1.9×1.8	0.7×0.5	8.2	遺存状態良好

第66表　53号墓出土玉類計測表

整理番号	種類	材質	色調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
732	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.5	完形　気泡有り
733	小玉	ガラス	緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.7	完形　気泡有り
734	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.4	1/3欠　気泡有り
735	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.6	完形　気泡有り
736	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.3×0.3	0.6	完形　気泡有り
737	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.5	完形
738	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.2×0.2	0.6	完形　気泡有り
739	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.2×0.2	0.6	完形
740	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.3×0.3	0.5	完形　気泡有り
741	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.5	完形　気泡有り
742	小玉	ガラス	緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.5	1/2欠　気泡有り
743	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	1/2欠
744	小玉	ガラス	深黄緑	不明	不明	0.3	1/2欠　気泡有り
745	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	1/2欠
746	小玉	ガラス	深黄緑	0.8×0.8	0.3×0.3	0.3	1/2欠
747	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.3×0.3	0.3	1/2欠
748	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	1/2欠
749	小玉	ガラス	深黄緑	不明	不明	0.3	1/2欠
750	小玉	ガラス	深黄緑	0.7×0.7	0.3×0.3	0.3	1/2欠

54号墓（第137図）

概要

54号墓は10－D群中央、53号墓の西３mに位置する。玄室床面での標高は355.7mである。前庭部及び羨道部は既に無く、玄室が残るだけである。玄室の残りは良好である。

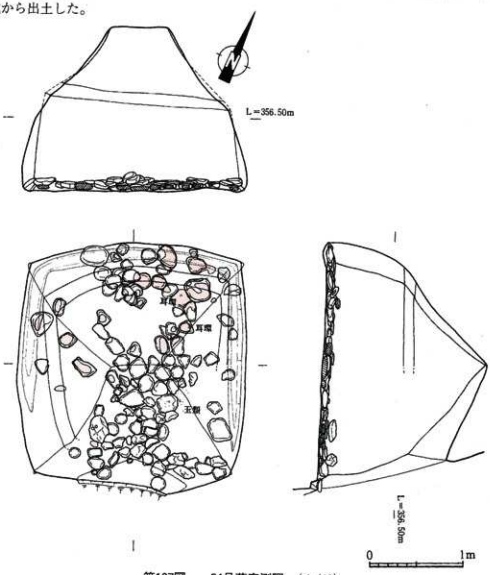
規模・構造

玄室部

玄室の平面形態は胴張り方形で、奥行き2.56m、幅2.45m、高さ1.75mである。床面からは凝灰岩角礫と河原石を使用した敷石が出土した。中央部分は比較的丁寧な礫床を施し、周辺部分は雑である。奥壁はやや湾曲しながら立ち上がり、両側壁は80～85°の傾斜でやや湾曲しながら立ち上がる。天井形態は家型で天井部に棟木を造り出している。壁には稜線をもち、「軒」を表現している。四隅からも稜線が「軒」に向ってのびる。玄室の主軸方向はN－23°－Wである。

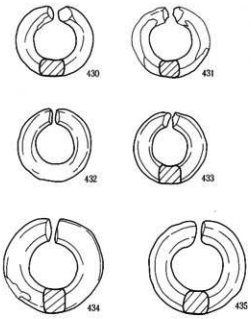
遺物の出土状況

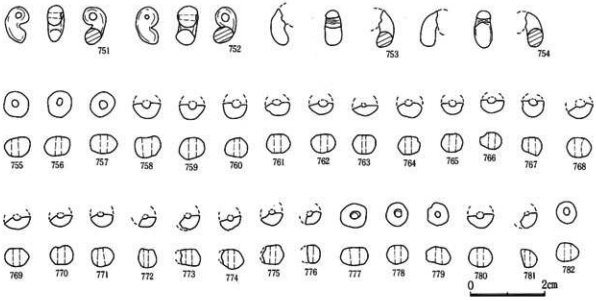
玄室内からは短頸壺の破片と多量の装身具・人骨片・歯が出土した。短頸壺は埋土中の出土である。装身具は中央やや右の敷石上と周辺から翡翠製の勾玉４点とガラス小玉28点、耳環２点、右奥壁寄り３箇所から耳環５点が出土した。耳環の出土個数から当横穴墓は少なくとも４体の遺体を埋葬した可能性が高く、３回の追葬が行われたことが想定できる。人骨・歯は玄室奥側を中心に、ほぼ全域から出土した。



第137図　54号墓実測図（1/40）

54号墓玄室遺物出土状況





第138図　54号墓出土遺物実測図（1/3・実大）

第67表　54号墓出土土器観察表

番号	出土位置・遺構	種別	器種	残存法量(cm)・推定値				胎土	調整		焼成	色調		備考	ヘラ記号
				口径	底径	器高	最大径		外面	内面		外面	内面		
338	玄室	須恵器	短頸壺	4.4	(5.9)	10.9	9.9	石英・長石粒を少量含む	回転ナデ・一定方向静止ヘラケズリ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	5PB5/1青紫色 N5/0灰色	N6.0/灰色	外面体部上半炭かぶり	

第68表　54号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
430	玄室	銅地金張	2.1×1.8	0.7×0.5	9.8	側縁部が剥落
431	玄室	銅地金張	2.1×1.8	0.6×0.4	9.7	側縁部が剥落
432	玄室	銅地金張	2.0×1.9	0.8×0.5	11.2	遺存状態良好
433	玄室	銅地金張	2.0×1.9	0.8×0.5	10.6	遺存状態良好
434	玄室	銅地金張	2.7×2.5	0.8×0.6	5.6	わずかに金が残る　大きさの割に軽い
435	玄室	銅地銀張	1.6×1.5	0.4×0.3	2.7	外径部に銀が残る
436	玄室	銅地金張	2.6×2.5	0.7×0.6	5.3	わずかに金が残る　大きさの割に軽い

第69表　54号墓出土玉類計測表

整理番号	種類	材質	色調	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
751	勾玉	ヒスイ	淡緑	9.5×6.5	1.5	0.6	完形
752	勾玉	ヒスイ	緑	10.0×6.0	1.8	0.7	完形
753	勾玉	ヒスイ	緑	不明	不明	0.4	1/2欠
754	勾玉	ヒスイ	緑	不明	不明	0.5	1/2欠
755	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.5	完形
756	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.5	完形
757	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.5	完形
758	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.4	1/2欠
759	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	1/2欠
760	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	1/2欠
761	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.2	完形
762	小玉	ガラス	緑	0.6×0.6	0.2×0.2	0.3	1/2欠
763	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.1×0.1	0.2	1/2欠
764	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.2	1/2欠
765	小玉	ガラス	緑	0.6×0.6	0.2×0.2	0.2	1/2欠
766	小玉	ガラス	緑	0.6×0.6	0.2×0.2	0.1	1/2欠
767	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.2	1/2欠
768	小玉	ガラス	緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	2/3欠
769	小玉	ガラス	緑	不明	0.1×0.1	0.2	1/2欠
770	小玉	ガラス	緑	0.6×0.6	0.2×0.2	0.1	1/2欠
771	小玉	ガラス	緑	0.6×0.6	0.2×0.2	0.2	1/2欠
772	小玉	ガラス	緑	不明	不明	0.1	3/4欠
773	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.1	1/2欠
774	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.1	1/2欠
775	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.2	1/2欠
776	小玉	ガラス	緑	不明	0.2×0.2	0.1	3/4欠
777	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.3×0.3	0.5	完形
778	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.4	完形
779	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.3	完形
780	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.2	1/2欠
781	小玉	ガラス	白緑	不明	不明	0.1	3/4欠
782	小玉	ガラス	白緑	0.7×0.7	0.2×0.2	0.4	完形

55号墓（第140図）

概要

55号墓は10－D群西端、54号墓の西３ｍに位置する。玄室床面での標高は355.5ｍである。前庭部及び羨道部の一部は崩落のため既に無い。

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは1.0ｍ、玄門幅0.9ｍである。床面は玄室に向って広がりながら上り、羨道中央付近で平坦となる。

玄室の平面形態は胴張り方形で、奥行き1.9ｍ、幅2.05ｍ、高さ1.75ｍである。床面玄門側から凝灰岩角礫の敷石が７個出土した。大半は掻き出されたと考える。奥壁・両側壁とも10～30cm程度外傾しながら立ち上がり、その後、内傾しながら頂部へと延びる。天井形態は家型である。天井の剥離のため明確には確認できないが棟木を造り出していたと考える。四隅から稜線が天井に向ってのびる。玄室の主軸方向はＮ－17°－Ｗである。

遺物の出土状況

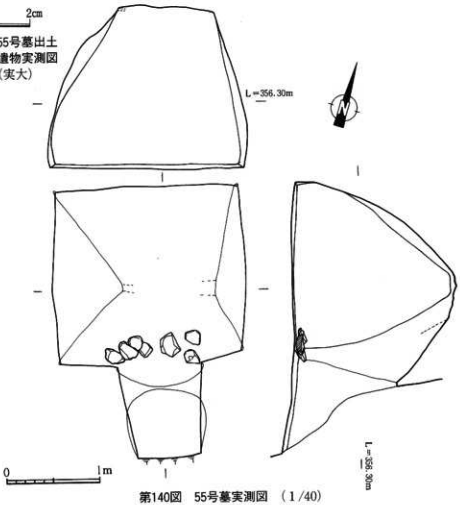
玄室埋土中から耳環１点が出土した。

0　2cm

第139図　55号墓出土遺物実測図（実大）

第70表　55号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
437	玄室	銅地金張	2.4×2.2	0.7×0.5	2.7	側縁部が剥落



第140図　55号墓実測図（1/40）

10－E群（第141図）

10－E群は横穴墓群中の上部西端に位置し、2基（56・57号墓）の横穴墓で構成されている。56号墓の前庭部はすでに無く、羨道部も一部消滅しているが、前庭部崩落埋土中から土器が出土した。また、羨道部から玄室にかけての天井は一部崩落しているが、内部施設は比較的残りが良い。57号墓は羨道部の一部と天井を失っている。

56号墓（第142図）

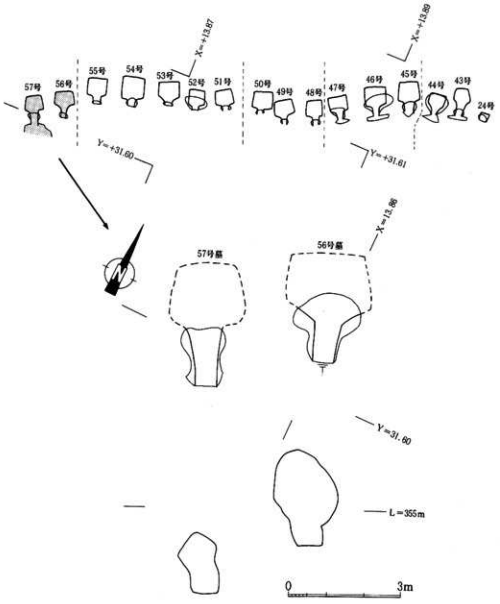
概要

56号墓は10－E群東端に位置する。羨道床面での標高は352.5mである。前庭部及び羨道部の一部と天井は崩落のため既に無い。

規模・構造

羨道・玄室部

残存する羨道の長さは1.05m、玄門幅0.65m、高さ不明である。床面はほぼ平坦で、玄門と玄室の境で約5cmの緩やかな段差をもつ。また、玄門付近で凝灰岩礫数個と、羨道中央部で供献土器が出土した。凝灰岩礫は大型で玄室と前庭部を区画する意味を持つと考える。



第141図　10－E群遺構配置図及び立面図（1/100）

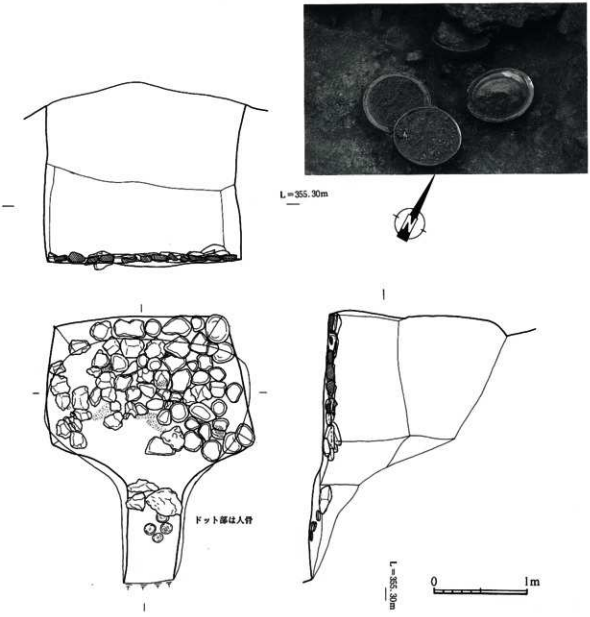
玄室の平面形態は平入り不整長方形で、奥行き1.6m、奥壁幅1.8m、裾部幅2.15m、高さ不明である。床面には凝灰岩角礫と扁平河原円礫を使用して比較的丁寧な礫床を整えている。天井形態は不明であるが、残存している奥壁・両側壁ともほぼ垂直に立ち上がることから家型の形態をとっていたと考える。四隅からは天井に向って稜線が延びる。玄室の主軸方向はN－28°－Wである。

遺物の出土状況

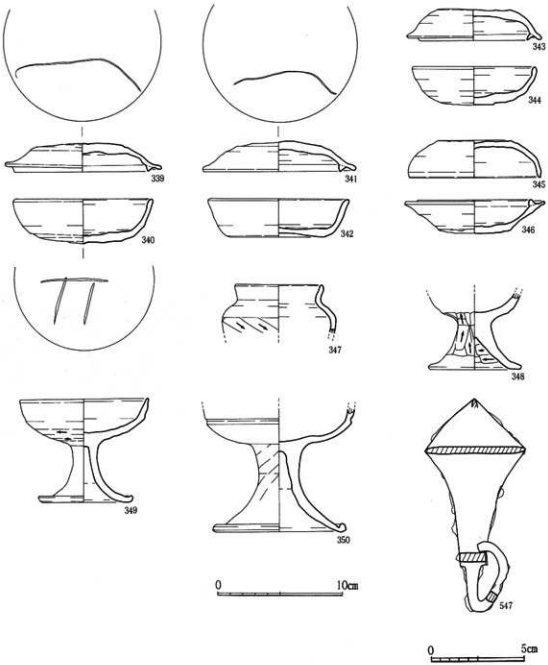
前庭部は崩落のためほとんど原状を留めていないが、埋土除去中に土器が出土した。出土した土器は坏1セット（343・344、345・346）、小型壺1点（347）、須恵器高坏3点（348～350）である。また、鉄鏃1点も出土した。

羨道部からは中央付近で坏2セット（339・340、341・342）が出土した。礫の手前に埋置されていて、何らかの行為が行われたものと思われる。

玄室内からは人骨片と歯が出土した。人骨は中央付近で出土している。歯は裾部右コーナー付近と裾部左コーナー付近の2箇所で集中して出土した。歯の出土状況からみて少なくとも2回の埋葬行為が行われたことがわかる。



第142図　56号墓実測図（1/40）



第143図　56号墓出土遺物実測図（1/3・1/2）

第71表　56号墓出土鉄器計測表

(cm)

番号	出土地	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	その他
547	テラス	鉄鏃	16.0＋α	8.8	5.4	0.5	0.4	圭頭斧箭式

第72表　56号墓出土土器観察表

番号	出土位置・元位	種別	器種	規模(残存は括弧内・単位cm) 器高	口径	最大径	底径	新土	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	ヘラ記号
339	側内	初期須恵	坏蓋	2.3	10.7	12.5		石英含む	回転ヨコナデ・ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		有
340	側内	初期須恵	坏身	3.5	11.2			石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		有
341	側内	初期須恵	坏蓋	2.4	9.9	12.2		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5PB5/1青灰色	5PB5/1青灰色		有
342	側内	初期須恵	坏身	3.5	11.2			砂粒	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
343	ケラス	須恵器	平底	2.5	8.8	10.7		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色	自然釉有り	
344	ケラス	瓦質器	坏身	3.0	9.9			砂粒	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	7.5YR5/1黒灰色	7.5YR5/1黒灰色		
345	ケラス	瓦質器	坏蓋	2.9	10.4	11.2	5.8	石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色	自然釉有り	
346	鉄鉢器	鉄器	坏身	2.6	9.0	9.0		石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラキリ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
347	鉄鉢器	土師器	小型鉢	不明	7.0			砂粒	ナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色		
348	玉型	土師器	高坏	8.2	10.5		7.8	砂粒	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ	良好	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	底部外面は丁寧なヨコナデ・内面は横へのヘラケズリ	
349	鉄鉢器	須恵器	高坏	不明	不明		7.6	石英含む	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色		
350	鉄鉢器	須恵器	高坏	不明	不明		10.6	石英含む	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・指ナデ	良好	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色	脚部にねじり状・底部に孔開	

57号墓（第144図）

概要

57号墓は10－E群西端、56号墓の西2.5mに位置する。羨道床面での標高は353.3mである。前庭部及び羨道部の一部と、羨道天井は崩落のため既に無い。

規模・構造

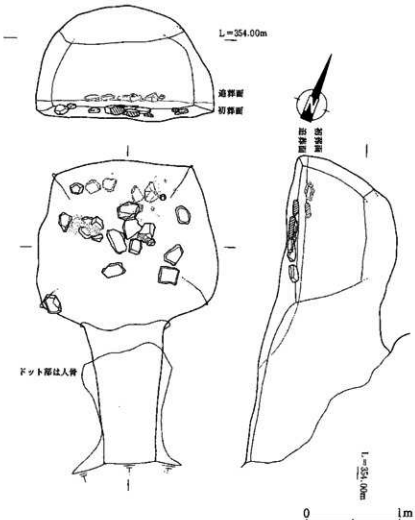
羨道・玄室部

残存する羨道の長さは1.5m、玄門幅0.85m、高さ1.1mである。床面はほぼ平坦で、玄室に向って緩やかに広がりながら上昇していく。

玄室の平面形は平入り不整長方形で、奥行き1.75m、奥壁幅1.45m、中央幅1.9m、裾部幅1.9m、高さ1.15mである。玄室内からは2枚の床面が検出された。初葬時の床面は標高353.7mで、中央部分を中心に10数個の凝灰岩角礫を使用して礫床としている。追葬時の床面は初葬床面に約20cmの盛土・敷石を行い、床面を形成している。この結果、少なくとも1回の追葬があったことがわかる。奥壁・両側壁とも内湾しながら立ち上がる。天井部は剥離が激しいため明確には確認できないが、形態はドーム形であったと思われる。四隅からは稜線が天井に向って延びる。玄室の主軸方向はN－21°－Wである。

遺物の出土状況

玄室内からは人骨片と耳環2個が出土した。人骨片は初葬時床面では中央やや左寄りから、追葬時床面では奥壁右寄りの位置で出土した。耳環は追葬時床面から人骨とともに出土した。



第144図　57号墓実測図　(1/40)

第145図　57号墓出土遺物実測図　(実大)

第73表　57号墓出土耳環計測表

整理番号	出土地	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	備考
438	玄室	銅地金張	2.6×2.2	0.7×0.4	11.6	遺存状態良好
439	玄室	銅地金張	2.2×2.1	0.7×0.5	11.2	内側にわずかに銀が残る

3．小結

土器のヘラ記号について

四日市上ノ原横穴墓群では66基の横穴墓の調査を行い、400余個体の須恵器・土師器が出土した。このうち本報告書に掲載した土器は出土地が明らかな物（上位に位置する横穴墓の大半は前庭部が崩落しているため、前庭部に埋置された遺物等の大半は落下している）や実測可能な土器で、350点である。このなかにはヘラ記号を施した土器が多量にみられる。ヘラ記号を持つ土器の器種は、須恵器坏・平瓶・鼎・壺・埦や土師器皿・高坏で、総数62点（ヘラ記号は65）であった。なかでも須恵器坏に最も多くその例がみられる。また、実測不可能な個体破片や出土地点の明確でない土器にもヘラ記号が多々みられ、実際の個数は80点前後まで増加すると考える。

この項では四日市上ノ原横穴墓群出土土器のヘラ記号の分析を試みるものである。

ヘラ記号の種類（第149～151図）

ヘラ記号は直線の配置と組み合わせ、円弧の配置、円弧と直線の組み合わせがある。

Ⅰ類は直線の配置であるが、長さと深さに差がある（Ⅰ―ａ・ｂ）。Ⅱ類は直線２本、Ⅲ類は直線３本の組み合わせである。Ⅳ～Ⅻ類は交差する直線の組み合わせである。Ⅻ類は円弧の配置でⅠ類と同様長さと深さに差がある。ⅩⅢ・ⅩⅣ類は円弧と直線の組み合わせである。

ヘラ記号の位置

ヘラ記号が刻まれる位置には内面と外面、器面上の位置による違いがみられる。

内面と外面の違いについては器種によって様相が違う。坏に関してはほとんどが外面にヘラ記号をもつ。鼎は２点（39・323）ヘラ記号をもち、39は頸部内面に１ヶ所（Ⅰ―ａ類）、胴部外面に２ヶ所（Ⅳ―ａ、Ⅶ―ａ類）。323は底部にⅣ―ｃ類のヘラ記号をもつ。須恵器高坏（160）は内面にⅡ―ａ類のヘラ記号を。また、土師器皿は２点とも内面に直線を多数組み合わせたヘラ記号をもつ。また、当横穴墓出土遺物中には内外面ともにヘラ記号をもつ土器の出土はない。

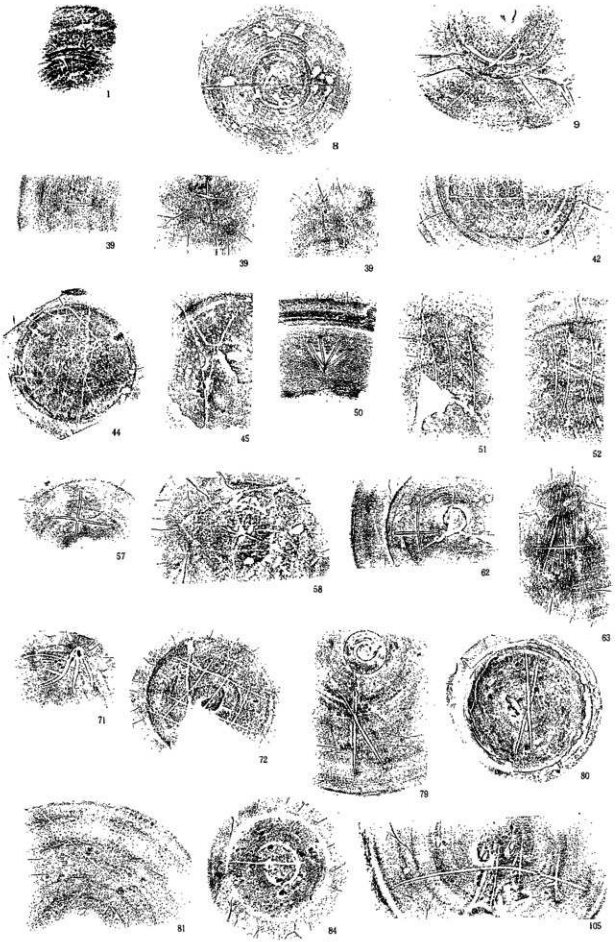
ヘラ記号の器面上の位置についてみてみると、坏蓋はほとんどが縁辺部近くに位置するか、中央から縁辺まで延びるように施している。坏身は中央部を中心に施している。甕２点（50・170）は頸部外面に、平瓶２点（310・324）は胴部にヘラ記号を施している。

蓋と身のヘラ記号

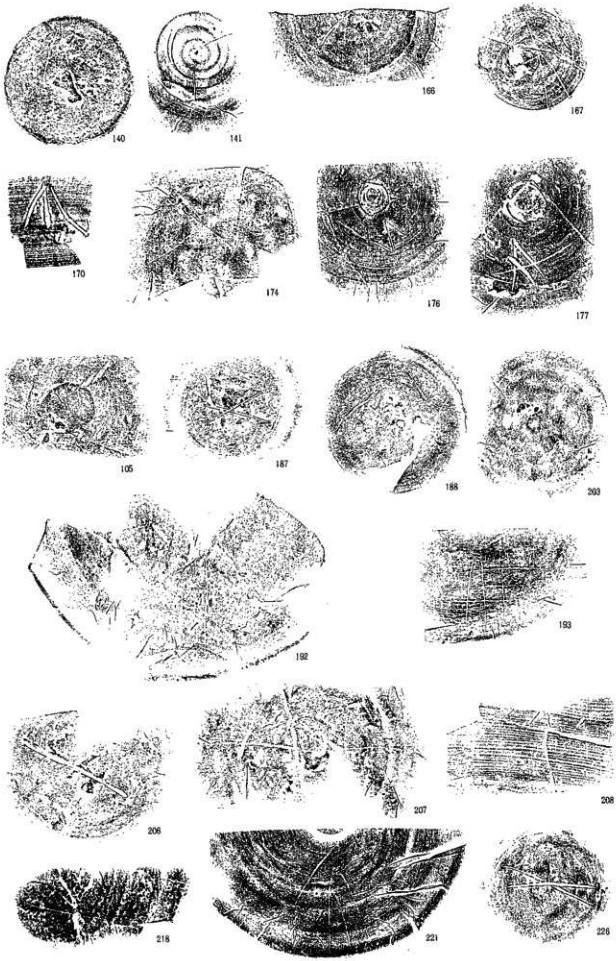
四日市上ノ原横穴墓群では坏の出土は多かったが、出土状況・胎土・色調等からみると、蓋と身がセットとなる資料は比較的少なかった。またヘラ記号をもつ資料となると記号の種類は多数みられるわりに、各記号別分類の個体数は少ない。このため、坏と身で同種のヘラ記号をもつセットとなる資料は非常に少なくなり、11号墓の51・52（Ⅲ―ａ類）、38号墓の79・80（Ⅳ―ｃ類）の２セットであった。セット関係をなす坏には比較的ヘラ記号は少なかった。これらのことから、当横穴墓群ではヘラ記号等によるセット関係はさほど意識しないで使用していたと考えられる。

同一ヘラ記号の出土例

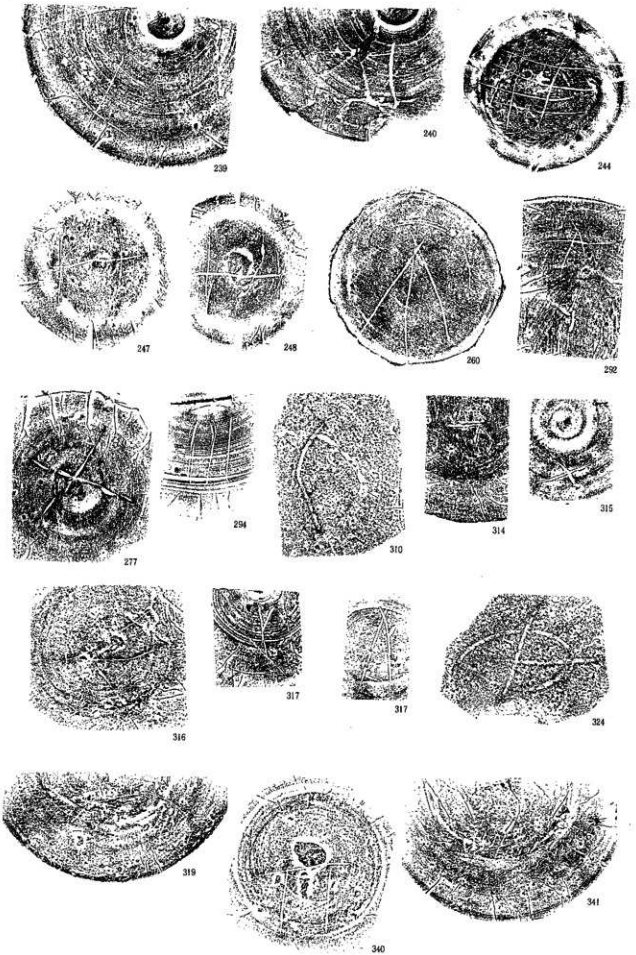
Ⅳ―ｃ類は日田市所在の夕田横穴墓群第８支群４号墓から４個体出土している。いずれも坏のセットである。夕田横穴墓群では他の横穴墓からの出土はなく、八女産の可能性をもつ。同様にⅦ―ｂ類も第10支群７号墓から５個体出土している。この夕田横穴墓群と四日市上ノ横穴墓群とは直線距離で30km程離れているが、筑後川上流域文化圏に属し、筑後との交流もさかんなことから須恵器供給範囲内であろう。さらにⅨ類は中津市伊藤田窯跡群中の瓦ヶ迫窯から出土した須恵器ヘラ記号と酷似している。胎土分析等は行っていないため詳細は不明であるが、豊前地方からの流通経路も当地では十分考えられる。



第146図　ヘラ記号集成1（1/2）



第147図　ヘラ記号集成２（1/2）



第148図　ヘラ記号集成３（1/2）

分類	ヘラ記号	遺物番号
Ⅰ−a		39 58 166
Ⅰ−b		8 42 84 206 207
Ⅱ−a		160 316 (?)
Ⅱ−b		208
Ⅲ−a		51 52 294
Ⅲ−b		176
Ⅳ−a		39 57 58 62 141 315
Ⅳ−b		81 174 240 277
Ⅳ−c		79 80 185 187 218 226 323
Ⅴ−a		317
Ⅴ−b		63 292
Ⅴ−c		9
Ⅵ−a		1 71 170 314
Ⅵ−b		260

第149図　ヘラ記号別出土土器一覧1

分類	ヘラ記号	遺物番号	分類	ヘラ記号	遺物番号
Ⅶ－a		39	Ⅺ		140 167 221
Ⅶ－b		239 247 248	Ⅻ		72 193
Ⅶ－c		340	XIII		244
Ⅶ－d		203	XIV		44
Ⅷ		50	XV		192
Ⅸ		105			
Ⅹ		177			

第150図　ヘラ記号別出土土器一覧２

分類	ヘラ記号	遺物番号	分類	ヘラ記号	遺物番号
XVI－a		340 339 341	XIII		45
XVI－b		43 188			
XIII		324			

第151図　ヘラ記号別出土土器一覧３

第74表　ヘラ記号分類表

分類	坏蓋	坏身	高坏	他	計
Ⅰ-a		2		瓶1（内面）	3
Ⅰ-b	2	3			5
Ⅱ-a		1	1（内面）		2
Ⅱ-b				平瓶1	1
Ⅲ-a	1	1		短頸壺1	3
Ⅲ-b	1				1
Ⅳ-a	3	2（内面1）		瓶1	6
Ⅳ-b	4（内面1）				4
Ⅳ-c	2	4		瓶1	7
Ⅴ-a	1				1
Ⅴ-b	2				2
Ⅴ-c	1				1
Ⅵ-a	2	1		甕1	4
Ⅵ-b		1			1
Ⅶ-a				瓶1	1
Ⅶ-b	1	2			3
Ⅶ-c		1			1
Ⅶ-d		1			1
Ⅷ				甕1	1
Ⅸ		1			1
Ⅹ	1				1
Ⅺ	1	2			3
Ⅻ		1		土師器皿1（内面）	2
XIII		1			1
XIV	1				1
XV				土師器皿1（内面）	1
XVI-a	2			平瓶1	3
XVI-b	1	1			2
XVII				平瓶1	1
XVIII		1			1
計	26	26	1	12	65

第3章　まとめ

(1)　分布・立地

本横穴墓群は、丘陵部に深く谷部が入り込む地形で、その谷部の最も奥に展開するものである。この丘陵上には名草台遺跡及び千人塚といった弥生時代から古墳時代の集落と墓域が確認されている。また、当横穴墓群の東側には、玄室部に赤色顔料で装飾を施した横穴が確認された鷹巣横穴墓群がある。この横穴墓群は6世紀後半から7世紀前半を中心として築造されたものである。四日市上ノ原横穴墓群は時期的に見ると、この鷹巣横穴墓群に続いて築造が行われた横穴墓といえる。なお、鷹巣横穴墓群の直下には古墳時代の集落である治別当遺跡があり、これらの集落と横穴墓を代表とする墓域が密接な関係を持って展開していた地域であるといえる。

(2)　横穴墓の形態分類と時期的変遷

本横穴墓群は、66基を調査した。時期的には、6世紀末～7世紀後半・8世紀初頭前後までの横穴墓が検出されている。

横穴墓の玄室形態としては、正方形タイプ・横長長方形タイプ・縦長長方形タイプ・横長楕円形タイプ・無袖撥形タイプ・無袖小型長方形タイプに6分類できる。

断面形には、ドーム型・家型・四柱寄棟型の3タイプが認められる。このうち最も古いものは、15号墓でこの横穴墓の玄室平面形態は正方形、断面形態は家型を呈する。当横穴墓は6世紀末に築造され、29号墓に見られるように7世紀末まで築造される。

横長長方形タイプは19号墓に代表される。この横穴墓の断面形態はドーム型を呈する。7世紀初頭に出現し、31号墓に見られるように7世紀末前後まで続く。

平面縦長長方形タイプは、18号墓に代表される。この横穴墓の断面形態は家型を呈する。7世紀中頃より出現し、38号墓に見られるように7世紀後半まで継続する。

横長楕円形タイプは5ｃ号墓に代表される。この横穴墓の断面形態はドーム型を呈する。7世紀半ばに出現し、16・17号墓の分布状況から8世紀初頭頃まで継続するものと思われる

無袖撥形タイプは、59号墓のみで出土遺物は認められないが、日田市夕田横穴墓群（注1）などを参考にすると、7世紀末から8世紀初頭前後にかけてのものと思われる。

無袖小型長方形タイプは、22・36号墓と2基あるが、いずれも遺物が出土していないものの、やはり7世紀末から8世紀初頭前後のものと思われる。

このように見てみると、本横穴墓群は7世紀中頃前後に集中して築造されているのが特徴である。

(3)　群集形態

本横穴墓群では、横穴墓の形態で記したように横穴墓群の中央部に6世紀末から出現し、7世紀中頃になると斜面全体に横穴墓が築造されるようになる。本横穴墓群はその分布から10支群に分かれるが、10群はその立地状況からさらにＡ～Ｅの5群に分けることができる。

1群は5基で形成され、玄室形態から見ると、3・4号墓が最も古く、7世紀中頃に成立し、1・3・35号墓が7世紀後半に築造されたと考えられる。

2群は前庭部を共有する3基の横穴墓で形成され、出土土器から見ると7世紀中頃に築造され、5ｂ号が7世紀後半まで追葬されている。

3群及び9群は時期的な変遷を追うものと考えられ、7世紀中頃の6ａ号墓から7世紀後半の6ｂ号墓、同じく7世紀中頃の7号墓から9群の36号墓、7世紀中頃の8号墓から7世紀後半の9号墓へ連続するものと考えられる。さらに12号墓は7世紀前半に築造され、その後7世紀末まで追葬される。

4群は7基の横穴墓からなり、出土土器の検討と横穴墓の形態から7世紀後半にすべての横穴墓が築造された可能性が高い。但し、このもととなる横穴墓は5群の15号墓及び18号墓から分節した可能性が高い。

5群は5基の横穴墓からなり、出土土器の検討と横穴墓の形態から、15号墓が6世紀末、19号墓が7世紀初頭に、18号墓が7世紀中頃に築造され、15号墓は7世紀末まで追葬され、19号墓は7世紀後半まで追葬される。7世紀後半には、15号墓から16号墓に、18号墓から17号墓へそれぞれ変遷していくものと思われる。

6群は3基の横穴墓で構成され、出土土器の検討から20号墓は6世紀末に形成され、横穴墓の形態から21号墓が7世紀半ば、22号墓が7世紀後半に築造されたと考える。

7群は9基の横穴墓から構成され、出土土器の検討から34号墓が7世紀中頃～後半に築造され、7世紀後半になると23・33・28・29号墓が築造される。さらに7世紀末になると31・27号墓が築造される。また、横穴墓の形態から32号墓は7世紀中頃に築造されたと考えられる。

8群は8基の横穴墓から構成され、出土土器の検討から7世紀中葉に58・59・61・63～65号墓の各横穴墓が築造され、玄室形態から60・62号墓も7世紀中葉に築造されたものと思われる。

なお、63号墓は礫床が4面認められ、7世紀末から8世紀初頭まで追葬された可能性が高い。

10群は前述の通りさらに細かく分かれる。しかし前庭部を消失しており明確な支群は不明であるが、横穴墓の分布状況から5支群に分類された。このうち、出土土器の検討から明確なものは、56号墓が7世紀中頃、54号墓が7世紀末に築造されている。玄室形態から検討すると、他の横穴墓は7世紀末に築造された可能性が高い。

このように検討すると、本横穴墓群は下段の中央にある15号墓及び20号墓が最も古く、上段の横穴群が7世紀後半から末に築造されているのが特徴である。

(4) 四日市上ノ原横穴墓群の副葬品と葬送儀礼の諸相について

本横穴墓群は、若干盗掘等の二次的変化を受けていたが、玄室、羨道部、前庭部において基本的に土器を使用した祭祀儀礼行為が認められた。横穴墓の祭祀儀礼については、大分県内では、三光村上ノ原横穴墓群（注1）・日田市夕田横穴墓群（注2）で詳細な検討がなされている。以下これを参考にしながら、本横穴墓群の葬送儀礼を復元してみる。

a　玄室内祭祀

本横穴墓群ではほとんど認められないが、8号墓、11号墓、31号墓、33号墓、38号墓で認められた。

基本的には、坏の蓋、身が認められることから食物供献儀礼が行われたと考えられる。特殊例として、33号墓ではシジミ貝殻片が一片出土しているところから貝皿として使用されたものと推定する。これらは、記紀に表された「ヨモツヘグリ」行為と考えられ、時期的には7世紀中頃から末まで認められる。

なお、11号横穴墓では7世紀末の追葬時に長頸壺が認められ、飲物用具として使用された可能性が高い。

b　羨道部祭祀

羨道部祭祀も玄室内祭祀と同様その数は少なく5b号墓、29号墓、34号墓、38号墓、39号墓、56号墓の6例に限られる。基本的には、坏身、蓋、あるいは塊身、蓋、高坏など食物供献儀礼用に用いる器種が多数を占めることから、玄室内祭祀と同様食物供献儀礼（「ヨモツヘグリ」）中心であるが、29号墓、34号墓のように長頸壺を使用した横穴もあることから飲物用具として使用されたものもある。時期的には7世紀中頃から認められるが、大多数は7世紀後半のものである。なお、39号墓では、玄室に敷かれた敷石を追葬時に羨道部に敷き変えたいわゆる「コトドワタシ」と考えら

れる特殊な例も認められる。

c　前庭部祭祀

本横穴墓においては、26基で確認された。これは全体のほぼ40%の横穴墓において認められ、この祭祀行為が最も顕著であると言える。これらの行為は以下の２パターンに分類される。第１パターンは土器を前庭部の左右肩の部分、あるいは基壇状の張出し部分に一括埋置した状態で検出されるものである。ここに見られる土器の器種は、坏の身、蓋、高坏、短頸壺、長頸壺、平瓶、横瓶などがある。これは、墓前において横穴墓に関わる人々が、飲食行為を行った後に一括埋置したことが推定される。さらに、15号墓においては、土器とともに馬具（鞍金具）、鉄鏃、刀子などが発見されていることから、本来馬を埋葬する代わりに馬具等を埋置することでこれに変えたものと推定される。

第２パターンは、前庭部全体に一括埋置した土器群と破砕散布した土器群（甕）が認められるものである。この行為は、死者（被葬者）との現世での別離を明確にしたものであり、記紀による「ヨモツヘグリ」と「コトドワタシ」の両者をあらわした儀礼と考えられる。

このような祭祀行為は、本来６世紀後半の横穴墓にその多くが認められるが、本横穴墓では７世紀中頃から後半に最も多く、古式の祭祀儀礼を保っているのが特徴である。

注）

(1)村上久和他『上ノ原横穴墓群』一般国道10分線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
大分県教育委員会　1989～1991

(2)村上久和　友岡信彦『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
大分県教育委員会　1999

第75表　四日市上ノ原横穴墓群形態一覧表

タイプ	平面形態	天井形態	時期	横穴墓番号	備考
Ⅰ類－a	正方形	ドーム		3、14、43	
Ⅰ類－b	正方形	家型	6c末～7c末	10、15、21、26、29、52、53、54、55	
Ⅰ類－c	正方形	四柱寄棟	7c末	4、45、48	
Ⅰ類－α	正方形	不明	6c末～	1、20、25	
Ⅱ類－a	横長長方形	ドーム	7c初～7c末	5b、6、8、19、31、37、47、57、60	
Ⅱ類－b	横長長方形	家型	6c末～7c末	5a、11、12、23、27、28、39、40、46、50、56、61、62、64、65	
Ⅱ類－c	横長長方形	四柱寄棟	7c末～	49、51	
Ⅱ類－α	横長長方形	不明		2、44、63	
Ⅲ類－a	縦長長方形	ドーム		7	
Ⅲ類－b	縦長長方形	家型	7c中～7c後	18、33、34、38、41	
Ⅳ類	横長楕円形	ドーム	7c中～8c初	5c、13、16、17、32、35、58	
Ⅴ類	無袖撥型	ドーム	7c末～8c初	59	
Ⅵ類	無袖小型長方形	ドーム	7c末～8c初	22、36	
Ⅶ類	不明			9、24、42	